



# ラストーン

～失われた都より～

5

**segakiyui**

## 1. 『風の申し子』

ユーノはすばやく宮殿と雪白（レコーマー）の距離を目測した。

「雪白（レコーマー）追いは？」

メーネを振り返ると、相手は青ざめた顔で応えた。

「『風の申し子』と呼んでいる者です。彼一人であの群れを扱えたので任せていたのですが.....彼がいせんわ」

さすがは一国の長だけあって、みるみるしっかりした口調になる。

ユーノは緊張して、押し寄せて来る雪白（レコーマー）の白い波に目を戻した。

興奮しきった様子の雪白（レコーマー）が宮殿を前に踏みとどまるとは思えない。夜会に興じる人々に避難を指示しても、皆豪華な夜会服姿、どれほど逃げる間もなく、踏み潰されるのは避けられないだろう。

（そんなことにはさせない）

ユーノは一瞬広間を振り返り、すぐにメーネに顔を向けた。

「王の雪白（レコーマー）はどこに集められるんですか？」

「この近くのテップの草原です」

「それはここからどちらの方向に？」

「その丘を越えた平原ですが.....ユーノ、あなた、何を」

メーネは不安そうに眉をひそめた。

「やれるかどうかわからないけど」

ユーノは紺の長衣を肩から落とした。メーネを振り向き、にっと笑って見せる。

「雪白（レコーマー）をそちらへ引っ張ってみます」

「そんな、ユーノ！」

無茶です、あなた、そんな。

抗議の声を上げたメーネに構わず、ユーノは鋭く口笛を鳴らす。

遠くですぐさま嘶きが応じ、騒ぎが起こった。ヒストが主の呼びかけを聞いて、厩舎を自ら 離れようとしているのだろう。それほど待つまでもなく、栗毛に額に白い星の馬が、闇を突いて駆け寄ってくる。

「ヒストーっ！」

メーネが手を伸ばすより早く、テラスの手すりを飛び越えたユーノは、吸い込まれるようにその背中におさまった。

「ユーノ！ いけません、危険です！」

メーネがうろたえた様子でテラスから身を乗り出して叫ぶのを振り返り、

「私一人で止められなかったら、アシャを呼んで下さい！」

「ユーノ！」

言い捨ててユーノはヒストを駆り、まっすぐに雪白（レコーマー）目指して走り出した。

鋭い叫びがテラスで響いた気がして、アシャはユーノの居る方を振り返った。

見つけたのはユーノではなく、テラスにすぎるようなメーネの後ろ姿だ。

（なぜあんなところに？）

ソクーラの貴婦人は社交に長けている。広大な国を近隣ともめることもなく巧みに保ってきたのは、その類稀なる美しさを生かした周辺諸侯との外交関係の保持力にある。ましてや、夜会で自ら中座するなどあり得ない。

（ユーノはどこだ？）

奇妙な不安が心を掠めた。

「姫君？」

音楽に酔い、料理に気持ちをほぐされて、まだまだ楽しむつもりの人々の間を擦り抜け、テラスに戻る。

「今、何か物音が」

「アシャ！」

メーネがはっとしたように振り返って、衣の裾を乱して駆け寄ってきた。

「あの方を止めて下さい。あの雪白（レコーマー）の群れを一人で扱うなんて.....『風の申し子』に

はできても、女には無理です！」

「女？」

(ユーノがいない)

瞬時にテラスを端から端まで見渡して、ひやりと冷たいものが流れ落ちた背中、緊張にそばだてた耳に深く重い振動音が届く。

「...、」

急いでメーネを通り過ぎ、テラスから眺める、夜闇を白く燃え上がらせる雪白(レコーマー)の大群、メーネの青い顔、脱ぎ捨てられた紺の長衣、そして再び、雪白(レコーマー)の群れへと。

すぐに目当ての栗色の馬を駆る人間は見つかった、奔流のような広がり呑み込まれていきそうに頼りなく。

「あの...ばか！」

冷えた血潮はすぐに強烈な怒りにとって変わった。

「アシャ...」

「姫君、ご心配なく！　すぐに私が行きます！」

言うや否や、アシャもテラスから身を躍らせた。高く口笛を吹く、応じて走ってくる馬に飛び乗りながら、心はもっと早く先を走るユーノへと飛ぶ。

「アシャ！」

「は？」

悲鳴じみたメーネの声にかろうじて振り向けば、相手は珍しく不安そうな顔になっていた。

「あなたを、あなたを引き止める絆というのは、ひょっとして」

「.....失礼、姫君！」

震える唇と青い瞳がアシャの挙動から何を察したか想像はつく。そこまで自分が我を失いかけていることに気づいて、アシャは舌打ちしながら息を吐いた。

(間に合うか?)

ユーノはヒストにぴたりと体を同調させて、馬を駆り立て続けた。

近づくに従って、雪白(レコーマー)の群れの大きさが実感として迫ってきた。

昼間見た群れの十倍はある。それに、さすがに王の雪白(レコーマー)というだけあって、雪白(レコーマー)自体の大きさもかなりのものだ。白い毛に空気を含ませて大地を蹴立てて走っているところは、巨大な白い渦に巻き込まれていくような恐怖を感じさせる。

(だけど、一体何に怯えたんだろう)

突風や雨風はない。突然の光、稲妻の気配もない。

(こんな夜に、逃げ回りたくなるほどの恐怖を何に感じた?)

雪白(レコーマー)以外は穏やかに静まり返った夜だ。

(とにかく鎮めなくちゃ)

ユーノは何とか先頭の雪白(レコーマー)に追いつこうとしてヒストを駆り続けた。

白い奔流は次第に流れの形が変わってきて、背後から回ってきた雪白(レコーマー)がヒストのもう片側へ迫り始めている。うかうかしていると、群れの中へ完全に取り囲まれて、死の激走をしなくてはならなくなる。

「はいっ！」

ユーノはヒストの速度を上げた。

見る見る、呑み込まれかけた雪白(レコーマー)の群れから抜け出していく。

獲物を逃がしたと言いたげに、ミアアアア...と唐突に一頭の雪白(レコーマー)が声を上げる。周囲の雪白(レコーマー)も次々と鳴き始め、その声は群れ全体に広がった。

物悲しく澄んだ声が辺りの空気を震わせていく。

(何と言う.....音...)

雪白（レコーマー）の声に呼び覚まされるように、ユーノの胸に憂いが満ちた。哀しみが、切なさが、かきたてられて、心の傷に染み通っていく。

哀しい...哀しい.....己の存在がこれほどまでに哀しい。

（どうして.....生まれてきたんだろう）

ぼんやりとそう思った。

（どうして.....女なんかに生まれてきてしまったんだろう...）

本当は、魂だけは男のもので、それがたまたま女の体に宿っただけのことなのだろうか。

そうでないとしたら、何のために男にもなりきれず、女にもなりきれず、こんなに中途半端な心と体を抱えて、生きていかななくてはならないのだろう。

想いを抑えて、押さえ込んで押しつぶして.....そうしてユーノには何が残るといふのだろう。

（ア...）

寂しさに思わず心の中で名前を呼ぼうとし、ユーノは微笑して首を振った。

その名はレアナが口にするのにふさわしい名だ。レアナが求めるのにふさわしい男性だ。幾度も幾度もそう言い聞かせてきたではないか。夢の中でさえも止めるのにためらって、唇を固く引き締めたではないか。

それは違うのだ、と。

それは自分に向けられている好意ではないのだ、と。

ユーノはレアナの身代わりで、だからアシャを守るのは当然で、それでもそうして守ったアシャの想いが、ユーノを通り抜け、遙か故国、セレドのレアナへ向かうのもまた当然のことだ、と。

（どうして男に生まれてこなかった？）

ゼランも言ったではないか、「皇子でないのが惜しい」と。父も言ったではないか、「おまえが男であったならば」。母はいつも困ったような表情で言った、「姫の服装は嫌いなのですか」。

（うん、母さま）

ユーノはいつもそう応えた。

うん、母さま。私、生まれ間違っただけだね。

そうね、と母は美しく微笑み、溜め息まじりにユーノのドレス姿を見つめる、「もっとよい仕立てを選ばなくてはなりませんね」.....。

（仕立ての問題じゃない、よね？）

周囲の者の目を見ればわかる、どこまで飾っても少女の華やかさにはほど遠い、と。

（それでも）

夜中にそっと美しい衣を抱き締めてみたことがある、と、誰に言えよう？

「っ」

つう、と頬を伝った熱いものに我に返った。

いつの間にか、かなり宮殿へと近づいている。

周囲では、あの切なくも美しい雪白（レコーマー）の声が響き続けている。どうやらその声には、ある種の催眠効果があるようだ。人の心の哀しみを引きずり出し、そこに浸らせ眠らせてしまう力が。

（くそっ！）

ユーノは首を振って涙を払った。

メーネがいる宮殿は目の前だ。そのテラスに、真っ白い貴婦人の姿が身じろぎもせず立っている。その姿が見送っているのは、前方斜め横から全力疾走してくる馬上、深緑の長衣の騎士に他ならない。

（アシャ！）

ユーノはきつく唇を噛み締め、手綱を握り直した。

アシャに泣き顔など見せるわけにはいかない。

先ほどからの追い立てが効を奏したのか、雪白（レコーマー）の群れはゆっくりと進路を変えつつあったが、右手のトップの草原にもっていくためには間に合わない。

（どうする？）

むせかえる熱気、獣の体臭が大気に強くこもり、暴走は勢いを増している。大地を蹴る雪白（レコーマー）達の重い蹄の音、荒い呼吸音が天も地も揺るがせている。

ふと一瞬、前方に道が開いた。とっさにそこへヒストを進める。

「はあっ！」

声を上げて人馬一体となって駆け込んでいく、その勢いに恐れをなしたように雪白（レコーマー）達に動揺が走った。より一層ヒストを駆り立てて、ユーノはじわじわと強引に向きを変えていく。右側の雪白（レコーマー）が少し右へ流れ始めた。引きずられるように、残りの雪白（レコーマー）達

も向きを変え始める。

(まだまだっ！)

汗が流れてくるのを片目をつぶって振り払い、なおもユーノはヒストを右に寄せた。寄せられた雪白(レコーマー)がうろたえたように逃げる。なおも寄せる。じわりと寄せる。逃げる。雪白(レコーマー)がじりじり逃げる。

テップの草原までヒストの走力がもってくればいい。そうユーノは思った。緊張に強張っていく心をなだめる。

(落ち着け、まだ生死の境というわけじゃない)

「ユーノッ！」

アシャの声が背後から響いて来た。微かな甘さを感じて心が緩みそうになるのを堪える。まだ雪白(レコーマー)の催眠効果が残っているのだろう、鳴き続ける雪白(レコーマー)の調べに心を奪われるまいとして、ことさら前方を見据えた。

テップの草原はもう少しだ。左手に小川、あの右側へ雪白(レコーマー)達を回り込ませていけば、後は自然と草原に向かうだろう。

ユーノは目を細めた。乱れる呼吸を整える。

群れの左へ完全に出てしまってから、雪白(レコーマー)の群れを凌駕する速度で行く手を遮るように、かなり無茶な回り込みをする。怯えた雪白(レコーマー)が押し合いへし合いしながら、急速に進路を変え始める。

もう少し、そう思いつつ、群れに目をやって、

「え？」

一頭の一際巨大で美しい毛並みの雪白(レコーマー)の背中に、ぐったりと身を任せている青年をみつけてぎよっとした。揺れているのに加えて、雪白(レコーマー)の毛に見え隠れするのでよくわからないが、まだ年若く、かなり整った目鼻立ちだ。

容貌と印象に、アシャを、続いてイシユタを思い出した。共通した、奇妙な端正さ。

(視察官(オベ)、か？ ここにも『銀の王族』が？)

そちらについて、注意が逸れた。

「っっ！」

ヒストの嘶きに我に返った時は遅かった。すぐ目の前に小川の岸が迫っている。

(まに、あわ、ない！)

ユーノは必死に馬首を巡らせた。テップの草原の方へヒストを向けたが、不意のことでさすがに体がついていかず、体重の軽さが災いして空に浮いた。

「く...っ」

手綱を握ったままではヒストを巻き込む。とっさに手を開く。

「ユーノ!!」

間近にアシャの声が流れ、ユーノはそのまま小川へ勢いよく放り出された。

バツシャーん!!

激しい水音が響いた。

流れの浅さにしては奇跡的な運の良さで、片腕を岩に擦った程度で水の中から起き上がる。

「ぶ、ふっ」

詰めていた息を吐いて、ユーノは濡れた髪をかきあげた。忘却の湖での闘いを体が無意識に思い出したのか、それとも冷えた夜気のせいかわからない、細かく震える体を抱き締める。

(涙も消えた、な)

ほっとして苦笑しながら顔を上げ、ようやく一息ついたと言いたげにテップの草原へ三々五々散っていく雪白(レコーマー)達を見やる。

(さっきの人は...)

体を擦りつつきよろきよろしていると、荒々しい蹄の音が響いた。

「ユーノっ！」

すぐ近くで止まった馬から人影が飛び降り、荒々しい苛立った様子で駆け寄ってくる。

「……やあ、アシャ」

相手は怖い顔でユーノをねめつけた。止める間もなくユーノの手首を掴み、水の中から一気に彼女を引き上げる。

「やあアシャ、じゃない」

苦くて重い声で唸る。

「無茶はしないと云ったはずだな」

険しい響きの罵倒、けれどそれがひどく温かく感じられて、ユーノは思わずアシャを見つめた。

「寒いのか？」

ユーノが震えているのに気づいたのだろう、アシャは手早く長衣を脱いでユーノの体を包む。

「怪我は？」

「大丈夫。少し擦ったぐらい」

「見せてみる」

ユーノの片腕を捻るようにして傷を調べたアシャが、ほう、とどこか悩ましい溜め息を漏らす。

「本当に…」

傷から掬い上げるようにユーノを見抜いた紫の瞳が、暗闇で不思議に明るく輝いて見えた。揺らめく炎のような光が長い睫毛で数回遮られる、それについて引き寄せられるように見上げてしまう。

(幻術のようだ)

ただ数回の瞬きで、これほど人の心を吸い寄せる瞳。

「俺を、殺すつもりか」

低く震える声が響いたのが、夢うつつのように聞こえた。

「どれだけ人を心配させたら気が済む」

ぶつりと切れた沈黙がひりひりと痛い。

「え、だって」

ソクーラの貴婦人はアシャの大事な人だ。その人の宮殿はやはりアシャの守りたいものだ。あそこにはレスファート達も居る。大事なものを守るために自分のできることをして何が悪い。なぜ責められる。

「だって…」

それこそがユーノの居る意味、ではないのか。それこそが仲間である、ということではないのか。

ましてや、ユーノの想いは、きっとこういう形でしか全うすることはできない、だから。

「俺は」

アシャが覗き込む。紫の瞳が薄赤く激しく燃えているように見える。

「俺は、お前を」

「っ」

だめだ。

何か、わからない、けど、だめだ、とてもまずい何かが起ころうとしている。

ユーノの身の内が見る見る竦むのがわかった。耳に響く嘲笑、脳裏に閃く困惑した顔、人々の囁き声、隠そうとして隠し切れない忍び笑い。

ナンテミットモナイ。

(だめだ)

私では、だめだ。

慌てて目を逸らし、戻ってくるヒストに気づき、はっとする。

「アシャ！」

「…なんだ」

振り向いた相手は一瞬眉を寄せて哀しそうに見えた。

「人を見つけた」

「何？」

「あの雪白(レコーマー)の背中に、男の人が乗っていた。ひよっとして『風の申し子』って、あの  
人じゃないのかな」

「背中に？」

アシャがユーノの指差す先を振り向く。

「…そこで待ってる、動くなよ」

「うん」

ユーノを放し、馬に再び飛び乗って、雪白（レコーマー）達を調べに行くのを見守っていたユーノは、頬に鼻息がかかってくるのに振り返った。

「ヒスト」

馬は頷くように頭を上下させ、ユーノの肩に鼻先を押し当てた。

「ご苦労様」

ことばを理解しているように、ヒストは彼女を見つめている。その目が、巻き付けているアシャの長衣に注がれている気がした。

「アシャのだよ...濡らし、ちゃった」

唇を噛む。泣きそうになるのを堪える。

「.....また、へま、やって.....迷惑、かけた」

吐き出せなかった弱音を、ヒストになら吐き出せた。

「せっかく、あの人が、アシャに用意したものなのに.....ひどいよね。なのに、それが」

ちょっと今、嬉しいんだ、私。

「あったかくて、ほっとする」

柔らかな熱の匂い。微かな体臭に寛ぐ。

「まるで、アシャに」

(抱き締められている、みたいだ)

あり得ない幻の続き。

いつかの抱擁を思い出す。

あれもまた、今と同じ、ユーノの体を親身に案じてくれている優しい思いやりの一つなのだろう、愛するレアナの妹に向け、自分を助けた国の皇女への恩義として。

「苦しいよ...ヒスト」

なぜ優しいんだろう。

なぜ温めてくれるんだろう。

なぜ抱き締めてくれるんだろう。

受け取るたびに、自分がそれに慣れそうで不安になる。慣れた瞬間に奪い去られる痛みを思う。

「戦ってるほうが.....まし、だな」

剣を振り回し、命のやり取りをしている間なら、どこまで行っても報われない、こんな想いを捨てられる。

「ユーノ！」

声が響いてびくりとした。

「メーネへ伝言を頼む！」

一頭の雪白（レコーマー）に馬を寄せ、その背中から青年を苦労して移しているようだ。

「わかった！」

顔を強く振る。涙が散る。離れているからわからない、側に居ないから気づかない、ユーノがどんなに顔を歪めて傷みを堪えていても。

(所詮)

「すぐに行く！」

叫び返してヒストに跨がる。濡れそぼった衣が冷たい。手足が冷えきって強張っているのを、強く数回叩いて温める。

(こんな役どまり、伝言、繋ぎ.....誰かの代理)

だが、それを何度思い知らされても。

(どうして諦めきれない?)

夢は夢だと。

それは幻にしか過ぎないと。

(誰か心を殺して)

アシャへと傾く一方の、この気持ちを。

ユーノはきつく唇を噛んで、宮殿へ駆けた。

(ああ、また雪白（レコーマー）が鳴いている)

与えられた一室、横になるとそのまま吸い込まれていきそうになるベッドで、ユーノはうつぶせに身を沈ませ、ぼんやりと考えている。

四肢から力を抜き切ろうとしても、心のどこかに本能的な緊張が残っていて、もし誰かがいきなり部屋に入ってこようとすれば、瞬時に側にある剣に手が伸びるだろうとわかっている。

『剣を、ですか？』

ミノの不審そうな声が耳に戻ってくる。

『ここは安全ですのに』

幼い顔立ちに微かに浮かんだ怒りは、客人が見せた自分の主人への警戒に対するもの、敬愛する主の支配下で安らげないと伝えられるのは、主を貶められるのと同じだと伝えている。

(ごめんね、ミノ)

ユーノは心の中で謝った。

どうしようもないのだ。今まで剣を体から離して眠りについたことなど、ほとんどない。そうしていなければ、次の日の朝日は見られないと知っていたからだ。

ミアアアア.....と、高く澄んだ雪白(レコーマー)の音が響く、重く静まり返った闇を刺し貫いていくように。

思い出すともなしに、幼い頃のことが甦る。

いつものように、カザドが攻めてきた翌日のことだった。連夜の闘いに疲れ果てて、いつベッドに転がり込んだのかの覚えもなかった。

目を覚ましたのは額に当てられた白い手のせい、まばゆく日差しがちらつく中に、母の姿が浮かんでいた。

「どうしたの？ うなされてましたよ」

薄紅の唇で微笑んだ母が、心配そうに言った。

「母さま...」

日の光が目にも痛いほど、なぜかふいにほっとして、ユーノは微かに囁いた。

「怖い夢でも見たのね、ほら、こんなに汗をかいて」

母の白く美しい指先が額と頬を辿っていく。柔らかに広がる花の香り、出入りの商人が運ぶその香水は母の面差しによく合う。

陶然とその甘さに酔いながら、ユーノは無意識に手を伸ばしていた。

母の胸へ、何もかもが許されているのだと言いたげな、懐かしくも温かい腕の中へと。

「ユーノ...」

母は囁いて、体を起こしたユーノを支えようとするように、そっと彼女の方へ手を伸ばした。

「何かあるなら話してちょうだいね。私はあなたの母さままでしょう？」

怖い夢。

そうなんだ。ひどく怖い夢に毎日うなされているんだ。明日は母さま達の顔がみれなくなるんじゃないかという、竦むような孤独な夢に。

そう打ち明けることが、今ならできそうな気がして、幼いユーノは安堵に泣きそうになりながら母の腕に触れた。

もう大丈夫だ、母はきっとユーノを庇ってくれるだろう。ユーノのことばを信じ、守ってくれるだろう。背後に忍び寄る影を心配せずに、ようやく幸せな眠りにひたれるようになるだろう。

「母さま...」

掠れた声を絞り出す、期待に震えながら。

けれど。

「母さま！」

いきなり開いた扉から、泣きながらレアナが飛び込んできて、ユーノはびくっと手を引いた。

レアナは白い寝衣の裾を乱して、振り返った母の腕の中へまっすぐに飛び込む。

(あ...)

ずきり、とユーノの胸に痛みが走った。

「あらあら、どうしたの、レアナ」

「母さま！ 母さま！」

泣きじゃくりながら、レアナは母をしっかりと見つめて訴える。

「怖い夢を見たの！ とっても怖い夢を見たの！ 怪物が出てきて、私を食べようとするの!!!」

「まあ、かわいそうに。でも、大丈夫よ、母さまが守ってあげますからね」

「だって.....だって.....」

レアナは泣き続けながら母の胸にしがみついている。そして母もまた、レアナを強く抱き締めている。

その二人をじっと見つめていたユーノは、ほんの少し、首を傾げる。

額に髪が乱れ落ちる、さらさらと、小さな、レアナの泣き声に消されてしまう、聞こえない音をたてて。

(母さま)

声にならない声が胸の内にひたひた満ちる。

(母さま。私、本当に、怪物に食べられちゃうかも知れない)

言いたかった。

しがみつ、泣きじゃくり、地団駄踏みながら、夜ごと襲う恐怖と不安を訴えたかった。

母はきっと驚くだろう。いろいろと尋ねてくれるだろう。ユーノも抱き締めてくれるかも知れない。今、レアナにしているように髪を撫で、キスをくれ、優しく慰めてくれるかも知れない、だが。

(言って.....どうなる?)

誰がどうすればいい、という単純な話ではないのだ。

カザドがセレドを密かに狙って攻撃を繰り返しているとわかれば、この平和な光景はたちまち崩れ、国はあっという間に戦乱に巻き込まれていくだろう。戦うことを随分昔に忘れてしまった民は、蹂躪されもがいたあげくにのたうち倒れていくのだろう。

それはいつか起きてしまうかも知れない。

けれど、今日の前にある、この穏やかな光景を壊す権利は、ユーノにはないような気がした。

たとえ、その中に、ユーノが永久に入れなくても、守ることはできる、大事な人を、大事なものを。

胸の内を吹き抜けていく風に、カラカラと何かが鳴る。それは冷たく、物悲しい音だった。

「母さま」

ユーノは静かに声を掛けた。

さきほどのユーノへの気遣いを忘れたように訝しげに振り向く母に、眠たそうに装って笑って見せる。

「私、まだ眠いや。もう少し寝るよ」

「そう? .....じゃあ、レアナ、こちらへいらっしゃい。ユーノはまだ眠いんですって」

母さまの側であなたも少しおやすみなさい。

柔らかな声で言い聞かせながら、まだしがみつくレアナを伴って、ゆっくり扉の外へ消えていく。

扉が閉まると、ユーノは微笑みを消した。汗まみれになって湿っている寝床の中へ再び伏せる。この間受けたばかりの傷が、引っ掛けたのだろうか、ずきずき痛んだ。体を丸め、掛け物を深く頭まで被り、傷めた足首を抱え込む。

そうしてしばらくしていると、微かな安堵感が広がってきた。痛みも薄れ、そっと手を離す。そのまま、自分の腕で胸を抱き、体をより深く曲げて、小さく丸くなっていく。寝床の中で、これ以上小さくなれないほど体を竦めたとき、ようやく一筋、頬を涙が伝った。

「ふ.....うっ...」

(怖いよ)

零れる涙がことばを解放する。

(怖い.....母さま.....父さま.....姉さま...)

どこへも届かぬとわかっているから上げられる悲鳴だった。

誰も聞かぬとわかっているから吐き出せた弱音だった。

「ふくっ」

声が漏れそうになって、顎を胸に強く押し付け、顔を伏せ、声を飲み込み。

ユーノは静かに泣き続けた.....。

(あの時はまだ怪我が直っていたからましだった)

思い出して苦笑う。

(一度なんか、まともなばれそうになったっけ.....)

一、二年前のことだ。

その日、ちょっとした油断から、ユーノは深手を負って皇宮に戻って来ていた。

ベッドに寝ると血で掛け物を汚してしまうからと、部屋の隅で布を押し当て、止血しながら横になっていた時、母が急に入ってきて驚いた。

「ユーノ? これをごらん下さい。明日の夜会用に作らせたのだけど」

母が手にしていたのは銀白のドレスだった。

「.....どこにいるの？」

「ここだよ、母さま」

慌てて怪我をした片手を部屋着で隠しながら、椅子に座ったユーノの隣に母は腰を降ろした。

「どうかしら」

「きれいだね...けど、私はあんまり...」

「でもきっと、今度はあなたにも似合うと思うのよ。レアナもセアラも、とてもよく似合っていたから」

「うん...でも...」

腕ばかり押さええては妙に思われる、かといって、止血できていなかった傷からはどんどん血が流れていくのがわかる。

疲労と出血で朦朧としてきて、母が見せているドレスが霞み、一瞬視界を失ってことばを切った。だが、母は気づかぬ様子でことばを継いだ。

「ユーノ、あなたもそろそろ、少しは娘らしく振る舞わなくてははいけませんよ。わかっているでしょう、あなたはセレドの皇女なのよ。いつかは立派な殿方と連れ添い、穏やかで幸せな暮らしをするよう心がけなくては」

「できる、かな」

眩む視界を必死に瞬きしながらつぶやき、乱れる呼吸を整える。それでもぐっと深い場所に落ち込みそうになって、二度三度、無意識に首を振った。それを母は否定と取ったらしい。

「できるできないではなく、努力しなくては。皇女には皇女の務めがあります。それに」

できますよ、私の娘なら。

説得する声には思いやりと優しさが溢れている。

「そう...だね」

ユーノは一瞬込み上げた吐き気を何とかしのいだ。

「うん...それ.....着て、みるよ」

「ユーノ？」

母が唐突にこちらを覗き込んで、体が竦む。

「顔色が悪いわね。気分でも悪いの？ そう言えば」

妙な臭いもするようね、何でしょう。

立ち上がって、今にも部屋中を探そうとする母を、ユーノは慌てて引き止めた。

「あ、昼間、剣の練習をしてたん、だ」

「剣を？」

不審そうに振り向く母に苦笑して見せる。

「そのとき、急に飛び出てきた鳥がいて、傷つけて、しまったから」

「まあ、ユーノ、何てかわいそうなことを」

母がくつきりと眉を寄せた。

「命あるものを傷つけてはだめですよ。その剣も放っているのはなおいけません」

ちゃんと手入れして片付けておきなさい。

「はい、わかって、ます」

「生き物は全て精一杯生きているのだから、大切に守らなくては。遊びで傷つけるようなことがないようになさい」

遊びで。

胸を貫くそのことばに吹き上がる傷みを、必死に笑みの下に噛み殺す。

(ならば、母さま)

私が死んだ方がいいのかな。

「それではおやすみなさい、ユーノ」

「...おやすみなさい」

ユーノのとぎれとぎれのことばを、ドレスを不快がったととったのか、母は小さく溜め息をついて静かに部屋を出て行った。

「.....遊びで、か」

つぶやいてまた込み上げる吐き気に冷や汗をかきながら、部屋着の上から傷を押さえる。見下ろすと、その下には血溜まりができています。妙な臭いとはその血の臭いだったのだが、母が気づくはずもない。体は鉛のように重くなり、足の力が抜けていて、椅子から立ち上がれなくなっていた。

「あそ、び...」

剣がただの遊びであったのなら。

ユーノのドレスを着ない理由が、ただの好みであったのなら。

広げられたドレスを霞む目で眺める。

確かに美しい。確かに見事だ。確かにそれは大切に仕立てられたものだ、けど。

ユーノの生きている世界とあまりにも遠く関係がない。

(誰も、わからないんだ)

「ふ...っ」

視界が真っ暗になった。そのまま気を失ったのは、傷だけではない、どこまで落ち込んでも果てのない、孤独という闇の感覚を自覚したからかもしれない。

(あのときはゼランが面倒を見てくれたっけ)

母さま達には内緒ですね、と頼もしく笑ってくれたのを僅かに心の支えにしたが、それも。

(当たり前だな、敵だったんだから)

苦しくて切なくて、シーツを掴んでベッドに体を押し付ける。噛み締めた唇には、あの日と同じ鉄の味がしている。眉をしかめ、辛い記憶を忘れようとしても、思い出は怪我を重ねるたびに孤独の色を深めていく。

(どこまでいっても、どんな目にあっても)

助けなんか、こない。

部屋の外では、ミア.....ミアア.....ミアア.....アアア...と、まるで呼び交すような雪白(レコーマー)の声が響き続けている。

(だめだ.....今夜は本当にどうかしている)

何を考えても、どれだけ気持ちを逸らそうとしても、何度も何度も心が記憶に舞い戻る。

「くそっ」

しばらく激情に耐えていたユーノは、ようよう力を抜いて、体を起こした。枕元に置いてある深緑の衣に目をやる。小川の水に濡れたのは乾かしたが、まだ返していないアシャの衣。

(このせいも、あるのかな)

未練がましく側に置いているから、こんな気持ちに囚われるのかもしれない。明日には絶対返してしまおう。

「うん」

小さく頷いて、ベッドから滑り降り、窓を開けた。

静まり返った夜の空気は清冽だった。遠く近く、風に乗ってうねるように波打ちながら響いてくる雪白(レコーマー)の声も、その夜気の中ではさっきほど甘い切なさと呼び起こさない。

「...大丈夫」

言い聞かせる。

「まだ、大丈夫」

一つ深い溜め息をついて窓を閉めようとしたユーノは、ふと、宮殿の影からにじみ出るように離れていく人影に気が付いた。気配を消し、するすると去って行く姿は、どうもただ事ではない。

「誰だ！」

鋭く一声問うと、人影はびくりとしてユーノを振り返った。

あの淡い金髪と、エメラルドの瞳には覚えがある。

「『風の申し子』？」

「見つかってしまったか」

雪白(レコーマー)の背中で気を失っていた青年は苦い顔でつぶやいた。

「一体、どうして、こんな夜更けに？」

知らせを聞き、それでも周囲を慮ってユーノの部屋に集まった顔の中、真っ先に問い正したのは、メーネだった。

「まさか、あなたがラズーン支配下（ロダ）にいるとは思わなかった……とんでもない失態だ」

『風の申し子』は難しい顔でつぶやき、どこかまばゆそうな目をしてアシャを見た。相手が浮かべた複雑な微笑にすぐに目を逸らせ、メーネ、イルファ、ユーノと視線を移して、再びメーネを見つめ、深く頭を下げる。

「申し訳ありません、お許し下さい、姫。お話しできない私の役目があるのです」

「……察していました」

メーネは厳しい顔で頷いた。

「おまえには何か秘密がある。話せるところまで教えてくださいませんか」

「それは…」

『風の申し子』、本名リーク・スリフはためらうように口ごもった。一瞬アシャに視線を投げて、何かの返答があったのだろうか、軽く頷き、話し始めた。

「実は、姫君、私がこの国へ参りましたのは、一人の少年を探すためです。少年の名前はアルト・デイヴィ。少し前まで、王の雪白（レコーマー）の世話をしていたとはわかっておりますが、数日前、突然行方不明になりました」

アシャがぎくりとした顔でリークを見つめた。心なしか青ざめた顔でリークがもう一度頷き、目を伏せる。

「おそらくは、私の敵に……攫われたものと思います」

「……アシャ」

唐突にメーネが口を挟んだ。

「その敵とは、あなたの敵でもあるのではないですか」

「……」

アシャは応えない。曖昧な笑みを浮かべてメーネを見返すだけだ。

しばらくの沈黙の後、メーネが寂しく笑って話を再開する。

「……『風の申し子』、それで、どうして今頃、どこへ行こうとしているのです？ おまえは先ほどまで気を失っていたのですよ」

「そう、情けないことに」

激しい調子でリークは吐き捨てた。

「アルトを探しにでかけて、見事、奴らに返り討ちにあったというわけです。だが、ここでぐずぐずしていれば、アルトは見るも無惨な殺され方をすることになる」

ぎりっと歯を強く噛み締める音が響いた。

「どうぞ姫君」

リークはメーネの前に跪いた。

「行かせて下さいますように」

「…アルトのいる所はわかっているのですか」

「テップの草原、王の雪白（レコーマー）達が草を食む外れの『晶石の谷』か、と」

「…あそこに」

一瞬息を詰めたメーネは、やがて重々しくことばを継いだ。

「おまえ一人で行くつもりですか」

「私の役目ですから」

「無理です、その体では」

「しかし、姫！」

リークは激した声を張り上げて食い下がった。

「これは全てのことに優先させねばなりません。何があろうとも優先させねばなりません。さもなくば、我らがラズーンは、いや、この世は滅亡の運命を逃れられないのです！」

「ラズーンの滅亡？」

ユーノが聞き返したとたん、リークの顔が真っ白になった。ふいに、今日の前に居るのはメーネだけではないと我に返ったように瞬きし、しゃべりすぎたという顔で、黙って腕を組んで壁にもたれているアシャを見やる。だが、相手の表情で、その自分の動きがますます多くを語ってしまったと気づいたらしく、かわいそうなほど肩を落とした。

「わ、私は...」

「『風の申し子』？」

穏やかな、けれど譲らぬ強さでメーネが真実を告げるように迫る、その声にリークがきつく唇を噛む。なおもちらちらとアシャを伺う、その気弱さにアシャが軽く眉を寄せて目を伏せた。

「...この問いは」

違う人間に尋ねるべきものですか。

「ひ...姫」

メーネの問いかけた先は、リークであってリークではない、おそらくは無言でリークに圧力をかけて肝心の部分を黙らせているアシャだろう。

「姫君」

ユーノは口を開いた。

「彼の手助けをしたいのですが」

「っ」

アシャが目を見開いた。ユーノを見る、その視線をまっすぐ見つめ返すユーノに、メーネが痛ましげに問う。

「どうしてですか、ユーノ」

なぜあなたが。

「.....自分が守ろうとした相手の生死を案じる気持ち、ボクには痛いほどよくわかります」

「冗談じゃない」

アシャが唸った。ひやりとした殺気を滲ませた声、森林の闇に潜む鋭い牙を持った獣がかくやと思ような獐猛さを響かせ、メーネが驚いたようにアシャを振り向く。

「この前死にかけてから、ほんの少ししかたっていないんだぞ」

怒鳴りつけはしないが、その怒りの響きは部屋を圧する。

「ボクは今、生きてるじゃないか」

平然とユーノはアシャを見返した。燃え上がるような紫の瞳ににやりと笑う。

「それに」

どれだけ激怒しようと、今ユーノはアシャを制する大きな鍵を手に入れている。

「ラズーンの危機、なんだろう、アシャ」

「.....」

じろり、とアシャは冷たい視線をリークに向けた。

「あなたが動かないはずはないよね？」

「.....俺は」

「一人で行くつもりだった？ それこそ冗談じゃないよ」

ボクが大人しく待っているとでも？

「.....ユーノ」

深く重い溜め息をつく相手に、イルファがきよとんとした顔で不思議そうに問う。

「何唸ってるんだ」

ユーノとアシャを交互に見る。

「いろいろと世話になったのだから、『貴婦人』のためとあらば、おおももちろん一肌脱ぐのは当然だ。しかも、ラズーンの危機なのか？ いずれ戦になるんだな？」

「.....」

アシャは険しい顔でなおもリークを睨みつけ、リークはうろたえた顔で首を竦める。

「戦になるのなら、その前に邪魔な奴は倒しておくのがよい、ユーノの考えはまこと正しい。それに何の文句があるんだ、アシャ」

「文句はない、ただ」

こちらを見やったアシャの瞳が一瞬妖しいほど悩ましい色に濡れたように見えた。

「ただ、何ですか、アシャ」

「...いえ、まあ」

はあ、と大きく溜め息をついて、アシャが垂れてきた金髪をうっとうしそうに片手でかきあげる。

「私もあなたには恩恵を受けている。早急に『晶石の谷』に出向いてさっさと始末をつけることにしましょう」

「そんな！ あなたに来て頂くなんて、アシャ・ラ...」

「ん、ん！」

アシャのことばを聞いたリークが興奮して遮ろうとしたのを、アシャが鋭く切った。

「あ、あ、うっ...」

リークがひくりと顔を強張らせて息を呑む。さっきよりなおうろたえて周囲を見回す、その様子にメーネがはっとしたように瞬いた。

「アシャ.....？ あなた.....もしや...」

「姫君」

アシャが静かに口を挟む、だが、その制止にも止まらずにメーネは見る見る顔色を変えて、白くなった唇でそっと、

「まさか、あなたはラズーンの」

「ラズーンの？」

「リーク」

繰り返したユーノを無視するようにアシャがリークを振り向く。

「『晶石の谷』攻略について話し合おう、時間はない、そうだな？」

自分を置き去って進む話、ユーノは急いで食いついた。

「じゃあ、ボクも行く、それでいいんだね？」

「.....仕方なからう」

むっとり呟いたアシャが小さく舌打ちして、リークはおどおどと俯いた。

「先ほどの失礼をお詫びいたします」

一通りの話をまとめて、僅かな休息を取りにそれぞれの部屋へ戻る中、アシャは先に行くメーネにそっと声をかけた。

「.....あなたは視察官（オペ）だったのですね」

背中を向けたまま、無言で足を進めていたメーネが振り返り、諦めたような優しい笑みを返してくる。

「それも、視察官（オペ）中の視察官（オペ）、ラズーン支配下（ロダ）を歩き回っているなどとは思ってもせぬ視察官（オペ）.....ラズーンのアシャ」

「よくご存知です、『貴婦人』」

そう応えるしかなかった、メーネの聡明さの前では。

「でも、一体どうして.....なぜ、『あなた』が？」

「.....」

直接知っているわけがない、公に知らされるわけもない、それでも賢明な思考は軽々と真実を見抜く。

応えぬアシャに相手は寂しそうに笑みを深める。

「そう...応えないのでしたね。でも一つだけ、私には聞く権利があるはずですが.....あなたに気持ちを捧げる者の一人として.....あなたを引き止める絆とは何ですか」

青く澄んだまっすぐな瞳にアシャは苦笑いする。

「少女です」

自分の声が怯まないようにしっかり応えた。

「もし彼女が望むなら、いつでもどこでも、その側に居てやりたいと思う、ただ一人の」

「そ...う」

メーネは目を伏せ、滲みかけた涙を飲み下すように数回瞬きした。

「あなたのそのような笑みは...初めて見ました」

掠れた声で続ける。

「セレドのレアナ姫.....美しい女性だと聞いています」

「.....」

セレドのレアナなら納得する、そう聞こえて、アシャは複雑な思いになる。

（そうじゃない）

レアナではない、アシャの忠誠を捧げる相手は。

だが、それを今口にして一番恐れることは、目の前の美姫の拒否ではなく、他に想う男が居るかもしれないユーノを傷つけることだ。傷ついたユーノが二度と自分に身を委ねてくれなくなることだ。

「だから、あの少女を守るのですか」

「え...」

「ユーナ・セレディス、彼女はレアナの妹ですね？」

「それは」

いつユーノが何者かに気づいたのか、そう驚いたアシャに、メーネは訝しげに眉を寄せる。

「少女……？」

「『貴婦人』、私は」

「……アシャ……私は、ひょっとして」

勘違いをしているのでしょうか？

「セレドのレアナ姫は、少女と呼ばれるような方ではありません……ね？」

自分を見上げる澄んだ瞳に、アシャはことばを失った。

## 2. 『晶石の谷』

「ミアア...」

「うっ」

目の前に真っ白の毛の塊そのままの、王の雪白（レコーマー）の一頭がのっそりと立っている。手をかけようとしたとたん、不安そうに鳴かれて、ユーノは思わずたじろいだ。ヒストに跨がって並走している時は、その巨大さや異様な体躯の圧迫感をそれほど感じなかったのに、こうして側に立っていると圧倒される。

雪白（レコーマー）は耐えるように大人しくそこに佇みながら、顔の中央にある、深い哀しみに沈んだような暗い青の瞳を、ゆっくりとユーノに向けて見返してきた。

「大丈夫だよ、ユーノ」

リークは穏やかに笑いながら、自分の前にいる雪白（レコーマー）の毛に手を伸ばした。雪白（レコーマー）が怯えを見せる前に、毛を掴み、ふわりと体を浮かせてその背中に乗る、とリークの姿はあっという間に雪白（レコーマー）の白毛の間に埋まり込んで隠れてしまった。

「え？」

「雪白（レコーマー）はほとんどが毛なんだ」

別の雪白（レコーマー）の毛の波の中から、先に乗っていたらしいアシャがひよいと顔を出しながら言った。

「体は見かけの半分ぐらいだろうな」

「ふうん...」

おそろおそろ見よう見まねで手を伸ばしたユーノは、その雪白（レコーマー）が再び、ミアアア...と、遠い天空からの調べのようなか細い声を上げるのに、またびくりと固まってしまった。

触れるだけで傷つけてしまいそうな気がする。ユーノの中の荒れた気配に怯えられている気がする。

柔らかな花びらを受け止める時に、自分の猛々しさを意識してしまうのと同じように。

「怖いのか？」

アシャが面白そうに尋ねてきた。

「違うよ」

「じゃあ、早く乗れ」

「う、うん」

手を伸ばす。こちらを横目で、毛と毛の間から見つめて来る青色の目が、ユーノを責めているように思えて唇を噛む。

負い目は、ある。

アシャの優しさにいつもいつも心が揺れて、自分がしなくてはならないことを忘れそうになる。

そして、その度に言い聞かせる、自分はラズーンへの使者だ、セレドはカザドに狙われ続けている、そして、アシャはレアナの想い人である、と。

「ユーノ？」

はっと我に返って、訝しげなアシャの視線に、乗るよ、と頷いた。

雪白（レコーマー）の毛を掴む。掴みどころのない曖昧な感触が掌で溶ける。

その感触を失う前に地面を蹴って、雪白（レコーマー）の背中に馬に跨がるように飛び乗ってみる。

「っ」

考えていた位置より遥かに深く落ちて、どすりとユーノは雪白（レコーマー）の毛の中に埋まった。さすがに驚いたように、ミア、と鳴いて雪白（レコーマー）が数歩動くのを、リークが穏やかになだめて留まらせる。

「もっと毛をかき分けて潜り込んでくれ。その方がこいつも落ち着く.....そう、そんな感じで」

リークの指示で、毛をかき分けてより深く身を伏せると、日だまりの匂いと微かな獣の体臭がした。地肌はまだ見えないが、体に当てた掌にはじんわりと柔らかな体温が伝わってくる。

（温かい）

最高級品と言われるソクーラの織物、その素材となるだけあって、毛の段階から肌触りがよく、思った以上に滑らかでさらりとしていてまとわりつかない。このまま毛だけを集めて潜り込んでも、充分快眠できそうだ。

温もりを求めて、より毛をかき分けると、薄桃色に透ける地肌に触れた。心なしか、そうした方が

雪白（レコーマー）の緊張が緩んだ気がする。

（肌を寄せ合って生きる生き物なんだな）

集団で押し合いへし合いしながら草原を移動していた姿を思い出す。

（人もそうだ、と聞いたことがある）

体が温かな生物は、集団で生きるためにその温もりを持っているのだ、と。

温もりを分かち温もりを受け取り、そうやって個体でありながら仲間とともに生きていくことで、大きな世界の不安や恐怖を乗り越えていくのだと。

（世界はあまりに大きいから）

それでも不安に耐え切れず、雪白（レコーマー）はああやって仲間を求め、仲間に自分の傷みを訴えるように鳴くのだろうか。そして仲間もその不安と傷みを受け取って、ああやって慰めといたわりを込めて声を返すのだろうか。

ならば、それにユーノの胸が切なくなるのはわかる気がする。

傷みを訴えきれない。いたわりを受け止め切れない。どこまでいっても、一人でしかない自分の孤独を、しみじみと思い知らされてしまうから。

（でも、どうすればいい）

一人でなくなるために誰かを求めれば、その相手を巻き込むしかない。一人でなくなるために誰かの慰めを受け入れるなら、その相手の安否を気遣わずにはいられない。

背負うものの大きさがわかっているから、なおさら一人で背負うしかない。

「...」

唇を噛んで、ユーノは首だけそっと毛の外へ突き出してみた。

アシャやリークはもちろん、イルファもどうにかこうにか生きた毛皮の中に隠れることができたらしい、周囲の三頭の雪白（レコーマー）の背に人影はない。

ふと視線を転じると、宮殿のテラスに立っているメーネとレスファートの姿が見えた。真昼の日差しを浴びて、レスファートのブラチナブロンドが煌めいている。少年はきゅっと口を引き結んだまま、厳しい表情でこちらを見ていたが、ユーノに気づくとにっこりと笑った。

「気をつけてね！ ユーノ！」

甲高い声が風に乗る。ご無事で、そうメーネの唇が動いたようだった。

片手を上げて軽く振り、ユーノは再び雪白（レコーマー）の背に身を伏せる。

それを待ってでもいたかのように、雪白（レコーマー）はのんびりとした足取りでテップの草原へ歩み出した。

雪白（レコーマー）の毛の中に潜んだまま、どれぐらい草原を進んでいただろう。

あちらこちらと彷徨うだけに思えた雪白（レコーマー）達は、やがてある方向へ引き寄せられるように歩みを速めた。リークが話していたように、この四頭が、いつも『晶石の谷』を訪れていた雪白（レコーマー）ならば、誘導しなくとも谷へ向かうはずだ。

ユーノは雪白（レコーマー）の毛の間から、そっと外を盗み見した。

辺りの景色はいつの間にか一変していた。

広大なテップの草原を雪白（レコーマー）達は既に渡り切っており、草原の端の切り立った崖の近くに来ていた。

崖は雪白（レコーマー）達が入っていく裂け目の小道だけで、その向こうに繋がっているようだ。迫る両側の岩壁、今にも崩れてきそうな急斜面だが、そこも撫でさすられているように滑らかにそそり立っている。

雪白（レコーマー）達はためらこともなく薄白く踏み固められた小道を進んでいく。何度も通っている場所なのに違いない。

途切れ目なく続いていた両壁がふいに途切れた。

（すごい...）

そこは、人工的に切り開かれた石切り場だった。

ユーノが寝泊まりしている部屋にもふんだんに使われている、あの極彩色の宝玉を含んだ石灰色の貴石は、ここから切り出されているらしい。自然のものとは思えぬ垂直に削られた岩肌に、幼子が天衣無縫に描いたような色とりどりの輝きがちりばめられている。階段状に切り取られた部分では、各々の角や面が光を反射しあってまばゆいほど、まるで光の展覧会のようなのだ。

それらの光が地の灰色から躍り出して浮き上がり、凝固して何かの姿となって空を舞っているような感覚にとらわれ、いつの間にか雪白（レコーマー）達が立ち止まっているのに気づけなかった。

（止まっている...何かを待っているのか？）

周囲の気配を伺いつつ、もう少し外へ顔を出してみる。

（あれは）

前方に薄暗い四角い穴があった。

一見したところでは、その部分の石があまりにも素晴しかったので、つい削り出し過ぎてしまったとも見えるが、周囲よりそこだけぼこりとへこんでおり、しかも煌めく岩場の光が届かないほど深く切り出されているところを見ると、普通では考えにくい力によるものだとわかる。

（あそこ、か）

ユーノがそう考えた瞬間、とことこと二頭の雪白（レコーマー）が、ユーノとリークの雪白（レコーマー）から離れていった。ぐるりと切り立った周囲の岩壁を巡るように歩いていく。

呼応するように、ユーノとリークの雪白（レコーマー）は正面の穴に向かって進んでいく。

（作戦通り、囹、だな）

ちょっと見ただけでは、迷い込んできた雪白（レコーマー）が出口を探しているように見えるだろう。

ユーノはそっと手を剣に伸ばした。

冷えた金属の動きに、体の下の雪白（レコーマー）がびくりと体を強張らせて竦む。怯えやすい優しい動物なのだ。軽く地肌を撫でてやると、雪白（レコーマー）は促されたようにのろのろと歩き始めた。と、前方の穴の中で何か動いたようだ。

（気のせいかな？）

そうではない。確かに何か動いている。

物の影より、死の安らぎより、もっと忌まわしい暗闇、『運命（リメイン）』の気配だ。

体の芯がじりじりと緊張に張りつめてくる。

（まだだ.....まだ...）

「ミアアアアッ!!」

「っっ！」

突然どこからか飛んで来た短剣が、深々と目の前、ユーノの雪白（レコーマー）の首辺りに突き立った。魂をもぎ取られたような絶叫を上げて雪白（レコーマー）が走り出す。

「う、うあっ」

背中ユーノはしがみつくの精一杯、振り落とされそうになって必死に体を伏せて毛を握りしめる。

「ミアアアアアッ!!」

「くそっ！」

鋭い叫びがリークの雪白（レコーマー）から聞こえた。ユーノの雪白（レコーマー）につられたのか、同じく攻撃を受けたのか、いずれにせよ同様に走り出して制御できなくなったようだ。

「ミアアアッ！」

「ミアアアアアッ！」

石切り場に響き渡る悲痛な叫び、脳裏をアシャ達のが掠める。

（うまく雪白（レコーマー）から降りていてくれればいいけど）

この様子では残りの二頭も怯えて走り出しているだろう。

「く...っ」

痺れてくる腕、必死に掴むがずるずると指先から抜けていく毛、このままで遠からず振り落とされる、そうユーノが考えたとき、ふいに雪白（レコーマー）が岩を蹴る蹄の音が消えた。がくりと前のめりにつんのめる。

「うわっ！」

身を竦めた時は既に遅かった。

「あああっ！」

側でリークも悲鳴を上げる。振動で飛び上がった視界に一瞬、開いていた穴の真つ黒な闇が見える。

「っっ！」

二人はそれぞれの雪白（レコーマー）に捕まったまま、その穴にまっすぐ落ち込んでいった。

ポトン、ポトン……ピッチャーン……。

微かな遠い水音が薄暗い空間に響いている。

「…ん…」

ユーノは眉を寄せて唸った。

水音が響く。

それは血の滴る音であり、流せない涙が心の中に落ちる音でもある。

『昔々、ラズーンが治めるよりも遙か昔』

小さい頃に聞いたお伽噺が濡れた世界を通り過ぎる。

『ある国に、あまり美しくない王女さまがおりました。王女さまには一人のいとこがいて、この娘は大変美しかったのですが。ある日、一人の男が来て水を望みました。王女さまはすぐに用意してあげましたが、いとこは手足の手入れに忙しく、男の世話等いたしませんでした。ところが、この男こそ、実は隣国の王子でした。王女の本当の姿を知ろうとして、姿を変えてやってきたのです。王子はすぐさま国に帰り、改めて王女を妻として迎えに来たのでした』

その話を読み聞かせ終えた母は、いつもにこにこ笑いながらユーノ達に諭した。心の美しいものこそ、本当に美しい。だから、あなた達も美しい心の王女にならなくてはなりませんよ、と。

（けれど、もし）

その美しいところが、王女と同じぐらい美しい心の持ち主だったら、王子はどちらを選んだだろう。

ユーノはそう思わずにはいられなかった。

身分を考え自分にふさわしいものと思う前に、より美しく、より心優しい娘を選ぶのではないだろうか。

（そして、もし）

そのいとこがやはり王子に釣り合うほどの王女であったなら。

（ねえ、アシャ、王子はどちらを選んだだろう）

応えがわかっている問いかけは、夢の中でも切なかった。

アシャを助けたのはレアナ、レアナに拾われれば果報者、そしてアシャはレアナに想いを寄せ、レアナもアシャに優しい微笑を返す。

美しく心優しい姫君と剣に優れ詩歌も愛する端麗な騎士。

どこに何の異論があるだろう。

誰が反対できるだろう。

ユーノに残されているのは、二人を繋ぐ絆を見つめ、守ることしかない、大切に愛しいならば、その幸せを願うのならなおさらに。

（届くわけがないとわかっている……この想いが報いられることなど、ないとわかっている…）

そう、そんなことはとっくの昔にわかっているのに。

心はどうして繰り返し、叶わぬ幻に両手を差し出そうとしてしまうのか。

「う…ん…」

呻いてユーノは目を開けた。瞬時に剣を構えて飛び起きる。薄暗がりと冷えた空気が外だと勘違いさせた、人の気配のなさが戦うしかない錯覚させた、だが。

「ここは…」

思い出したのは落下直前の気配。周囲を用心深く見回すが『運命（リマイン）』の姿もないようだ。

「う…っあっ！」

ふいに声を上げて跳ね起きたのはリーク、慌てた様子で振り向いて、側に居るユーノにほっとした様子で、

「大丈夫か」

「うん」

「……ここは……どこだ？」

訝しげに振り仰いだ顔が、僅かに光が漏れてくる上方に向けられる。

「あそこから落ちたみたいだな」

「うん、雪白（レコーマー）ごと」

「…くそっ！」

ユーノの声に慌てて視線を戻したリークが、動かぬ塊になった二頭の雪白（レコーマー）に止まり、舌打ちする。

「雪白（レコーマー）追いのくせに...」

自嘲を漂わせてつぶやいた声には深い哀しみが宿っている。その腕に幾筋か流れ落ちている血に、ユーノはチュニックの下のシャツを引き裂いて当てた。

「これで押さえて」

「あ、ああ.....いやに手慣れているね」

手早く巻き付けるユーノにリークが意外そうな声を上げる。

「...まあね」

ユーノは苦笑するしかない。

「...ここから...出られるかな」

不安そうなリークに、

「一通り周囲を巡ってみたいんだけど.....こんな暗さじゃ迷うのがおち、だね」

「そうらしいな」

穴の中はかなり広い。声が遠くで反響するのがわかる。だが、壁がどこからどう繋がっているのか、漏れる光だけではよくわからない。

「アシャ達はボク達が落ちたことを知ってるかな」

「知らないだろう、かなり距離もあったし、それどころじゃないはずだ。.....こうしている間にも、アルトが！」

苛立った顔でリークが悔しげな叫びを上げる。

「失うわけにはいかないのに！」

「リーク」

ユーノはごくりと唾を飲んだ。

「あなたも視察官（オペ）なのかい？」

「！」

どきりとした顔でユーノを見返したリークが、うろたえたように視線を逸らせる。

「.....ここから出られそうにないよね、ボク達。助けも来ないかも知れない。.....ならせめて、死に土産にボクの質問に答えてもらえないかな」

「.....」

「何もわからず死にたくないよ」

「.....ああ」

苦しそうに唸ったリークが疲れた顔で次第に温もりが消えてくる雪白（レコーマー）の側に腰を降ろす。

「...そう、だろうな」

絞り出すような呻き、思った通り、それほど意志力が強い人間ではないようだ。

「その気持ちはわかるよ」

アルトも同じように聞くだろうから。

低くつぶやいた声に、いささか済まないと思いつつ、ユーノはつけ込む。

「誰だって、自分のこの先に、何が待っていたのか知りたいよ.....助かる可能性はない、だろう」

少し怖いんだ、と付け加える。

「何か違う事を考えていたい」

「.....わかった」

リークが溜め息をついた。

「あなたは視察官（オペ）？」

「ああ」

「視察官（オペ）って、何だい？ ラズーンの使者？」

「その役目もあるがね」

リークは鈍い反応を返した。

「と言うと？」

「視察官（オペ）は.....ラズーンより派遣された治安維持官だと思えばいい。そのために、特殊な戦闘法とラズーン技術の最先端を身につけていることが要求されているんだが」

私はそれほど優れた視察官（オペ）ではないよ、と嗤った。

「医術師の腕も？」

「まあ、それはほんの一部だ」

リークはもう一度深く溜め息をついた。

「ラズーンの二百年祭のために、世界に散った『銀の王族』を『運命（リメイン）』の手から守り、ラズーンへ無事連れ帰ることも、その任務だ」

「連れ、帰る？」

思わぬことばにユーノは眉を寄せた。

「そう、元々、彼らはラズーンの子、だからな」

「ラズーンの子……？」

自分の出自を考え、思わず軽く首を振る。

（そんなことない、だって私はセレドで生まれ、セレドで育った）

他の『銀の王族』は知らないが。

（ひょっとして、私は……『銀の王族』じゃない、とか…？）

「『銀の王族』って……この世の幸福を約束された『銀の王族』のこと、だよな？」

「そうだ……よく知っているな」

リークは気だるげに驚いた。

「だが、それだけじゃない。それは『銀の王族』を守るための条件付けでしかないよ」

「じゃあ……何なの、『銀の王族』って」

今、知りたかった謎の一つがついに明らかになる。

「……ラズーンの基盤、だ。一言で言えば」

リークは片手で冷たくなった雪白（レコーマー）の毛をそっと撫でてやりながら、

「いや、この雪白（レコーマー）達の、世界の、全ての、というべきかな」

微かにつぶやいた。

「どういうこと？」

「ラズーンは二百年に一度、最大の危機を迎える。その危機をうまく乗り越えられないと、この世界が崩壊する。それを防ぐために……ラズーンを再構成するために『銀の王族』が必要になるんだ。……

『銀の王族』の持っているものが」

（世界が崩壊する）

ラズーンの危機がこの世界の危機になる、それは想像がつく。だが、世界が崩壊する、とはどういうことなのか。

「持っているものって…」

ユーノは必死に自分の持ち物を、自分の姿を考える。

「……銀のオーラ？」

からからになってくる喉に何度か唾を呑み込んで、さらに問いかけた。

「オーラは意味としては視察官（オペ）のものとそう変わらない」

リークは軽く首を振った。

「それぞれの『役割』の認識票みたいなものだ」

（認識票）

『銀の王族』には『銀の王族』の、視察官（オペ）には視察官（オペ）の定められた役割があり、それはラズーンの危機を防ぎ、世界を崩壊させないことに繋がっている、ということ、しかもそれはすぐにそれとわかるようにしておかねばならないものだということ。

（人間違いってというのはあり得ないってことか）

ではアシャが視察官（オペ）としてユーノを『銀の王族』だと認めたのなら、偶然や勘違いの類ではないということだ。

（でも……私に何ができる？）

確かにユーノは剣を使え、人よりは闘いに秀でているかもしれない。けれども、それこそ、世界を巻き込むような戦争などが起こったとしても、ユーノ程度の力など意味をなさないだろう。イルファのような強力無双の兵士か、レスファートのように人の心を読む存在の方がよほど戦略的に必要だろう。

それは旅の途中で会った、別の『銀の王族』だろうハイラカにしても同じだ。彼だって特別な力を持っているようには思えない。ましてや、今回行方不明になったアルトに至っては、世界の命運を握る存在にしてもあっさりとその命を消されかねない状態だ。

(何だろう、この妙な感じ)

たとえば『銀の王族』にそれぞれ秘められた能力か何かがあって、それをラズーンに辿り着いて目覚めさせて役立てるのだとしても、それほど貴重な存在ならもっと厳重に警護すればいい。いや、そもそも、ラズーンの子、というぐらいなら、元々はラズーンに居たのかも知れない、ならばそこから手放さなければいい。

(ちぐはぐな、噛み合わない感じ)

かけがえのない存在なのに、あえて運を天に任せるような曖昧な扱い。

「じゃあ『銀の王族』って」

一体何をするの。

そう尋ねかけたことばは、独り言のように続いたリークの声で思わず呑み込んでしまった。

「まあ、アシャは違う。アシャの金のオーラは特別なもので.....それ故にクラノを得たんだが」

「クラノ？」

「ああ、このあたりではあまり使わないことばかな.....称号のことだよ」

リークは小さく溜め息をついた。

「彼の正式な名前は、アシャ・ラズーンだ」

「アシャ、らず...」

思わずユーノは体を強張らせる。

セレドに限らず、個人名に国名を重ねる、あるいは国の古い呼び名を重ねる一セレドの場合はセレディスが古称となる一ことは、とりもなおさず、その人間が国を継ぐ正当な立場のものであると示している。アシャが、自分の名前に『ラズーン』を戴くということは、つまり。

(アシャは統合府ラズーンの正統世継ぎ！)

頭の遠い所でくらくらとしためまいが起こった。

ユーノも外れているとはいえ皇女、国の規模の格差は重々理解している。また、セレドのような世界の辺境の小国でも、父のセレド皇が重要な政策を定める議事にどれほどの重責を負うのかつぶさに見ている。

それらの小国が寄り集まって大陸ごとの諸国群となり、それらの集合が世界となり、その世界の諸国を統括するのがラズーン、そのラズーンを統べる王となれば、それは世界の王、王の中の王と呼ぶしかなく。

(その...世継ぎ...)

格が違い過ぎる。

竦むような感覚があった。

「ラズーンの.....世継ぎが.....どうして.....諸国を巡る旅人なんかに...」

思わず漏らした自分の声が掠れていた。

言われてみれば、育ちの良さは十分伺えた。並々ならぬ博識、優れて洗練された特殊な剣の腕、宮殿などでの気品ある振る舞いとどこでも物怖じすることのない大胆さは、美貌だけではなく、もっと巨大な世界のもっと多くの人々に、『ラズーン』の名を背負って対してきたからだだったのだ。

今にして思えば、イシュタの対応もメーネの理由ありげな様子も、それならば全てが納得がいく。統合府ラズーンの世界継ぎがふらふらと辺境を彷徨っていれば、そこには何らかの意図があると考えてるのが当然、ましてや気持ちを向けるなどとは恐れ多く、ただただ不興を買うまいとする輩も多いはず、どこへ出向いても顔を知られていれば歓待されるだろう。

「さあ.....実はそれは一つの謎なのだ」

リークの声もあやふやに聞こえた。

「アシャがなぜラズーンを出たのか。なぜそれを父である『太皇(スーグ)』が許されたのか。誰も本当の理由は知らないのだ」

「.....」

(どうしよう)

ユーノはじつとりと体を濡らしていく冷や汗を堪えた。

アシャがラズーンの世界継ぎだとすれば。

知らなかった、隠されていたとは言え、ユーノはその王の中の王の世界継ぎを付き人に仕立ててあれこれ世話をさせ、数々の無礼な扱いをしてきている。こんな旅に引っ張り出し数々の危険に巻き込み、

あまつさえ……唇まで重ねている。

(どう、しよう)

ラズーンの『太皇(スーグ)』は寛大な方だろうか。息子に加えられた理不尽な扱いを、諸国の無知な者どもはと愚かさや哀れみで看過して下さるだろうか。

(どうしよう…っ)

これはもう好きだの嫌いだのと言える状況ではない。アシャの気持ちがどうかという問題でもない。

(セレドが…っ)

もしアシャへのユーノの対応が、ユーノ一人のものではなく、セレドがラズーンを軽んじた故だと思われたら、ユーノはもちろん、セレドそのものの扱いが悲惨なものになるのは火を見るより明らか、レアナの想いは散るしかなく、皇家が滅亡するだけならまだしも、守ってきた大切な民も同罪として攻め落とされるようなことになったら。

(私のせいだ)

胸の底が凍り付く。

「リーク…」

最後の望みをかけて必死に尋ねる。

「アシャ以外にもラズーンの名を受けている人はいるの…?」

王家には時に多人数の王子が居る。アシャが諸国を放浪しても追手も守護もつかなかったというのは、ひょっとするとアシャがラズーンの中ではそれほど重要な王子ではないのかもしれない。

「ああ、四、五人は居るはずだ」

「そう…」

リークがあっさり応えて思わずほっとする。

(そうだ……そうだ、よね)

きっとアシャはその中の四番目とか五番目とかの王子なのだ。だから、ラズーンを離れても誰もそう気に留めず、本人のしたいままにさせているのかもしれない。

(うん、きっとそうだ)

汗に濡れた額をちょっと拭いてユーノは吐息をついた。

(もしそうなら)

確かにうんと少ないことかもしれないけれど、そういう自分勝手にラズーンを出奔した『不良』王子が、諸国の美姫に一目惚れして、強く強くその側に居たいと願ったのなら、そしてユーノが無事に一度はアシャをラズーンへ連れ帰れば、その働きに免じ、特別の恩寵をもって、アシャがセレドの皇となって降りることを許されるかも知れない。セレド皇ミアナ皇妃も、放浪詩人ではなくラズーンの王子であるとなれば、血縁を結ぶことは国家の安定に強力な約束となる、レアナとアシャの婚姻を反対する理由はないだろう。

(そうなれば、レアナ姉さまも喜ぶし、セレドも無事だし)

もしかしたら、ユーノにはやはりある程度のお咎めがあるかもしれないけれど、もしそれが万が一ユーノ一人の命であがなえるものなら全く問題はない。

(うん、だからできる限り早くラズーンに着いて)

その『銀の王族』とやらの役目を一所懸命果たして、アシャをセレドに戴きたいと心を尽くして頼んでみよう。

「うん」

「え？」

「あ、いや」

一人頷いてリークに怪訝な顔をされ、我に返る。

(そんな先のことより、まずここから脱出しなくてはならないんだっけ)

それにまだわかっていないことがある。

ラズーンが二百年に一度迎える危機とは何なのか。

『銀の王族』はラズーンで何をするのか。

そして『運命(リマイン)』とは、そのラズーンとどういう関係にあるのか。

「リーク、あのね、ラズーンは…っ！」

尋ねようとしたユーノの耳に、静まり返っていた周囲にふいにカラッと岩が崩れる音が響き渡った。ことばを切って振り返ったユーノは、同時に剣を手元に引き寄せて立ち上がり、闇に向かって叫んだ。

「誰だ！」

「どうした？」

ふいに立ち止まったアシャに、イルファが低く問いかけた。

雪白（レコーマー）から降りて入り込んだ晶石の裂け目、足下も不安定な薄暗がりの中で、アシャは遠くの稲妻を探すように視線を彷徨わせる。

「いや...何か聞こえたような気がしたんだ。ユーノ達に何かあったかな」

「あいつなら大丈夫だ。俺が太鼓判を押す。あの『風の申し子』とやらは、どうか知らんがな」

イルファがしたたかに笑う。

「違うない」

アシャは苦笑を返した。

なまじの視察官（オペ）よりユーノの方が剣の腕は上かも知れない。

（本当になんて娘だ）

華奢な体に底知れぬ忍耐力と度量と鋭さを秘めて、ただ一人でも、人の心を呑もうとする闇に立ち向かおうとする。細い腕にずしりと重い剣を操り、瞳に深い哀しみをたたえる少女。差し出すアシャの手にためらいがちに首を振り、そっと一歩、いつも、いつも、遠ざかってしまう。

（俺は何を恐れている？）

アシャは自分に問いかける。

ユーノのことだ、そう易々と刺客の手に倒れる事はあるまい。

ならば、アシャは何を恐れているのか。

（ユーノがこれ以上、俺から離れていってしまうこと、か？）

リークは視察官（オペ）の中では口が軽い。些細なきっかけで、アシャの正体をユーノに話してしまうかも知れない。

それを知ったユーノは、アシャに対してどう振る舞うだろう。

（この世の果て、世界の統合府、ラズーン、か）

アシャ・ラズーン。

その名に示された称号は、ラズーン支配下（ロダ）の人間をひれ伏させてあまりある。

しかも、アシャは、称号（クラノ）を与えられた中でも最上級、ラズーンの正統世継ぎとしての権利を持っている。

（世界を統べる国の、世界を統べる王としての権利）

もちろん、ラズーンを統べる『太皇（スーグ）』は、そんなことにはこだわらないだろう。アシャが権利を放棄したいと言え、考えてもくれるだろう。アシャにはそれなりの事情がある。

しかし、ユーノはどう思うだろう、アシャのその地位を。

（身も世も捨てて希う）

そういう恋も幾度か見た。そこまでかけられる情熱と周囲を無視して暴走する想いを、人間ゆえかと眺めたこともある。だがしかし、自分にだけは起こりえないと思っていた、どんな不可思議が起ころうとも、たとえラズーンが明日なくなると聞かされても。

アシャ・ラズーンという存在には、そういうことが許されない枷がある、人の尊厳の意味を奪う、頑丈で冷徹な鎖。

（なのに、俺は）

今のアシャには、どういう理由にせよ、ユーノがこれ以上自分の側から離れていく理由は作りたくない。その理由が自分の出自を巡ってじわじわとユーノの意識に入り込んでいくのが、これほど不安になるというのも予想外だ。

（旅に身を委ねるアシャ、であればよかった）

ただの、地位も力もないただの男であれば、自分の欲望を理由にユーノの側にいることはできただろうに。

（シートスが聞いたらどう思う）

野戦部隊（シーガリオン）を率いる剛毅な男は、怒れば一都を灰燼に帰す平原竜（タロ）でも時がくれば『番い』になりたがりますからな、と高笑いするだろう。

「アシャ...」

イルファの声にアシャは我に返った。

前方からゆらゆらと揺らめく明かりがやってくる。その明かりのせいで、辺りは一層闇を増したかのように見える。

アシャはこちらを見つめるイルファのごつい顔に軽くうなずいて、岩陰に身をひそめた。

明かりの色から見て、おそらくは松明の火だろう。たまたまここへ迷い込んできた輩が、たまたま松明を用意していたとは思えない。意図があって入り込んできている何者かが居るのだ。

(『運命(リメイン)』支配下(ロダ)の人間か.....あるいは)

チツと微かな音がした。イルファが剣に手をかけたのを横目に、アシャは目を細める。

明かりは二人の殺気を感じた様子もなく、相変わらず頼りなげな揺れ方をして近づいてくる。晶石はきらきらと光を放ち、周囲を不思議な色合いに染める。

「！」

角を曲がってきた相手に、アシャは軽く息を呑んだ。

それは他の誰でもない、ソクーラの『貴婦人』の弟、エタ王子の姿だったのだ。

ぎょっとした顔でこちらを振り向くイルファを眼で制して、アシャはエタの様子を見守った。

放心しているふうではない。明らかに自分の意志でここへやってきている。

エタは二人が身をひそめている岩の少し先のところで、知っていなければ、それとはわからないだろう、小さな裂け目に入って行く。

「...アシャ」

明かりの揺らめきも裂け目に吸い込まれ、辺りが元の薄暗がりに戻ると、イルファが不審そうな声で尋ねてきた。

「どういうことだ？ なぜ、あいつがここにいる？」

「わからん」

応えながらアシャも眉を寄せた。

(ソクーラは、まだ『運命(リメイン)』支配下(ロダ)になかったはずだが)

サマルカンドが定期的に伝えてくるラズーンへの照合を思い起こす。

それとも、『運命(リメイン)』の侵攻がラズーンが把握しているよりも早く、既にソクーラも『貴婦人』の気づかないところで『運命(リメイン)』に落ちているということか。

(二百年祭だからな)

統合府ラズーンにも弱みはある。二百年ごとにくる、必然的とも言える支配力の低下だ。

ただ今回はその進み方が速すぎる。歴代のどのものよりも、急速にラズーンは求心力を失っていると思える。

今回の二百年祭が、リークが心ならずも口を滑らせたラズーン存亡の危機となるのかも知れない。

(いつかは来ると知らされていたが)

どうしてよりもよって今回なのだろう、と苦々しく思う。

そんな、世界が揺り動かされるような時代の中を、すぐ死の女神(イラークトル)の腕に駆け込みたがる、しかも他の誰よりも愛しい存在となりつつある娘を連れて渡っていかねばならぬとは。

だが、ある意味ではその激動こそがユーノを作り上げたとも言えるのだ。

(時代が人を、人が時代を上げる)

濃密なその関係を横目に見るしかない命としては複雑な思いが広がるだけだ。

「おい」

「ん？」

「この裂け目、狭いがかかなり深いぞ、どうする？」

エタが入っていった裂け目を調べていたイルファが、窮屈そうに振り向いて顔をしかめた。

「それに、おかしい臭いもする」

「臭い？」

「腐肉の臭い、に近い」

「腐肉...」

嫌な予感が胸に広がったのはイルファも同じ、こんなところでレガに会えば、身動きとれなくなる。だがレガが居るならば、そこにアルトが捕らえられている可能性もある。

もっとも生きているかどうかは保証の限りではないが。

「行くしかないようだな」

「仕方ねえな。ま、お前となら心中しても本望だが」

裂け目に入りかけたアシャは思わず身を引いた。先に立ったイルファが険のある目つきで振り向く。

「俺とじゃ、不満だっというのか」

「いや、そうじゃないが.....お前が言うとうどうも別の含みがあるように聞こえる」

「どんな含みだ、お前となら生死共にしても悔いはないという、強い仲間意識だろうが」

「強い仲間意識、な」

「そうだ身も心も一つにして一緒に歩こうという強い仲間意識だぞ！」

「.....」

アシャは無言でもう少し距離を取った。

(そういう『仲間意識』を少しでもユーノが持ってくれるなら)

アシャももう少し心丈夫なのだが。

「...確かに臭うな」

奥へ進むにつれて漂ってくる臭いにアシャは眉を寄せる。

腐臭、そう言えなくもない。

だが、レガや『運命(リマイン)』が好むような生々しいものではないようだ。

「狭い、な」

体を屈めたり捻ったりと奮闘しつつ、それでもあちらこちらの岩角で体を擦りながら、イルファはぼやく。

「一体どこまで続いてやがる」

「谷のなかばぐらいまでは来ているだろう...途中で詰まるなよ」

「詰まれば生涯二人きりか」

「安心しろ、俺の後には道がある」

「見捨てるのか」

「助けを呼んでくるという方法もあるという話だ」

「相変わらず冷たい男だな、ちょっとは気持ちを察してくれてもいいだろう」

そういうことをこの状況で口にするからややこしくなるんだろう、そう突っ込みかけて、先を行くイルファがぐいぐい速度を上げ出したのに気づく。

「何だ？ 急に楽に通れるようになったぞ」

「通路が広くなってるんだな.....おい」

首を傾げたイルファの姿がふい、と目の前から消える。

「すげえ...」

「何だ？」

少し先から響いた声に足を速めると、数歩先で裂け目はいきなり大広間のような洞窟になっていた。松明の炎が赤く、洞窟の中央あたりで揺れている。どこからか光が差し込んで、ほこりを浮かび上がらせながら洞窟の中を照らし出している。

そこは墓場だった。

ただし、人の手の加わっていない、そして人のものではない墓場だ。

煌めく晶石に取り囲まれ、見下ろされ、受け止められ、骨と皮になった十数体の乾いた雪白(レコーマー)の死体と、数知れぬほどばらばらになって散ったり砕けたりしている巨大な生き物の白骨が、そこに横たわっていた。

おそらくは死期を悟った雪白(レコーマー)は、ここに来て死出の旅を始めるのだろう。

虚ろな眼窩には既に深く澄んだ青の瞳はなく、ふわふわと真白な毛だけが微かな空気の流れに漂っている。

悲しみはない。

ただ、辿り着いて全てが終わった、死というものの安らぎと静寂が満ちているだけだ。

「アシャ！ イルファ！」

こちらに気づいたらしいエタが振り返り、頓狂な声を上げた。

「どうしたんです？ こんな所で？」

「あなたこそ」

近づいてくるアシャ達に、エタは穏やかな目を少し籠らせて立ち上がり、今まで跪いていた場所に横たわる一頭の雪白(レコーマー)に視線を落とした。

「雪白(レコーマー)の死を看取りに.....ぼくの好きな一頭でしたから」

今息を引き取ったばかりなのだろう、ひんやりと静かな洞窟の中、その雪白(レコーマー)の周囲だけ仄かに温かな気配があった。

「けれど、あなた達こそどうして。晶石の谷へ向かわれたはずではなかったんですか」

「ああ、実は…」

アシャは晶石の谷から入ったところで明かりを見つけ、その後を追いかけてきたことを話した。

「へえ……じゃあ」

エタは驚いた表情で振り返り、岩の彼方を透かし見るような顔になった。

「向こうの平原から入れる所が繋がっているんだな。ここも回りの岩から見て、晶石の谷の一部だろうとは思っていたんですが」

「それはいいが、それよりここで怪しいやつを」

見かけなかったか、そう尋ねかけたイルファは、エタの顔が強張り、瞳が見る見る大きく見開かれるのにことばを切った。視線を追って振り返ったアシャが、

「これは…また」

凄みを帯びて殺気立った声に重なるように、ガシャツと乾いた音が響く。実のない虚ろな音色、それは止むことなく、始まった部分から次第次第に洞窟全体へと広がっていく。

「おい…っ」

イルファが潰されたような声を上げた。

「『運命（リマイン）』流の歓迎らしいな、イルファ」

目を細め、不敵に嗤ったアシャのことばも震え始めたエタの耳には届いていないかもしれない。

「アシャ…っ」

悲鳴が唇をつく。

「……でも、みんな、死体なのに…っ」

掠れたエタの声は、洞窟全体に響き渡る骨の音、岩の崩れる音、死肉がぼたぼた落ちる胸の悪くなるような重い音にかき消されていく。

大広間のような洞窟に転がっていた無数の白骨と死体がよろめきながら立ち上がり、今や次々とアシャ達を目指して迫ってきつつあった。

「ミアアア…」

「え？」

物音に誰何しながら剣を抜きかけたユーノは、弱々しい雪白（レコーマー）の声が返ってきたのに気を削がれた。

とことこと、闇の中から灰白い体が近寄ってくる。ほんの小さな、生まれて数日しかたっていないときえ思われる雪白（レコーマー）だ。

常なら見知らぬものには慣れないのに、一頭で放っておかれて寂しかったのだろう、人なつこく側へやってきて、ユーノにそっと体をすり寄せた。

「ミアア…」

甘えた声で小さく鳴く。

「どうしたの？」

剣をおさめ、しゃがみ込む。

雪白（レコーマー）はユーノが抱え込めるほどの大きさしかなかったが、幼くとも、その瞳の深さは変わらず、鳴き声に哀愁漂う音色も既に備わっている。抱えたユーノの温もりにほっとしたように、おそるおそるこちらを見上げてもう一度、ミアア、と甘え鳴きをした。

「こんな所にどうして一頭で」

「トゥサ！」

突然リークが叫んでどきりとした。

雪白（レコーマー）も同じ気持ちだったのだろう、怯えたようにユーノの腕から数歩、元の闇へ後じさりする、と、その首のあたりに金属の札のようなものがきらりと光った。

「やっぱりそうだ！」

「何だい？」

「こいつはトゥサだよ。アルトが特別に目をかけていた雪白（レコーマー）だ。一体どこから入ってきたのかな」

「トゥサ？」

ユーノが呼んでみると、雪白（レコーマー）は、そのただ一つの青い眼を微かに潤ませ、優しい色を浮かべた。ゆっくり戻ってきて、伸ばしたユーノの掌にそっと鼻面を押し付け、続いて軽く体を擦り付けて誘うように向きを変え、闇に向かってミアア、と鳴いてみせる。

「リーク」

「ああ、ひょっとしたら、こいつ、アルトの居場所を知っているのかも知れない」

リークと共に歩き出したトゥサの後を追いつつ、何分にも暗闇の岩場、勝手知ったように歩を進めるトゥサの後についていくのは並大抵ではない。

「大丈夫？」

「な、なんとか...」

躓きつつ、岩を越え、回り込み、四苦八苦ししながら闇の中を導かれて、ようやく二人が辿り着いたのは、明らかに人工のものと思われる小広間、数人の黒衣の男達がたむろしている一角に牢がしつらえてあり、その中にくすん、くすん、と小さな声で泣いている少年の姿がある。

闇を照らすこもったような鈍いオレンジ色の松明の光の中、少年がはっとしたようにこちらを見て喜色を浮かべ、立ち上がった。

「トゥサ！」

澄んだ高い声が、牢の中から雪白（レコーマー）に向かって響いた。これもまた止める術なく、

「ミアア...」

応えるように鳴いたトゥサが牢に近寄っていく。

「お、こいつどこから」

（いきなりかよ）

舌打ちしつつユーノは剣を抜き放った。

幸い、『運命（リメイン）』の気配はなく、黒衣の男達の注意は駆け寄っていく雪白（レコーマー）に集まる。リークに合図を送るのももどかしく、無言で男達の背後から急襲した。

「う、あっ」

「ぎゃっ」

雪白（レコーマー）に逸らした注意を、抜き身の剣を引っさげて走り寄るユーノに引き戻す前に、男達は一人二人と血煙を上げて倒れていく。

「このっ.....があっ」

ようやく剣に手をかけた者も次の瞬間には骸になっていた。間を走り抜けたリークが倒れた男の腰から鍵束を見つけ、牢の鍵を急いで外す。

「アルト！」

「『風の申し子』！ 来てくれたんだね！」

喜びの声を上げて飛び出す少年を、リークが強く抱き締めた。深い信頼を思わせるアルトの無防備な仕草、それを愛おしいと思っているリークの安堵が伝わってくる。

（私はアシャにあんな風には振る舞えない）

視察官（オベ）としての腕を信じていないわけではない。人柄を評価しないわけではない。仮にレアナの想い人でなかったとしても、ユーノはアルトのようにアシャに飛びつくことはできない。むしろきっと詰るだろう、こんなところへ自分を探しに来る危険を考えなかったのかと責めてしまうかも知れない。

（アシャはきっと、わかった、と苦笑して）

ユーノに背中を向けるのだろう、仕方のない跳ねっ返りだと。

「さ、行こう！」

思考を断ち切るようにユーノはリーク達に声をかけた。

「長居は無用、さっさとここを出て...」

ぐるりと見回した先、松明の光に照らされて妙なものが見えた。牢の奥に晶石を彫り込んだ窪みがある。その中に、何か人形のようなものが一体置かれている。

「あれは...」

「ユーノ？」

ゆっくり息を詰めて近寄って、相手が身動き一つしないのに眉を寄せた。

「やっぱり『運命（リメイン）』.....」

岩の玉座に埋まり込むように座っているのは、黒い髪に黒尽くめの服装、真紅の眼を見開いた、男女区別のつかない一人の人間の姿だ。

だが、瞳は虚ろに前方の虚空を見据え、ユーノが覗き込むのに注意を向ける様子もない。まるで魂が肉体の中身から離れてしまった抜け殻のようだ。

「ひよっとすると」

「どうしたんだ、ユーノ」

不安そうなりークの声に、ユーノは一旦おさめていた剣を再び抜いた。

ごくっと干涸びてくる喉に唾を呑み込み、そっとその側に近づく。相手の反応はない。

(もし、私の考えている通りなら...)

剣を振り上げ、狙いを定める。と、その一瞬、ふいに『運命 (リメイン)』の目に生気が戻ってきた。

ギリりと下からユーノをねめつける。邪悪に輝く真紅の瞳と視線が重なる、それと同時に、ユーノは渾身の力をこめて剣を振り下ろしていた。無念そうな目で『運命 (リメイン)』が崩れ落ち、ひくりと指が痙攣したが、それきりだった。『運命 (リメイン)』の体から見る見る力が抜けていく。

「む」

茫然としていたリークが駆け寄ってきた。閃かせたのは例の短剣、さすがにためらうことなくとどめを刺すと、『運命 (リメイン)』は刺された場所から腐食するように黒く焦げた塊に変わった。

「...ミアア...」

恐ろしさに声も出ずに竦んでいるアルトの側を、全てが終わったと言いたげにトウサが擦り抜け、小広間から裂け目を通して出て行こうとする。『運命 (リメイン)』の残滓から身を翻し、トウサに従おうとするユーノにも、アルトは怯えた視線を向けて、側に戻ったリークの服の裾をしっかりと握りしめる。

その光景を視界の端で捉えながら、同じ『銀の王族』でも全く違う、とユーノは苦々しい思いになった。

(もし、ハイラカならどうしただろう)

同じ状況で、壁に魂の抜けた体を横たえている敵と遭遇したら。

皮肉に唇を歪めて嗤う。

(きっと.....殺しはしなかつたらうな)

「くそおっ」

きりがねえなあっ！

イルファの大声が洞窟に反響した。殴り、蹴り、引き倒し、体当たりをしても、白骨化した雪白 (レコーマー) の群れは突進してくるのを止めない。

「ア、アシャ...っ」

息も絶え絶えのエタの声に、アシャは手元に絡み付いてきた白い毛と白い骨の複合体を叩き斬り、振り返りざまに相手に覆い被さっていた一体を蹴り飛ばした。

「いつになったら終わるっ」

「知るかっ」

背中を合わせたイルファがさすがに喘ぎながら尋ねてくるのを、突き飛ばしてアシャはくると空に舞った。突っ込んできた雪白 (レコーマー) の肩を掴み、片腕でなお上空へと跳ねて距離を稼ぎ、落ちる重さで一体、二体、三体を蹴ったところで噛み付かれて地面に引き倒される。激しく叩き付けられかけたのを体重を殺して最小限の被害で堪え、素早く手と脚で地面を弾いてどさりと落ちてきた次の一体から逃げた。

(操っているのは『運命 (リメイン)』)

その大元さえ潰せばしのげるが、圧倒的な数と際限なく起き上がる敵、イルファだけならまだしも、エタを抱えた状態では脱出できるかどうかさえ危うい。

(どうする)

視線を向けたのは黄金の短剣、増幅させて一気に平らげることでもできないが、この洞窟はその衝撃に保ってくれるのか。万が一、これがユーノ達の入り込んでいるどこかに繋がっているとすれば、その場所の崩落を招かないか。

「も、もう.....、これは...っ」

エタが必死に走っている、その背後から飛びかかりかけた小動物の骨を砕いて飛ばし、後に迫った雪白 (レコーマー) の白骨の頭にとんぼを切って飛び乗る。高みで広がった視界で洞窟を確認するが、いかんせん、光量が少ない、詳細は不明だ。

「うおおおおっ」

ごっしやああ、と巨大な骨の塊が崩れた。下敷きになって巻き込まれたイルファが喚きながら跳ね起きようとする、その肩からなおも積まれる骨、さすがにアシャも間に合わない、と、その時。

「うぐお.....あ、ん？」

ふいに全てが止まった。

「なんだ？」

がしゃんっ、とイルファの埃塗れの太い腕が、のしかかった骨を軽々と跳ね飛ばした。エタの左右で今にも襲いかかってこようとしていた白骨が次々崩れる。

「終わった、らしいな」

アシャが短剣を片付ける。

「おわ...った...？」

エタが青ざめた表情で次々と元の屍に戻っていく雪白（レコーマー）達を見回した。がしゃっ、ぐしゃっ改めて骨の砕ける音、肉の落ちる音が響き、今の今まで信じられないほどの速度で迫っていた巨体が倒れていく。血に濡れたエタの腕、引き裂かれたアシャの片袖、イルファの頬には一文字の傷跡、けれどそれらがなければ、今の今まで悪夢を見ていたとしか思えないほどのあつけなき、やがて埃にエタがむせて咳き込む音だけが弱々しく聞こえる静寂が戻った。

「...どうなってんだ？」

「どうやら源が殺られたらしいな」

「誰が殺った？」

「.....想像はつくが」

あんまり好ましくない状態だな、とアシャが眉を顰め、額を拭いながら顔を上げ、瞬きした。

「ユーノ！」

「...やあ、アシャ」

洞窟の隅の裂け目からひよこりと顔を出したのは他ならぬユーノ、その後から小さな雪白（レコーマー）を抱えた少年とリークが続いて出て来る。

「無事だったか！」

エタが嬉しそうな声を上げ、リークもほっとしたように顔を緩めたが、すぐにこちらの状況に気づいたようだ。

「どうしたんです？」

「どうもこうもないぞ！」

ここぞとばかりにイルファが、白骨の大群に囲まれ獅子奮迅の働きをしたことを、大仰に身振り手振りを加えて熱弁し始めた。

「それでだな、果てしなく襲いかかってくる敵をこう千切っては投げちぎっては投げ、こっちからこう来たやつをこうしてだな、そこへそっちからこう来たのをこうしてだな！」

「.....の割には、傷だらけじゃないか」

「何を言う！ 俺は孤軍奮闘しつつだな！」

ユーノの突っ込みにイルファが唾を飛ばして力説する。それをうんうんと頷きながら聞くユーノには、幸い傷は増えていないようだ。

（よし）

『運命（リマイン）』をどうやって仕留めたのかは、後でおいおい聞くとして、とアシャが安堵したとたん、

「じゃあ、それってボクがあいつを殺ったから、イルファ達が助かったってことだろ」

「そ、そんなことはない！」

確かにアシャ達はかなり危険だったが、俺はとにかく全くもって完全に無事で安全だったのだ！  
そもそも、こんな中身のない白骨崩れにこの俺が」

「はいはい、イルファにとっては食い足りなかったほどなんだよね」

くすくす笑ったユーノがふいところらを見上げてくる。

「無事でよかったよ」

相手の甘い目の色に、自分への心配を読み取って浮き立ってしまう自分に苦笑しながら、アシャは笑み返した。

「お前こそな」

「ボクは平気」

一瞬のかぎろい、けれどそれはすぐに悪戯っぽい微笑の中に消えてしまう。覗き込もうとしたアシャの視線を振り切るように、くるりと向けた背中の中こうから、明るい声が響く。

「ボクの心配はいらないよ、アシャ。早く戻ろう、レス達が心配してる」

「おおそうだ！ 腹もいい具合に減ったしな！」

「ああいうのを見た後で食事ですか.....」

げっそりした声でエタが呻く。

「何を言う、しっかり食べておいたから生き延びられているのだ！」

これは世界の真理だぞ。

大真面目なイルファのことばに、ようやく一同に笑いが戻った。

空は青く澄んでた。

「それでは、姫君」

拝跪の礼をとったアシャが、差し伸べられた指先に軽く口づける。頷くメーネを安心させるように笑って馬に跨がった。ユーノも同様、メーネに礼を取り、立ち上がる。

「『貴婦人』、いろいろとお力添え、ありがとうございました」

「いいえ、力を貸してもらったのはこちらです、ユーノ」

微笑むメーネが心配そうにアシャを見やる。その仕草は、高貴な身分にしては明け透けすぎるほどの恋慕、それを振り向きもしないアシャの横顔は透明で静かな笑みのまま、鮮やかすぎる応えがそこにある、あなたの気持ちを受け取ることはできない、と。

アルトとリークは既に先日ラズーンへ旅立っていた。同じように先を急ごうとするアシャを、それとなく繰り返し引き止めていたメーネ、それを深めることなく、かといって遠ざけすぎることなく流しおおせたアシャの言動は、ユーノの知らないアシャのもう一つの顔だった。

(これほど綺麗な人にこれだけ想われても揺らがない、なんて)

それほどレアナが愛しい、と暗に示されているようで。

それほどユーノの存在もまた、この先視界に入ることはないと告げられているようで。

(もちろん、レアナ姉さまがいるんだし、そんなことは、望まない、けれど)

「お心遣い、感謝します」

アシャを見つめるメーネ、振り返りもしないアシャ、その光景を断ち切るようにユーノがもう一度頭を下げてヒストに手をかけると、

「ユーノ...」

「...はい？」

ふと、メーネが引き止めた。振り向くユーノをまっすぐに見つめ返したメーネが、一瞬視線をアシャに向け、すぐにユーノを見つめ直す。

「一つ.....伝えたいことが」

「何でしょう？」

「アシャはあなたを」

「は？」

思い詰めた声、珍しく両手をしっかり握りしめて、メーネはユーノを見つめる。

「アシャが、ボクを？」

続かないことばに先を促すと、メーネはもう一度視線を逸らせた。その先を追って振り向いた視界、さっきまで仮面のように笑んでいたアシャが馬上から振り返っているのに気づく。

「.....」

アシャは笑みを消している。見開いた紫の瞳が、光を弾いてきらきらと輝いている。

それはまるでどこかの神殿の彫像のようだった。無言で見下ろしてくる視線は、人のものとは思えないほど冷たい。

「アシャ？ ...どうしたの？」

問うユーノを無視して、何かしら二人の間で動いたような気がした。やがて、

「.....いいえ」

メーネがのろのろと視線を戻してくる。

「何でもないわ.....よい旅を」

囁くようにつぶやいたメーネの瞳が潤んでいるのは気がかりだったが、それ以上を話す気もなく、問わせる気もない気配があった。

「行くぞ」

アシャが短く言い放ちて馬を歩ませ始め、先に礼を済ませていたレスファートとイルファがその後続く。ユーノも、見送るメーネに軽く頭を下げて、すぐに後を追う。

ミアアア.....

どこか遠い雪白（レコーマー）の声が、背中から風と一緒に波となって吹き付け、ユーノ達を次の国へと押しやった。

「ほんとに……なんて月だろう」

ユーノは溜め息まじりに、深い紺色の夜空を見上げた。

温かい、どこか湿気を帯びた夜風が、柔らかく髪を撫でていく。静まり返った夜の闇は、人々の吐息でも含んでいるのか、それとも疎らに生えている湿地のくすんだ深緑の草がささやくのか、微かなざわめきに満ちているようだ。

その蠢く気配が満ちた静けさの中を、ユーノ達は夜の強行軍に踏み切っていた。

一つには、この湿地帯が昼間は熱気に蒸されて進めたものではないということ、もう一つは今もユーノ達を煌々と照らす月にある。

「真昼と言っても通るぜ、こいつあ…おっと」

感嘆をあげて頭上の月を見上げたイルファが、腕の間で寝息をたてているレスファートの体がずり落ちかけたのに、慌てて片手で支える。

「金の光だな」

アシャが笑った。その髪にも光は惜しみなく降り注ぎ、髪を淡い銀色を潜ませた黄金色に輝かせ、身動きするたび、光が金粉を散らすように体から跳ねた。

その、天上から降りた聖なる使いのようなアシャの姿に微笑みを返し、ユーノもそっと空を見上げる。

大きくて美しい月。

けれどその月を眺めながら、ユーノの意識にあったのは。

(アシャ)

正体はもうわかっている。アシャも知られたと察しているのかもしれない。

けれど、それをユーノはまだ口にしていない、あなたはラズーンの王子なのか、と。

(馬鹿なことを…している)

くす、とどこか寂しく笑う。

一旦それを口にし、確かめてしまうと、これまで一緒に居たアシャ、ユーノの側で支え守り続けてくれていたアシャがどこか遠くへ消え去ってしまうような気がして、ユーノは知らぬふりを続けている。

(幻はいつか消える)

どれほどごまかしても、真実は必ず明らかになる。

(だけど……ラズーンの正統後継者が、どうして諸国を巡る視察官(オペ)なんかになったんだろう)

話には聞いたことがある、諸国の王族が庶民の暮らしを知るため、よりよき王と育つために、身分を偽り下々の世界へ入り込むことがある、と。

だがしかし、ラズーンをこれほど遠く離れ、しかもアシャは所在を明らかにしていない様子、そんな酔狂が許されるのはきっと後継者の中でも順位が低いせいなのだろうと推察しているが。

(ラズーンを継ぐのではないなら、なおさら、何のために恵まれた居場所を捨てて、こんな辺境に)

そもそも視察官(オペ)として動いているのなら、後継者としての身分を離れたのかとも思うが、他の視察官(オペ)の対応の仕方から、おそらくアシャの称号(クラノ)は依然として『ラズーン正統後継者』のままなのだろう。

(なぜ?)

そんな男が、ただ一人、あんなぼろぼろの姿で。

ヒストがふい、と頭を上げ、立ち止まった。

ピシャッ、と濡れた草が踏みしだかれる音が、夜の眠りを妨げるように大きく響く。

「アシャ？」

「そのまま行って大丈夫だ」

アシャの声は落ち着いている。

「この辺りには危険な動物はいない」

頷いて、ユーノは再び静かにヒストを進め始める。濡れた足音は時に深みを知らせるが、沼と沼の間には意外にしっかりとした地面があり、アシャが停止を命じることはない。

静けさは再びユーノの頭に疑問を次々と浮かばせる。

(どうしてラズーンの危機を『銀の王族』が救える？ そもそもラズーンの二百年祭って何だ？ 諸国の動乱と太古生物の復活は二百年祭と関係があるのか?)

謎はまだ解かれぬまま、ラズーンへ続く闇の中に横たわっている。

(アシャに問い正してみるか？ でも、何から切り出す?)

話し始めると出自に触れることになるだろうか。この先の処遇について答えなくてはならないだろ

うか。あるいはまた、それを知ったからにはもう一緒には行けないと、拒まれることになるかもしれない。

(何か、大きなものがある)

今ユーノがぶつかっている謎は、単にアシャの正体や『銀の王族』の存在の秘密を越えたもの、世界の成り立ちを語るもののような気がしてしまうのは、考えすぎだろうか。

(尋ねられたらどうする?)

謎の答えを教えよう、その代わりにユーノの生き方を即時決めろ、と迫られたら。

(たとえばセレドを見捨てるような選択が待っているとしたら)

今まで守ってきたものを全て捨てる、そんな選択しか示されないとしたら。

「...ん？」

つい、と前方の金の月光の中を、何か陽炎のようなものが過っていった気がして、手綱を絞り、ヒストを止めた。

目を凝らし、じっと見つめる。

「どうした？」

不審そうなイルファの問いを無視して、ユーノは前方を見つめ、眉を寄せた。

「...何か、いる」

「何か？」

イルファが同じように馬を止め、ユーノが示す月光が照らし出している空間を見た。

「何かって...何が」

見渡すばかりの湿地帯、ところどころにある水たまりが、風を受けて水面が動くのか、きらっ.....きらっ...と微かな光を反射しているだけだ。

「どこにいる？ 俺には見えん」

「う...ん」

ユーノは曖昧に唸った。

なるほど、目には見えない。目を凝らして見つめれば見つめるほど、何も見えてこない。

だが、少し視線を外し、意識の場所を動かすと、どうもそこだけ月光の反射具合が違うというのか、光の屈折率が狂っているというのか、淡く微かに、しかし確かにある種の密度と存在感をもった何か、そこに踞っているように思える。

ヒストが奇立つようにゆっくり頭を上下させた。たてがみが月光を跳ねる。細かな反射が巻き散らされ、それが前方の何かを刺激したように、ユーノの前に茫洋と広がっていた『何か』が、じわじわと集まり、凝り始めた。

「.....」

得体の知れないもの。

今は敵意はなくとも、いつ何があるかわからない。

ユーノは目を細めて剣に手をかけ、いつでも引き抜けるように構える。チツ...チツと、イルファとアシャの手元からも同じ微かな音が弾ける。

何も知らずに眠るレスファートの寝息が、柔らかく優しく響いている。

三人の考えはおそらく同じ。

(『運命(リメイン)』か?)

我知らず緊張してくる体から、ユーノはあえて力を抜いた。息を細く吐き、その分の気力を腹に落とす。

体が強張っていては命取りになる、特に『運命(リメイン)』相手には。

(最大限の力を出しても、逃げるのが精一杯の相手)

アシャに鍛えてはもらっているが、相対するたびに『運命(リメイン)』には全く足りないと感じるばかりだ。正面切ってやりあったら、おそらく数瞬で屠られてしまう。ましてや、逃げることを考えて向かったら、それで終わってしまうはず。

堪えても、腹の辺りに氷塊が生じる。

目の前の金色の霧は粉っぽくなり塊になり、今やはっきりと、ある形を取り始めていた。

ヒストとほぼ同じぐらいの四つ足の動物だ。淡く緑色に輝く目が、中央に黒玉を浮かせてこちらを見据える。

ブルルッ、とヒストが鼻を鳴らし、体を動かした。怯えているのではない。猛らせてくれない主人をじれったがって煽っている。

「だめだ、ヒスト」

低く簡潔に命じたユーノの声に、ヒストは一瞬不服そうに嘶いた。

と、それに脅されたように、目の前の動物の形が揺れ、引き延ばされるようにふうっと伸び上がった。

「？」

命あるものとは思えない自由奔放で不安定な動き、呆気にとられるユーノ達の前で、伸び上がった金の鬮が見る見る凝り固まり、額に猛々しいねじり角を戴いた馬の姿になる。

「おい何だよ、アシャ、こいつあ！」

イルファががらがら声を素っ頓狂に張り上げる。

金の一角の馬は、びくと身を震わせた。無数の小さな粉の渦を思わせるたてがみと尾が、夜風に煽られるように激しく蠢く。

（怯えてる？）

相手の緑の目がおどおどとイルファを見つめるのに、ユーノはきよとんとした。

「たいしたことねえな、俺一人でやれるぜ」

ずい、とイルファが馬を進める。抜き放った両刃の大振り of 剣が、月光を浴びて物凄い。金の馬を一刀両断しようと殺気を込めたイルファに、相手が明らかな怯えを浮かべて、慌てて一歩、後ずさる。

「待てよ、イルファ」

今にも切りかかろうとするイルファを、ユーノは危うく押しとどめた。

「何だ」

「こいつ、ボクらを襲う気はないみたいだ」

「じゃ、どうしてこんな所に突っ立ってやがる？」

「よくわからないけど.....そうだ、レスを起こしてよ」

「あん？ 起こしてどうする」

「レスなら、もっと何か見えるかもしれない」

「なるほどな。よし、おい、レス！ レス！」

「ん.....」

レスファートは揺さぶられてうっとうしそうに眉をひそめた。薄目を開けたが、眠そうにイルファを見返し、再び瞼をふせようとするのを、イルファがしつこく揺り起こす。

「レス！ おい、起きろ！」

「ねむいの...」

「レス、起きてくれる？」

「ユーノ！」

ぱちっとレスファートは目を開けた。

「なに？」

「どういうんだ、この態度の違い？」

イルファのぼやきにお構いなし、ユーノに目で促されて、レスファートは金の馬を振り向き、大きく目を見開いた。

「わあ！」

「ほら、やっぱりこいつ」

「待ってって！」

すぐに剣を振り上げようとするイルファを止めかけたユーノ、その声に被さってレスファートが嬉しそうに叫ぶ。

「かわいい！」

「可愛い？」「かわいい？」

ユーノとイルファが異口同音に繰り返すのに、レスファートは不満そうに振り返る。

「かわいいよ、あのちっちゃいの」

「ちっちゃい？」「小さい？」

「あっ、にげちゃう」

金の馬が堪えられたのはそこまでだったらしい。ふっと身を翻し、たちまち金の鬮に戻って空間に溶け入るように、姿を消しながら走り去ってってしまう。

「...何だよ...あれは」

「これくらい」

茫然としたイルファの声に、レスファートが自分の腕を輪にして見せた。

「動物でしょ？ 金のまき毛が頭とせなかにあって、長い長いまき毛のしっぽをしてた、草猫みたいな。緑の目がとてもきれいだったけど.....あんなの、ぼく、はじめて見た」

「.....月獣（ハーン）だよ」

背後から重い声がして、ユーノは振り返った。

どこか険しい表情になったアシャが、金色の馬が駆け去った方向に厳しい眼を向けているのにどきりとする。

「月獣（ハーン）？」

「ああ」

アシャは緩やかに頭を巡らせた。

「大抵は群れているものなんだが.....どうして一頭で...」

「なにか、いいたいことがあったみたいだよ、アシャ」

レスファートはすっかり目が覚めてしまったらしい。月光に不思議な色に透けるアクアマリンの瞳をアシャに据えている。

「何をだ？」

「わかんないけど.....なにか、こわがってた」

「月獣（ハーン）が群れていないということは、二つの原因が考えられる。一つは月獣（ハーン）を狩るものが現れたということ、もう一つは...」

アシャは苦い顔になった。

「この辺りに人間がいなくなっているということだ」

「どういうこと？」

「月獣（ハーン）は、人間の側でないと生きられない動物なんだ。一定距離よりは人間に近づかない。だが、人間のいる場所でないと生きていけない。衰弱して死んでいってしまう」

「でも、アシャ、この湿地帯の向こうにキャサランっていう国があるって言ってた...」

ふいに、ユーノはアシャの言う意味を悟ってぎくりとした。

「まさか、アシャ」

「既に『運命（リマイン）』の手が回っているかも知れない」

「冗談じゃねえ」

ぞっとした顔でイルファが応じる。

「わざわざ、そんな中へ行くのか？」

「キャサランの迂回ができないな、国が大きすぎる」

アシャは紫水晶の瞳の奥に冷えた色をたたえた。美しい顔にニヤリと凄んだ笑みを浮かべる。

「どうする？」

「そこしかないなら」

ユーノはぐっと手綱を引き締めた。

「行くしかないな」

今度はやや穏やかな笑みを返して、アシャが頷く。

「まったく！ 喧嘩好きな奴ばかり揃ってやがる！」

イルファは溜め息まじりに唇を曲げたが、レスファートのことばに思わずがっかりした。

「それって、イルファのこと？」

「人の気配がない...」

低くつぶやいて、ユーノはヒストを止めた。

不揃いな石が敷き詰められた街路には、そこそこに茂るジェブやヒスパ、タイノンの木々の、枯れた葉がうすら寒い風に舞っている。街路の両側、灰色の石造りの家並みも重い沈黙を守り続け、屋根にも砂埃が覆っているような鈍さが澱んでいた。

「おい、アシャ」

イルファが眉をしかめて辺りを見回しながら尋ねる。

「これが金の都と噂に名高いキャサランか？」

「嫌な予感が当たったね、アシャ」

ヒストの手綱を握り直しながら、ユーノは苦々しく吐いた。

カツツ、と蹄の当たる固い音が、虚ろに、人っ子一人いない街に飴し、吸い込まれて消えていく。

「誰も...いない...」

竦んだようなレスファートの声が不安に揺れた。

「どうする、アシャ.....アシャ？」

答えがないのに振り返ったユーノは、相手が凍りついたように一軒の家の窓を見つめているのに気がついた。それは道に面した平屋の一つで、石を彫って作り上げたと思われる飾り窓が、壁の所々に配置されている。

アシャの目は、その窓の一つの格子に結ばれた黒い布に惹き付けられているようだ。

やがて、アシャはゆっくりと馬を側に進め、身を屈ませて布の結び目を解いた。ふわりと風に翻る黒布の隅に、金色の紋章のようなものが縫い取ってある。それを目にしたアシャの顔がいよいよ険しくなった。

「アシャ？」

「っ」

問いかけたユーノの声に、はっとしたようにアシャは黒布を荷物に突っ込み、ユーノ達を振り返った。

「何？」

まっすぐ見つめると、アシャは苦い表情になった。

「紋章だ」

「誰の？」

「『運命（リマイン）』の王を名乗る人間の。.....これは、俺達への挑戦だろうな」

「挑戦?!」

「ああ。俺達がここを通る事を予想して、あらかじめここを襲ったんだ、自分達の力を誇示するために」

「それだけのために？」

ユーノは目を細めた。

「それだけのために、この街を廃墟にしたって言うのかい？」

「あいつらのやりそうなこったぜ」

イルファが殺気立った口調で吐き捨てた、と同時にぐっと周囲の気配が硬化した。瞬時にユーノが顔を上げる。

「第一陣が」

「来たようだね！」

アシャのことばを継ぐや否や、ユーノが引き抜いて振り上げた剣に短剣があたって跳ね返る。う、わあっ、と関の声が周囲から上がり、静まり返っていた街路に見る間にカザドの黒兵士の姿が溢れた。

「イルファ！」

剣を交えて突っ込みながら、ユーノは叫ぶ。

「レスを頼む!!!」

「おうさ!!!」

片腕でレスファートを抱きかかえるようにして、イルファが馬上で両刃の剣を振り回す。

あれほど人の気配がなかった街に、これほどの手勢をどうやって隠していたのか、次々とカザド兵はユーノ達に襲い掛かってきた。レスファートを抱えている分だけ、どうしても隙ができやすいイルファに、三人のカザド兵が同時に飛びかかる。

「んなろくそ！」

イルファが怒号をあげて一人を切り捨て、もう一人の腹を刺し貫いた。残った一人がイルファの太い首を狙うところへ、ぎりぎりユーノの切っ先が剣を跳ね上げる。伸び切ったユーノの腹部を狙った剣に、とっさに脚を振り上げ、ユーノは相手を蹴り倒した。カザド兵は倒れた仲間を容赦なく踏みつけ、迫ってくる。激しい剣戟の音が石造りの窓やベランダや軒に響いて反響し合い、方向感覚を狂わせていく。

「ちいっ！」

ユーノは鋭い舌打ちをすると、ヒストの手綱を引き、幾人かのカザド兵を蹴散らした。

(でも、一体どうして)

戦闘にも過熱しきらない頭の冷静な部分が呟いている。

(どうしてカザドがこんな所まで来られる？ これほどの人数、尾行してくるにしても、噂を聞かないはずがないのに)

「ユーノ！」

後ろに気配を感じると同時にアシャの警告が響いた。振り向き様に剣を一閃、だが反応はやや遅く、相手の剣が左腕を掠める。ぴりっと走った痛みに一瞬眉をしかめたが、たじろぐことなくユーノは敵を倒す。

「大丈夫か?!」

ある種の儀式を思わせる優雅さで敵を倒しながらアシャが尋ねてくるのに笑い返す。

「これぐらい傷に入らないさ、は、あっ！」

ヒストを駆り、またもや動きの鈍いイルファに群がろうとするカザド兵に向かう。

(右.....左、右！)

一瞬の隙も見逃すことなく、アシャに教えられた剣術を十二分に生かす。斬りつける、突き入れる、その攻撃動作と同時に、次の急所、次の獲物に狙いを定める。空いた手足で相手の無防備な部分を攻め、その動きを生かしながら自分の体を守るために、見た目には緩やかな曲線を描く動きに集中する。

「、っっ」

ヒストを脚の合図だけで操るのがレノほどはうまくいかず、再び傷を受けた、その瞬間、またもやぴりっと妙な感触が広がる。

(まさか)

嫌な予感がした。

剣に毒を塗るなど、名のある剣士、誇りを持った者は行わないが、カザドなら常道だ。だが、ユーノを殺すはずはない。前のように痺れ薬の類だろうか。

(冗談じゃない)

ラズーンへ辿り着く前にカザドの捕虜になるなどごめんだ。楽しい歓迎が待っていないだろうことぐらい想像がつく。

気のせいか、重くなってきたような左腕をことさら無視して剣を揮う。切られたカザド兵の絶叫、倒れた兵士は『運命（リメイン）』への忠誠を示すかのように、見る見るどす黒い汚泥と化す。その屍を跳ね散らかし、踏みにじって迫ってくる、カザドの猛攻。

「んっ？」

(あれは)

ふいにユーノの視線は喧噪の彼方、争いの場から遠く離れた所でぼつんと一人、馬に跨がっている男に止まった。

白髪とも言える淡い色の髪、容貌は若くすらりとした身体には黒衣を纏っている。胸元には、妙に毒々しい色を放つ真紅の宝石を取り巻く金の翼と、その宝石の内部を貫く一本の振じれた金の棒を組み合わせたものが、ペンダントになって下げられている。

その『紋章』はさっきアシャが素早く荷物に押し込んだ、黒布に描かれていたのとそっくりだ。

(では、あれが『運命（リメイン）』の王！)

はっと息を呑むユーノに気づいたように、その男はにんまりと唇の両端を上げて見せた。真紅の瞳が禍々しい色をたたえてユーノを射抜く。

ぞくり、とした。

思わず竦んだ背中をことさら伸ばすようにして見返すと、男は皮肉なほど丁寧な一礼をして、ふいと馬ごと向きを変えた。同時に、今の今までユーノ達を攻め立てていたカザド兵が、次々と蜘蛛の子を散らすように姿を消していく。

「おい、何だ、何だよ、拍子抜けじゃねえか.....おい、ユーノ？」

暴れ足りなさそうなイルファの声に、ユーノはますます重くなってくる左腕を持って余していた。まるで金を計る錘でも括り付けられたようだ。去っていった白髪の子の引力に体の力が奪われていく。寒気が襲ってくる。

剣を鞘に納めるのがやっとだった。

ユーノはそのままぐったりと。ヒストの背中を身を委ねて息を喘がせていた。

「気分はどうだ？」

覗き込む気配に、ユーノは薄く眼を開けた。

キャサランの街、家人が消えてしまった家屋の一つに入り込んでの野営、家の中も荒らされてはいるが、火を焚くところも確保出来、雨風しのげれば十分だ。

「ずいぶん...まし」

炎の明かりに照らされているアシャの顔に笑み返す。

「即効性の麻痺薬だろう。まだ腕の感覚は戻らないか？」

「うん...ちょっと」

ちょっとどころではない。まるで左腕が消え失せたように感じる。今なら肩から腕を切り落とされてもわからないかもしれない。

「ほら、もう少しこれを飲んでおけ」

「ん」

差し出された木の椀にはどろっとした緑色のものが入っている。つんと特殊な鼻をつく匂い、意識がはっきりする前に一度飲んだらしいが、そのあたりはあまり覚えていない。

唇を開き、口の中に入ってきたものを何とか一所懸命飲み下そうとする。どんな成分かよく知らないが、青臭い匂いやざらざらとした舌触り、鼻の奥を満たす苦みのせいだけではなく、飲み込む動作そのものがなかなかできない。喉が他人のものようだ。

眉をしかめたユーノに、アシャが優しい笑みを浮かべて椀に水を少し注いでくれた。

「苦いか」

「うん.....。もう一杯、水、くれる？」

「それが、あんまり水が手に入らなくてな」

『運命（リマイン）』が行ったのは住人の排除だけではなく、水や火を得る施設そのものの破壊もあり、井戸などはことごとく潰されていて、ようやく見つけたのは家の裏手の庭にあった小さな古井戸、どうやらそこは生い茂った草に隠されていたために破壊を免れたらしいとのことだった。

「そうか」

キャサランの入り口でここまでの破壊がされているなら、この先どれほどの蹂躪が待ち構えているかわからず、それは巨大なこの国を突っ切らなくてはならないユーノ達にとって厳しい旅路を示唆している。

ユーノは溜め息をついて、名残惜しく椀に残った水を舐め、空になった椀をアシャに差し出した。と、その手首を相手が軽く握って引き寄せ、瞬きする。

「アシャ？」

「水はないが」

「うん？」

「水がわりをやろう」

呆気にとられて開いたままの唇へ、まるで風が吹き寄せるようにさりげなくアシャは唇を寄せた。体を引きかけても動けない、振り放すことを思いつかないまま、唇が触れ合うか触れ合わないかという近さに思わず目を見開く、とたん。

バンッ！

「アシャ！」

イルファの大声と同時に部屋の戸が開いた。

「、何だ」

すっとアシャが身を引いた。ユーノの椀を受け取り、まるで今の動きが幻だったように、素っ気なく背中を向ける。

「この街だけじゃなさそうだが、人がいないのは」

「ふうん.....それで、月獣（ハーン）は見かけたか？」

「いや一匹も。レスも見ないと言ってる。けどよ、まさか『運命（リマイン）』だって、いきなりこんなに大勢の人間をすぐに消すなんてこたあ、不可能だろ？ 殺すにしても死体の一個や二個や転がってるだろうし、一人ぐらいは生き延びてるだろうが」

「どうだかな」

アシャは顔から表情を消した。整った女性的な顔が人形のように見える。

「ギヌアが直接指揮を執ってれば別だ」

「ギヌア？」

「『運命（リマイン）』の王だよ」

「そういや、妙にすました奴が一人いたな...」

イルファとアシャの会話をどこか気怠く聞きながら、ユーノの脳裏には黒馬に乗った白髪の男が浮かんでいた。

冷笑的な真紅の眼、特徴のあるかぎ鼻で、皮肉っぽく歪めた唇からは人を傷つけることばしか出ないような気がする。

(ギヌア.....『運命(リメイン)』の王.....)

ずしん、と左腕がなお重さを増したようだった。

(こんな麻痺薬は初めてだ)

意識はあるし、傷を受けたところ以外は滑らかに動くのに、左腕だけが異様に重い。いや、重さが少しずつ肩へと広がってきているようにさえ感じられる。

(アシャの薬が効けばいいけど)

ぼんやり思って、そういえばさっきのアシャの動作は、と思い出した。

(キスしようとした.....?)

「まさ.....か...な.....」

つぶやいた声は遠くに流れ、湧き上がってくる眠気に負けて、ユーノは再び深く眠り込んでいった。

その少し後。

「ん...」

ごろん、と寝返りを打ったレスファートは、夢に怯えて手探りでユーノの手を求めた。

「ユーノ？」

寝ぼけ眼で起き上がり、どうして側に眠っているはずのユーノの手が見つからないのかと怪しんで、のろのろと周囲を見回す。

あまり大きくない家だった。一部屋にレス達四人が横になるともう一杯だ。右の壁に沿って、毛皮を敷いてイルファが寝転がっている。炉には赤く火が燃え、それを挟んで左の壁には、布を巻き付けたアシャが静かな寝息をたてていた。その隣は頑丈そうな木の扉で、赤茶けた表面に横に二本、幅の広い鉄が打ち付けてある。その左には細工を施した石の窓、外には明けていない深い夜が身を潜ませている。

そして、その左に、藁を重ね数枚の布を敷いて、ユーノが横になっていたはずだった。痺れ薬に左腕をやられて、けれどアシャの薬で少し楽になったように見えた、そう安心して眠ったはず、なのに。

今そこには、寒そうな布の窪みが残っているだけだ。

疲れたぼんやりしたレスファートの頭に、これだけのことが送り込まれるまでにはしばらく時間がかかった。だが、それは突然、少年の心を激しく叩きつけた。

「ユーノ！」

跳ね起きるレスファート、なのになぜかアシャもイルファも目を覚まさない。

「ユーノ！ どこへ行ったの?!」

レスファートはうろたえて辺りを見回した。

どこからも応えが返ってこない。風が唸って街路を吹き抜け、枯れ葉を踊らせていく音ばかりだ。

カタン。

いきなり背後で音がして、レスファートは体を強張らせて振り向いた。

カタン.....カタン...

しっかり閉めていたはずの扉が、風に微かに揺れている。

鍵代わりの留め金とつかい棒が外されているのに気づくや否や、レスファートは扉へと突進した。乱暴に重い扉を引っ張り開け、街路に飛び出す。

「ユーノ！」

ユーノ、ユーノ、ユーノ.....。

石造りの街角に、レスファートの声が虚しく反響していく。

「どこにいるの?!」

いるの、いるの、いるの.....と音が後を追った。

ふいに、レスファートの視界の端で何かが動いた。すぐ近くの出っ張った石窓に、何ものかがさっと隠れたようだ。

「.....だれ...？」

誰もいないはずの街。

いなくなったユーノ。

生唾を呑んで、レスファートはそちらに近づいていく。

一步、一步、そしてもう一步。

(また！)

金色の粉がふわっと散ったような、きらきらした反射。暗闇に明るく、重なり合う石の平面で鮮やかに跳ねる。

それを見た瞬間、レスファートは駆け出した。

「ユーノ!!」

推測は当たった。

石窓の向こうに、額にねじり角を生やした金色の馬、その傍らにユーノが陽炎のような儚さで立っている。

身に着けているのは、眠る前まで着ていた濃紺のチュニックではない。淡く透ける薄物一枚。それを、肩から腕へ、腰を回り片足に纏わりつく数本の金の透かし彫り細工で留めている。左腕に傷に巻いた包帯をくるむようにずっしりとした重そうな腕輪をつけ、もう一方の手には肩から手首へ流れる金鎖を掛け、額に真紅の宝石を飾った金の輪で髪を留めている。首に掛かったさらさらと音をたてる繊細な首飾りも金、煌めく金色で飾られた体は、キャサランの名を人に与えたような眩さだ。

だが、その表情は固く冷たく凍てつき、瞳の黒は闇のように何も映していない。

「ユーノ！ どうしたの？ ぼくがわからないの？」

不安に駆られてレスファートは急いで歩み寄った。と、まるで威嚇するかのようには月獣（ハーン）がレスファートの方へ歩み出た。ユーノが差し出した手の下に首を差し込み、眼だけをレスファートに向けて凝視する。燐光のような緑色の瞳が殺気を含んで少年を捉えた。

「なんだい、おまえなんか、ただの子馬じゃないか」

唇を噛み、レスファートは真っ向からその視線を受け止めた。大切なものを理不尽に攫われた怒りを込めて言い放つ。

「ユーノを返してよ」

いやいやをするように、月獣（ハーン）は首を振った。ユーノが応じるように、優しく月獣（ハーン）を撫でる。愛撫に酔うように、月獣（ハーン）は目を細めてユーノを見上げた。

「返せったら！」

腹立たしくて、怒鳴りながら、レスファートはまた一步近づいた。

月獣（ハーン）の尾がふわふわと空に舞う。月は雲に隠されてしまったのか、辺りは暗いが、その中でユーノと月獣（ハーン）だけが別世界の幻でもあるかのように浮かび上がって見える。

「ごたごたぬかさずに、さっさと返しやがれ！」

レスファートの口を、イルファ仕込みの荒いことばが突いた。

びくんと体を震わせて、月獣（ハーン）が後じさりする。

にっと笑ってなおも脅しをかけようとしたレスファートだったが、ユーノがつい、と、まるで月獣（ハーン）を庇うように前に進み出たのにぼかんとした。

「ユーノ？」

ユーノの表情は動かない。レスファートをまるで見知らぬ誰かのように見返してくる。

「ユーノ...」

軽く身構えるユーノが、明らかにレスファートではなく月獣（ハーン）を守ろうとしているのだと気づいて、レスファートは泣きそうになった。

「どうして...？」

相変わらず無表情なユーノの視線がひんやりとレスファートを射抜き、次の瞬間あっさりと背中を向けた。薄物が夢の欠片のようにひらひらと乱れてユーノを追う。

「ユーノ！」

慌てて叫んだレスファートの声にも、ユーノは振り返らない。

「行かないでよ！」

膝を震わせて立ち竦んだまま、レスファートは声を張り上げた。

だが、ユーノの背中にはレスファートの想い全てを拒むようにどンドン遠ざかっていく。その側には、まるで当然のように寄り添う月獣（ハーン）の姿。

(ユーノ、どうして?)

ぼろぼろとレスファートの頬に熱い涙が零れ落ちた。

『レス！』

頭の中でユーノの声が響く。

『レスのこと、大好きだからね』

『痛かったろう？ よくがまんしたね』

明るい笑顔、不安を取り除いてくれる腕、温かな胸、しがみつける、抱きしめてくれる、レスファートの抱き所。

「ユーノお！」

(ぼくじゃ、とめられないんだ)

こぶしで涙を擦り取り、レスファートは身を翻した。

どうしてユーノがいきなりレスファート達から離れたのか、なぜ自分の声に応じてくれないのかわからない、けど。

(アシャなら)

湖で、草原で、生きるか死ぬかの時にいつも、ユーノはアシャには傷みを晒す、訴える。

(ぼくじゃだめでも、アシャなら)

必死に駆け戻り、まだなお眠ったままのアシャに飛びつき、激しく揺さぶる。

「アシャ！ アシャ！」

こうしている間にもユーノはどんどこかに連れ去られてしまう。焦りと恐怖が胸を締め付ける。

「起きてよ、アシャ!!」

だが、一体どうしたというのだろう、あれほどの切れ者であるはずのアシャが、これだけ呼んでも目を覚まさない。

レスファートは歯を食いしばった。両手をアシャの腕に掛けたまま、目を閉じ、頭をアシャの胸に押しつける。

(心を近づける.....もっと.....もっと.....)

もやもやとした感覚がレスファートの心の中に広がってきた。アシャが何かもがいている感じがする。何かの薬だろうか、心の耳が塞がれている。

(アシャ！ 起きて！)

呼びかけながら、レスファートは眉をしかめた。意識して、人の心の中にこれほど深く入り込むのは初めてだ。たちまち疲労してきて、額から体から汗が滴り落ちる。

(アシャ！ ユーノがどこか行っちゃう!!)

とうとう焦れて、レスファートは心の中で絶叫した。

びくっと、アシャの腕が跳ね上がる。

「う...む.....っ、レス！」

重く唸ってアシャが目を開けた。ほっとしてへたり込むレスファートの体を急いで支えてくれる。

「アシャ.....ユーノが月獣（ハーン）に...」

「わかってる！ くそ、『運命（リマイン）』の奴、催眠剤を使ったな！」

猛々しい表情で立ち上がったアシャは、袋の中から青い錠剤の入った小袋を取り出した。

「レス、イルファに飲ませろ。すぐに効くはずだ」

「うん！」

レスファートは眠っているイルファに駆け寄り、相手の口をこじ開け、薬を押し込んだ。食い意地がはっているとでもいうのか、しっかりそれを飲み込んで、それほど待つまでもなく、イルファはのんびりとした様子で起き上がった。

「...よう、早いな、アシャ、まだ暗いぞ？」

「早いな、じゃない」

じろりと相手をねめつけて、アシャは手早く荷物をまとめだした。

「『運命（リマイン）』に先手を取られた。カザド兵の襲撃は囷だった。あいつらは俺達の目をそらすためだけのもので、『運命（リマイン）』の狙いはユーノだったんだ」

「ユーノ？ .....いないじゃないか」

「カザド兵の剣に塗ってあったのは催眠剤だ。そいつで俺達はまんまと眠らされ、ユーノだけが引っ張り出されたんだ」

「そういや、剣が擦った時、何かぴりっときたな」

「ぐずぐずしてられない、ギヌアが出てきている」

荷物を持ち上げるアシャの紫の瞳に、珍しく焦りが浮かんだ。

「俺はユーノを追う。お前はレスを連れてキャサランの国境まで先に行ってくれ、落ち合う場所はそこだ」

アシャが放り投げた地図をレスファートが覗き込むと、赤い印が描かれている。

「ここだね.....あ、れ...？」

レスファートは首を傾げる。

地図は今までみたどんなものより詳しいもののように見えた。そればかりか、世界の果て、正確な場所がわからないはずのラズーンの位置や、そこに至る道までも描かれている。

「アシャ.....これはどういうことだ？」

さすがにイルファも気づいたのだろう、ぴくりと眉を上げる。

「一介の旅人が、どうしてこんな地図を持ってる？ .....ラズーンまで巡る旅人など、俺は聞いたことがないぞ.....ただ一つのお伽噺を別にして」

イルファが厳しさをたたえてアシャを見据える。レスファートがその視線を追って振り向いたアシャの目は、垂れ落ちてきた金髪に遮られ、淡く煙って見えた。

「後で話す」

ゆっくり目を伏せると、アシャはくると背を向けた。

「話せるところまではな。.....今はユーノを助ける方が先だ」

「ぼく.....馬を引いてくる！」

イルファとアシャの間に漂った奇妙な緊張感に、レスファートは急いで部屋を出て、馬を引いて戻った。

「どっちへ行った？」

アシャが鋭い視線を街路に投げる。

「そっち！ 気をつけてね、アシャ！」

「ああ！」

音も立てずに馬に跨がり、あっという間に走り去るアシャを見送って、レスファートはイルファの元へ戻った。何だかひどくぐったりとしていたが、イルファが珍しく難しい真面目な顔で地図を覗んでいるのに気づく。

「どうしたの、イルファ」

「この地図...」

「地図？」

「精巧すぎるな。レス、レクスファのこんな国外れに湖があるなんて知っているか？」

促されて、レスファートも地図を覗き込んだ。

「ううん.....一通りの地理はやったけど」

「ここはマクタ山脈が走ってるど真ん中だ。人間が行けるような所じゃない」

考え込んだ声でイルファがつぶやく。

「羽根でもあれば別だが、この山脈の内側への道はないぞ？ 誰がなんで、ここにこの大きさの湖があるとわかる？」

イルファがぐっと眉を寄せる。

「.....これは.....ひよっとすると、あの話はお伽噺じゃないってことか？」

「おとぎばなし？」

「.....聞いたことぐらいあるだろう。『はじめに天と地あり。戦ののち、荒れた天地の間にラズーンのみ残りき』」

イルファが諳んじるのに、レスファートは頷いた。

「しってる。『ラズーンはこの世のはてにして、とうちしゃなり。その力、あまねく世界におよび、人をつくり、動物をつくり、この世をつくりたり。また、ラズーンははんていしゃなり。その力をしめすために、いとくらき運命の手もておこない、国々にその目をむかわせり。かくして、ラズーンはどうごうふとして、国々にくんだりんせり』.....でしょ。おぼえさせられたけど、意味はよくわかんないよ」

「目、だ」

イルファは首を振った。

「目、が旅人を指すと考えればどうだ？ 旅人ならば、どの国をどのように巡っていこうと目立たない。それに、暗き運命の手つてのは」

ふっと窓の外で何かが動いた。それをレスファートが振り返る前に、イルファが剣を引き寄せる。

「どうやら.....第二陣が来ちまつたらしいな」

「え...」

「こっちだ、レス！」

イルファに軽々引っ張り寄せられたレスファートは、今の今まで自分が居た所にざくりと剣が突き立つのを見た。

「イルファ！」

「わかってる!!」

扉を蹴破って入ってくるカザド兵を一刀両断、傍らにいたのを殴りつけ、じりじりとイルファは後じさりした。背後に庇われたレスファートも、小作りの短剣を抜く。

と、いきなり背後に黒い気配がひたりと迫った。

「っ！」

後ろから伸びた黒い手が、口を塞ぎ押さえる。振り回しかけた短剣がもぎ取られる。

「イル.....っ！」

どすりと重い当て身をくらって、レスファートは呻いた。気づいてくれたらしいイルファの音が、薄れる意識の向こう、剣のぶつかり合う音の合間に遠く聞こえる。

「レス.....っ!!」

(イルファ.....アシャ.....ユーノ.....)

急速に目の前が暗くなり、それきりレスファートは気を失ってしまった。

『アシャ...』

「ん？」

ふいに、誰かに呼ばれたような気がして、アシャは馬を駆りながら振り返った。

駆け過ぎてきた街並みは灰白く、白骨じみた虚ろさをたたえて静まり返り、人の気配も『運命（リメイン）』の気配もない。

(空耳か...)

アシャは再び厳しい顔になって馬を駆った。

(ここまで『運命（リメイン）』が思い切った手を打ってくるとは思わなかった)

ギヌアが出てくるほどだから、追い詰められてきているとは思っていたが、カザド兵なら捕らわれてもユーノの命に猶予がある。しかし、『運命（リメイン）』の手に囚われたとしたら、ユーノが生きて戻ってくる望みはほとんどない。

(『銀の王族』か...)

かつてはその名ゆえに幸せを約束されていたものが、今やその名ゆえに『運命（リメイン）』に狙われる。

(皮肉なことだ)

顔を歪める。

(イルファはもう俺の正体を察したか)

いくら女に甘く物事にこだわらない大雑把な性格とはいえ、伊達や酔狂で近衛の剣士だったのではない、あの地図からアシャの正体に見当をつけるぐらい、やってのけるはずだ。

正直なところ、アシャはどうしてイルファにあの地図を渡してしまったのか、よくわからなかった。別にあの家で再び落ち合えば済む事なのだ。

あるいは、アシャの本能が、これからぶつかろうとしている相手を恐れて、そうさせたのかも知れない。

(俺がもし死ぬようなことがあっても、あの地図があれば、イルファとレスはラズーンに着ける)

だが、それだけではないもの、何かアシャにああさせた。正体を隠したまま、イルファ達と付き合っていくのに苦さを残し始めていた、何か。

(長く一緒に居過ぎたな)

これほど長く、旅を共に続けてきた仲間などかつてない。

(俺も甘い)

苦笑いした。

自分の立場も成り立ちも十二分に理解しているはずなのに、だからこそ絆など一切結ばずに来たのに。

(ユーノに出会ってから、か)

失いたくない繋がりがあるのだと、初めて気づいた。

(それにしても、月獣(ハーン)を使うなんて...)

『運命(リメイン)』らしくない。

考えたアシャの耳に、彼のものではない、もう一頭の蹄の音が重なってくるのが届く。

鋭い神経質な音、聞き覚えのある掛け声、息づかい。

「来たか」

アシャはゆっくり目を細めた。

家屋を隔てて、一筋向こうを駆けていると思われる蹄の音、その馬を駆っている相手に視線を向ける。

視界に流れていく街並みの、ところどころにぽっかり開いた向こうの筋へ続く路地が、アシャとほぼ同速で駆ける黒馬を垣間見せる。子ども達が祭りで楽しむ、明かりの周囲を回る人形のおもちゃのように、闇に溶ける黒衣が閃いている。白い肌に短い白髪、風に乱れた髪が激しく躍り、まるで白い炎が黒衣を纏って馬を駆り立てているようにも見える。

相手はアシャの視線に気づいたようにこちらを向いた。真紅の瞳が彼を見つめ、にやりと不敵な笑みが唇を歪めた。

「ギヌア・ラズーン...」

アシャは重い怒りを込めてつぶやいた。

正面に、街の広場だろう、かなり開けた場所がある。中央に噴水、これほど街が荒れているのに、澄んだ水はさらさらと音をたてて噴き上がり、水盤へなだれ落ちていた。激しく石を削っていた蹄の音が次第に速度を落として、水盤の回りを巡り、入り乱れて響き合う。

やがて、二人の男は猛る馬を互いに御しながら、水盤を挟んで向かい合った。

「久しぶりだな、アシャ・ラズーン」

太く明瞭な声がギヌアの口から響いた。

「あれで終わりかと思っていたのにな」

「俺を見くびるなよ」

アシャは冷ややかに応じた。

「あの程度で、ラズーンの正統後継者がやられると思ったのか」

アシャの脳裏に、別れた時が甦ってくる.....。

アシャがレクスファを発ったのは夜遅くだった。盗賊王を倒した祝宴の最中に、そっと抜け出してきたのだ。

今までの経験から、長居しすぎるとろくなことがないとわかっていた。影のように抜け出してきたため、ほんの少しの用具しか持ち出せなかった。

(ラズーン支配下(ロダ)なら、いうほどのこともあるまい)

それに。

(世界の果てに溶け入ることもまたよし)

誰もが望むだろう称号(クラノ)を捨て、一人の視察官(オベ)、一人の人間として生きていくことを選んだ。快適さや安全を満たすことなど望んでいない。

それに、どうしてもとなれば、宙道(シノイ)を使えばいい。

「...と」

そこまで考えて、はっと荷物を改め、短剣まで置き去ってきたことに気づき、舌打ちする。

(どうかしている)

たぶん、あのイルファとかいう剣士のせいだ。アシャが男なのが不服でたまらない様子、そのまま夜半になだれこめば厄介なことになりそうだったのだ。

しかし、短剣は視察官(オベ)の認識票でもある。ラズーン支配下(ロダ)に放り出しておけるものでもない。否応なくレクスファに戻るしかない。

(さてどうやってあいつを出し抜くか)

溜め息をついて向きを変えた瞬間、背後に突然殺気を感じた。

「っ！」

一気に金のオーラがアシャに絡み付き押し包む。不意を突かれて抵抗できないまま、まともに衝撃波をくらった。

「うっ...」

霞がかかると驚愕が広がる。

金のオーラは視察官(オベ)のみが操れるはず、どうして視察官(オベ)が、同じ視察官(オベ)、

それもラズーンのアシャを攻撃などしてくるのか。

(く、そっ)

眩む視界、片膝をついて、それでも必死に振り返ると、煌めくオーラの中で真紅の瞳がほくそ笑んでいた。

「な、に...っ」

「死んで頂こう、アシャ・ラズーン」

「その声、は」

再び衝撃を叩きつけられ、崩れ落ちながら呻く。

「ギヌア・ラズー.....っぐっ！」

倒れたところを腹を、続いて頭を激しく蹴られて歯を食いしばった。

「その名を呼ぶな」

ラズーンの第二正統後継者であるはずのギヌアが、どこか歪んだ表情で見下ろしてくる。

「私は、只今この時から『運命（リマイン）』に君臨する」

「ば...かな.....ことを...」

立場も忘れて冷笑が零れた。

正統後継者であるということは、この世界の成り立ちとラズーンの意味を理解しているということだ。この世界が如何に危うく脆い基盤の上に存在しているかを知っているということだ。そのうえで、この崩れやすい幻を支配したがる気持ちがアシャには理解できない。ましてや、『運命（リマイン）』は、その中の幻の一つでしかない、君臨し支配するだけの存在さえ確保されていないのに。

「ラズーンが.....滅べば...『運命（リマイン）』も.....同じ...っが、あっ」

立て続けにボロ切れのように蹴られ、跳ね飛ばされた。金のオーラに縛られ、意識も同時に刻まれて、一気に気力と体力が奪われる。支配下（ロダ）に居ると思いついた支配者の驕り、そう嗤われても当然だと臍を噛みながら、

「それはどうだかな」

にんまり笑ったギヌアの顔を見上げた、それが最後の意識だった。

そこからいつ気がついて、どこをどうしてセレドまで辿りついたのか、なぜギヌアはアシャを屠らなかったのか。思念とオーラで空間に道を開く宙道（シノイ）は使えるような状態ではなかったはずだったが、それでもアシャはギヌアから逃れ切ったのだ。

「あの時はいい様だったな、アシャ」

ギヌアは嘲った。

「ラズーンの第一後継者ともあろうものが、第二後継者にまんまとされてやられるとは」

「そういうお前こそ、あそこまで俺を追い詰めておきながら、仕留め損なったのは最大の過ちだ」

アシャは嘲笑を返した。

「そういう詰め甘さが、どこまで行っても二番手でしかない証拠だな」

ギヌアが唇を歪める。

「我が身可愛さにこそ隠れていた男に言えるものか、重責から逃げたくせに」

「そのことは『太皇（スーグ）』に既に許しを得た」

ギヌアの嘲りを、アシャは突き放した。

「俺はただの視察官（オペ）として生きる。ラズーンを継ぐよりこちらの方が性に合う。それほど力が欲しいなら、ラズーンはお前が継げば」

「それが気に食わないのさ」

ギヌアが目を細めて遮った。

「なまじ力があるからと、小賢しい謙遜ぶったことを。私を哀れんででもいるのか」

歪めた唇から刺々しい声を吐き捨てる。

「『太皇（スーグ）』は今でもお前をお気に入りだ」

「それで『運命（リマイン）』に降りたのか」

びくり、とギヌアは額をひきつらせた。

「関係がない」

冷やかな声で続ける。

「ラズーンの二百年祭を見ているうちに、その愚かしさが見えてきたのだ。既にラズーンは過去の遺物、現世を治めるに相応しいものではない。……我等が力は十分に熟した。お前ももうそれを知り尽くしただろう、ラズーンのアシャ」

沈黙が満ちた。

再びゆっくりとギヌアの馬が進み始める。それを受けて、アシャも静かに馬を進ませる。距離をはかり、間合いを見る二人の間に見えない火花が激しく散る。

「『運命（リメイン）』に來い、アシャ」

ふいに、ぼつりとギヌアが言った。

「嫌だと言ったら」

冷たくアシャが返す。

「ラズーンの先は見えている」

ギヌアが応じる。

「ラズーンの欠陥が太古生物を復活させ、この世界を二百年ごとに危機に陥れるというのに、人はまだ自らで世界を成り立たせることができない」

だが、我等『運命（リメイン）』なら。

「人よりずっと、世界の後継者に相応しい」

「まだわからん」

「世界をこの街のように、全てを廃墟にしたいのか」

「決してません」

再び沈黙がその場を支配する。

カツ。

鋭い蹄の音をたてて、ギヌアが馬を止めた。

同じくアシャも、相手を睨んだまま、手綱を絞る。

「…よかろう」

ギヌアが睨み返しながら唸った。

「私達は永久に変わらない」

「おそらく、な」

殺気を込めてアシャは応じた。

と、どうしたのか、いきなり、くくつ、とギヌアが喉の奥で嗤った。意地悪く冷たい視線でアシャを見やる。

「あの娘、ユーノとか言ったか、あれが同じように答えるかな」

「どういうことだ」

相手の瞳を見据えたまま、尋ねる。

「あの娘は『銀の王族』にしては珍しい。視察官（オペ）の剣を覚え、銀のオーラを持つ。少し仕込めば、あの精神力、なまじの視察官（オペ）より心強い味方となろう」

「……」

「ましてや、ラズーンの意味、を知ったなら……選択をし直そうという気にもなるだろう」

アシャは無言だ。

「それに、まだ月獣（ハーン）を使った理由がわからぬようだな」

ギヌアが薄く笑みを広げた。

「月獣（ハーン）は確かに心優しき動物だ。だが、あのもの達の『優しさ』は、己を憐れみ愛しむための優しさだ。人から害を受ける己を抱き締めているだけの……それは人が強大すぎて、憎むことさえ恐ろしいためのものだ。……だが、もし、その『人』が自分達より弱ければどうだ？」

「…まさか」

「顔色が変わったな、アシャ」

くつくつ、とギヌアは嗤った。

「その通りだ。あの娘は今無防備だ。己を守る術一つなく、月獣（ハーン）の中へ叩き込まれるとしたらどうなる？ 自分を殺すだけの優しさは容易に反転する。それが他者に向けられた時、しかも自分を追い込んだ存在に向けられた時、その残虐さは比類のないものになるだろうな？」

ぎりつ、とアシャの歯が鳴った。

三度、互いの隙を狙い合う闘いが始まる。

(ユーノ)

アシャも月獣(ハーン)を知っている。

人が居なければ生きていけない。そのくせ、人に近づくことはない。人を永遠の加害者とし、自らを永遠の被害者とする、そういう形で互いに寄り添い仲間を保ち、生きるエネルギーを得る、言わば、人を仮想の敵とする幻想に寄生して存在するもの達。

(ユーノが、そこに叩き込まれたら)

まっすぐで鮮烈で、自らの運命を自ら負う、あの誇りが輝けば輝くほど。

「加えてここ数日、我等はさんざん月獣(ハーン)を狩った。獲物は毎回なぶり殺しにして群れに放り込んでやっている」

なに、奴らの恐れる幻とやらを実現してみたに過ぎないがな。

ギヌアは冷たい嗤い声を響かせて続けた。

「臆病で自分達が一番哀れだと思込んでいる月獣(ハーン)が、我等と同じ人である、『お前のユーノ』に対してどんな態度を取るか、想像はつくな？ それに、あの娘は心の中に哀しみを抱えている」

真紅の瞳が楽しげに揺れた。

「その部分を月獣(ハーン)は見逃しはしないだろう。心と肉体を傷めつけられた人間というものは、たやすく己の意志を持たなくなる……そうなれば、『運命(リメイン)』は喜んで彼女を歓迎する」

「ユーノはただの娘じゃない」

「ただの娘じゃないさ。他のどんな娘よりも優しい、が故に強い娘、なのだろう？ その娘が、か弱い月獣(ハーン)相手に全力で闘うかね？」

(いつも強くて、だからこそ優しい)

揺らがない、怯まない、諦めない、ただひたすらな、あの魂が、仲間を失いうち萎れているように見える美しい動物、しかも力で自分が圧倒できるとわかっている相手を倒すことを選べるか？

(いや)

そんなことができるなら、セレドで一人闘い続けてはいなかっただろう。

(ユーノ...っ)

胸の中でうめきが漏れる。さすがに、元ラズーンの第二後継者、敵を知ることにかけては人後に落ちないというわけだ。そんな手を打たれれば、ユーノは、いや、ユーノだからこそ闘えないだろう。

(今すぐ探して守りに行きたい)

だが、目の前の男が背中を見せられるような相手ではないこともわかっている。

それが自分が放置してきた問題そのものであることも。

「ユーノだけじゃない。イルファとかいう大男も、今頃は次々と襲うカザド兵に手こずっているだろう。そして、レスファートとかいうチビもな。心象が見えるがために、辛い地獄を覗いているだろうよ」

「イルファとレスが」

「そして、お前は、私が始末する」

ギヌアは剣を引き抜いた。視察官(オペ)が持つ短剣だ。

「この剣があるおかげで、『運命(リメイン)』にも君臨しやすかった」

ふざけたように言いながら、短剣をかざした。

「かくして、お前達は死に、『運命(リメイン)』統治の輝かしい世界となる。喜ばしいことだ」

凍りついていたアシャは、僅かに眼を細めた。唇の両端だけを釣り上げた笑みを浮かべる。

「ぬかせ」

吐いたことばは冷ややかだった。

(ならば、今、全力で倒す)

ギヌア同様、短剣を抜くと、同時に金の光が先端まで包む。顔の前にかざす。その光越しにギヌアを見たアシャは微笑を消した。

「ラズーンの第一正統後継者の意味を習ってから来るんだったな、坊や」

呼吸がじつくりと深くなる。それと一緒に、剣に宿った黄金の光がまばゆさを増した。

「それに、『俺のユーノ』を追い詰めたのは馬鹿な策だった。これで、お前の命を万に一つも助ける筋はなくなった」

「世迷い事を...」

一瞬全てが停止した。それに気づく間さえなく、二人の剣が空を裂いた。

## 4. 生け贄

(左腕が重い...)

ユーノは夢の中でつぶやいた。

(アシャの薬、効かなかったのかな)

今までそんなことなどなかったのに。

苦しくはない。

だが、左腕が無性に気怠く重く、そこを中心にずぶずぶとどこかに沈んでいきそうだ。足元も危うく、空を歩いている気がする。

(空を?)

ぼんやり考えて、ユーノは我に返った。

鼻先を掠める湿った風に、今まで煙っていた視界がみるみる拭い去られていく。

「っ！」

ぎよっとした。

ねじり角を額に頂いた金の馬達が、周囲をぐるりと取り巻いている。大小はあれど、月獣(ハーン)が作ったものと同じような姿の群れだ。

「月獣(ハーン)?」

声に応じるように、一頭が首を動かした。黄金の渦がたてがみの形に雪崩落ち、美しく光る尾が風に流される。さっきまで隠れていたらしい月が巨大な姿を現し、辺りを光の洪水と化した。月獣(ハーン)の姿がそれぞれ月光に輝き、湿地帯のその一角に、幻想の世界を生み出した。

「え...どうして.....ボク.....こんなところに...」

手を上げ、髪をかきあげようとしたユーノは、動きにつれて起こった金属音に体を強張らせた。

(何?)

手首に巻き付いた金鎖、宝石らしい冷たくすべすべしたものに触れてみたユーノは、おそろおそろ体を見回した。

「わ...」

たちまち火照って熱くなった体を抱き締める。何せ、着ているといっても薄く透ける白い布、重なりあうから下の素肌が煙ってかろうじて見えないという代物、それが申し訳程度に金細工で留められているだけ、半裸の域さえ越えている。

(一体、何が)

混乱する頭で、必死に前後に起こったことを思い出してみる。

カザド兵にやられ、左腕が重かった。アシャ達の話の聞いている間に、その重さがどんどん増して眠りに落ちた。それからますます左手の重さが増した。

ついにそれが堪え難くなって、支えるだけでも必死になったころ、重さを減らすにはある方向へ動けばいい、と誰かが囁いた。そうこうしている間に、左手がどんどんどこかに引っ張られていって、確かにそちらへ手を伸ばせば楽になった、だからそのまま夢うつつの間に歩き出した、ように思う。

(あの時か!)

ユーノは舌打ちした。

剣に塗られていた薬は、何かの暗示を受け入れやすくするためのものだったのだろう。

(にしても、この格好!!)

なお過熱する頬に、ユーノは『運命(リマイン)』を呪った。

人前、いや皇室の私室でもここまで露出したことなどない。

「畜生！」

口汚くののしって一步踏み出し、足元にぬめる泥に眉をしかめた。よくも御丁寧こんな場所にまで呼び出してくれたものだ。不安定なばかりか、ずぶりと爪先を飲み込む感覚、身動きできないと体が警戒して固くなる。

(どういふつもりで、こんなこと)

心の中でつぶやいた声に答えるように、ぐっと月獣(ハーン)の包囲が狭まり、ぎくりとした。

改めて周囲を見回し、自分を見据える月獣(ハーン)達の緑色の目が、怯えているどころか、怒りに近いものを満たしているのに気づく。

(まずい)

はっとして腰にやった手は虚しく空を掴む、次の瞬間、

「うっ」

どんっ、と背後から突かれて、一、二歩よろめいた。とっさに体を捻って衝撃をやり過ぎすのは精一杯、とても反撃などできない。それを確認したかのように、月獣（ハーン）達がそれぞれ大きく体を振った。頭を高く上げ、嘶くように天を見上げ、脅すように黄金の渦を飛び散らせながら、次々とユーノめがけて突っ込んでくる。

「ちっ！」

間髪、一頭をかわしても、慣れない衣服、金細工の拘束に縛られて動きがままならない。焦っている間に次の一頭が突きかかってくる、必死にかわす、だがそこにはもう別の一頭の角が待ち構えている。

と、ふいにぎくっと鋭いものが布を裂き、肌を擦って硬直した。

（殺気！）

間近を走り過ぎた月獣（ハーン）の角に、貫かれ、千切れた薄物の布が引っ掛かっていた。端が淡く紅に染まっているその布を、汚らしいものでも扱うように、月獣（ハーン）は首を振って落とした。

（好き放題にやられる）

唇を噛んでユーノは身構える。その警戒に勢いがついたように、右から一頭、左から一頭が同時に突っ込んで来たが、とっさに逸らしたユーノの体を捉え損ない、まともにお互いに激突した。

「ニイン！」

裂かれたような悲痛な声を上げて双方がのけぞり、泥の中に転がる。猛々しい馬の姿が霧散して消え、みるみる子猫ぐらいの大きさになってしまう。流す血の緑色が泥を鮮やかに染め、仲間の惨状に残りの月獣（ハーン）達が、明らかに怒りの唸りを上げた。

「ちょっと、待っ……っ！」

次の一頭は避け切れなかった。頭から泥の中に突っ込み、口の中に入った泥水を吐き出し、続いて突き出されてきた角を転がって逃げる。月獣（ハーン）の包囲の一角にできた隙を見つけ、飛び起きてとっさにそこへ駆け込んだ。一頭避け、二頭をかわし、包囲を抜けられるかと思った矢先、三頭目の角に左腕が擦られた。

呻いたユーノの頬に生温かい血が伝う。よろめいて倒れかかる体の下にいた月獣（ハーン）がすりりと抜けて、ユーノは派手に倒れ込む。

バシャッ！

「うぶっ」

浅い水溜まりだ。それでも頭を踏みつければ溺死する。

必死に顔を上げるユーノの目の前に、月獣（ハーン）の蹄が迫る。無意識に防御しかけた片手を思いっきり蹴られて顔を歪めた。痺れて感覚がなくなった腕を庇い、休むことなく交互に襲い掛かってくる蹄と角の攻撃を、転がり、身を竦め、跳ね起き、走り、体を反らせ、倒れ、ひたすら逃れる。

（どうして）

心の中に疑問が響く。

（どうしてこんなに、憎まれる？）

心の問いに耳のすぐ側で囁きが応じた。

『生け贄なんだ』

「え？」

そのことばが心のどこか柔らかな部分を抉り、立ち竦む。容赦なく突っ込んでくる月獣（ハーン）の角が、ユーノをずたずたに刺し貫こうとするように、すぐ側を走り抜ける。

『君は彼らの生け贄なんだ』

「あっ！」

背後の思いもしない角度から激しく蹴りつけられてふらついた。間髪入れず、次の月獣（ハーン）が走り込んでくる。

（生け……贄…？）

「う、あっ」

同時に二頭にぶつかられ、体が浮いた。跳ね飛ばされて別の水溜まりに落ち込む寸前、突き飛ばした月獣（ハーン）と視線が絡む。

（あ…あ）

緑の目の奥に読み取ったのは、報われない哀しみ。

(あんたさえ、居なくなれば)

背骨が竦む。

そんなことを言われたことなど、なかったはずだが。

いつ額を傷つけたのだろう、とろりとしたものが眉間を伝って流れ落ちてくる。血のぬめりで緩くなったのか、額の金の輪が、ユーノが倒れたのと逆方向に跳ね飛ぶのが闇に光る。

バシヤッ!

地面に叩き付けられた朦朧とする視界に、一頭の月獣(ハーン)の角が広がった。体が勝手に動いてしまい、髪一筋の差で避けると同時に、足が月獣(ハーン)の腹を直撃する。

「ニギヤッ!!」

絶叫して吹っ飛ぶ月獣(ハーン)、はっとした時は遅かった。仲間を叩かれ、怒り狂った月獣(ハーン)達が一齐にユーノめがけて突っ込んできて、息つく間もなく責め立てられる。

「う、っ、っ、っ!!」

(生け贄なんだよ)

霞む頭に月獣(ハーン)の目が囁いてくる。

(あんたさえ死ねばいいんだ)

(私たちは、ずっと我慢してきた)

(暗い夜を!)

(明るい月夜を!)

(ただ平和に暮らせればよかったんだ!!)

声はユーノの心一杯に溢れて圧倒する。辺りを埋め尽くす騒音のような声、その声に体の内側を乗っ取られたような気がして身動き出来ない。

やがて数頭の月獣(ハーン)が近づいてきた。ユーノの脇の下に頭を、肩を、体をそのものを押し入れてくる。ゆっくりと頭上にユーノを担ぎ上げた月獣(ハーン)の集団に、続々と別の月獣(ハーン)が支え手に加わる。

「う...」

半分気を失っていたユーノは薄目を開けて瞬いた。

いつの間にか、自分の体が何かの標的にされるように差し上げられているのに気づく。ぬるい風に泥と血に汚れた薄物が手足に絡み付く。汚れた金細工がずるりと体を擦る。

のろのろと視線を上げると、前方に一頭の月獣(ハーン)が緑色の瞳を燃え立たせて首を振っていた。蹄で泥を跳ねる。意図を確かめる間もなく、走り出したその一頭が、傷ついたままのユーノの左腕をことさら狙うように、力の限り角で跳ね上げてきた。

「っ!!」

激痛に仰け反る。月獣(ハーン)の攻撃は止まない。ユーノを弄ぶように、また別の一頭が角で突き続ける。

「ど...うして...」

思わず尋ねた。

「どう.....して.....私が.....生け贄.....に.....?」

答えが来る方向を見定めようと頭を起こすと、視線の先にいた月獣(ハーン)が怯えたように後じさりする。

『そうとも。おまえはいつも一人で耐えてきた』

どこからか声が囁いた。

『自分が傷つくのも構わず、家族を守り、国を護ってきた。そのお前に、彼らは何を報いてくれたのかね。今この時も彼らは皇宮で楽しく暮らしているだろう。お前がこれほど苦しんで、彼らのためにこれほどの犠牲を払っているのに.....』

「あ...」

ユーノは眉をひそめた。一番辛くて脆いところを、一番知りたくないやり方で知らされて、体がきしむようだった。

(違う.....違う.....私は.....ただ.....ただ.....)

ドスッ。

再び月獣(ハーン)がユーノの身体を角で突く、ののしるのように、嘲笑うように、愚かなものがここにいと、世界に知らしめるかのように。

(そうよ、ユーノ)

心の中から声が湧き始める。甘く優しい、切なげな声、案じるように、いたわるように。

(レアナ姉さまのために、アシャを諦めたでしょ。母さまを心配させないために、怪我をしても黙っていた。父さまとセレドのためにカザドを引き付け、剣を習い、傷を受けてもセアラを護り続けたわね)

ガスッ。

「っっ！」

骨の髄まで染み通るような激痛、それは心の中を貫かれているからか。

月獣（ハーン）の攻撃は止まない、ユーノの血に酔ってしまったとでも言いたげに。

(あなたに何が残ったの?)

声は問う、正義と善の名のもとに。

(誰があなたのために泣いてくれるの?)

「……く、っ!!」

唇を噛んで体を強張らせたユーノの腕から、キン、と鋭い音をたてて金の鎖が千切れ飛んだ。

「んなろくそ！」

「こなろくそ！」

「しっこいんだ！」

「てめえら！」

「きりがねえんだ！」

「芸もねえ！」

イルファは一人で喚きながら、カザド兵をなぎ倒していた。レスファートが連れ去られたのはこちらの方角、そう見当をつけてからの動きは早かった。たくましい体は汗びっしょりだが疲れたとは感じない。かえて、『運命（リメイン）』の手を借り、人を襲うだけの存在となっているはずのカザド兵の方が、イルファの勢いに押されてじりじりと後退しつつある。

「なにせ！」

「アシャに！」

「頼まれてっからな！」

一言毎に二人勘定でカザド兵を倒している。剣だけでは間に合わないの、片手に剣、片手にそのあたりで見つけた棒切れを振り回しているから、さしづめ人間水車というところ、とにかく当たればいいと思っているので、後のことなど気にしていない。致命傷にならなくとも、繰り返し殴っていればそのうち倒れるだろう、ぐらいの感覚だ。

「うおああああ！」

それでも進行が遅くてじれったくなり、喚きながら走り出す。

「どけどけどけええええ！」

雄叫びを上げて街路を突進していくと、さすがのカザド兵にもうろたえて道を開ける奴が出て来る始末だ。

「手応えがねえんだ！ 手応えがあ！」

喚き散らしていたイルファは、前方に、黒尽くめの男とも女ともつかぬ異形の者を見てとり、ぴたりと止まった。

「あんたが『運命（リメイン）』だな」

不敵に笑って両刃の剣を一振りし、今までの汚れを払う。棒切れは投げ捨てて剣を構える。

「お手合わせ願おう」

相手は真紅の瞳に嘲りを浮かべて黒剣を取り出した。

(こいつあ、ひよっとすると、やべえかも)

べろっと剣の刃を舐め、イルファはゆっくり構え直して『運命（リメイン）』に対峙した。

「……」

長い間合いだ。身動きできない。痺れを切らして剣を振り上げかけたが、とっさに思い直した。

ユーノほどの腕が半死半生となる相手、舐めてかからない方がいい。

イルファの長期戦の構えを見たカザド兵が数人、横から斬り掛かってきた。

「たあっ！」

「へっ」

受け止める衝撃を楽しんで、イルファはにやりと笑い、撥ね返す刀でもう一方を斬った。アシャの剣の見よう見まね、予想外にうまくいったのに気を良くして、もう一人を狙ったがこれは失敗、体がのめって大きな隙ができる。

それを見逃さず突っ込んできた『運命（リメイン）』の黒剣を、イルファはあわやのところで受け止めた。ギリッ、ギリッ、と剣同士が音をたて、刃と気力を磨り減らし合う。『運命（リメイン）』は見かけ以上に力があつた。イルファはすぐに守勢にまわる羽目になる。

「ちちちっ」

黒剣がイルファの頬にかすり傷を作った。生温かい血が伝っていく。ぐいぐいと押しえつけられ、顔も体も汗にまみれてくる。

対する『運命（リメイン）』の目にはまだ余裕がある。ほくそ笑むような薄気味悪い表情が浮かんでいる。

「笑えば誰でも可愛いつてもんじゃ……ねえんだよ」

憎まれ口をたたきながらも、イルファは次第に焦り出した。このまま押しえ込まれればひとたまりもない。

ギリッと再び剣が鳴った次の瞬間、突然『運命（リメイン）』が飛び離れた。

「あ、このっ！」

一気に体勢が崩れたイルファをわっとカザド兵が取り囲む。

「うごごご」

しばらくはその中で身動き取れなかったイルファだったが、むずっと一人のカザド兵の足を掴んだかと思ふ間に、そいつを思い切り振り回した。

「どうだああああ！」

「ぎゃっ！」

「げっ！」

「ぐわっ！」

「わははは！ ざまあみろ！」

たちまちそいつにぶつかって跳ね飛ぶ奴が出て、イルファは豪快な笑い声を上げて立ち上がった。まわりつくカザド兵を剣を薙いで追い払い、正面に、腰に手を当て戦況を見守っていたらしい『運命（リメイン）』を認めて大声で呼ばれる。

「はっ！ 『運命（リメイン）』ともあろうものが、カザド兵を使わなきゃ、俺一人の相手もできねえのかよ！ 情けねえ、それじゃあ、世界なんかでめえの思い通りにならねえよ！」

イルファのことは口からでませだったが、これは著しく『運命（リメイン）』を傷つけたらしい。むっとした顔で、相手が再びイルファに向かってくる。

「よっ！ それでこそ！」

ガキッ！

さっきよりもより金属的な音がした。またも押しされかけたイルファは、片目をつぶりながら低くつぶやいた。

「オトコだぜ……最も、どっちか……よくわかんねえがな」

ギッ…キン！

二人同時に飛び離れる。三たび噛み合い、火花を散らす二本の剣。

「なあ……いと暗き…運命の手って……あんた達かい？」

「我らは…リメインだ。運命さえ……我らの手にある」

細いキイキイ声が答えた。

「ってことは、アシャはやっぱり」

ガシッ！

黒剣を撥ねたとたん跳ね返され、イルファは後ろへ飛びすさった。すぐに戦線へ戻ろうとしたイルファは、ずぶっという鈍い音とともに顔を強張らせた。

「て、めえ」

殺気を込めて振り返るイルファの肩を、細身の剣が貫き通している。

イルファを仕留めたと思ったか、一瞬喜びに満ちたカザド兵の顔はすぐ蒼白になり、次の瞬間、イルファの剣で払われて胴を離れて転がった。

「あ、っ」

派手に動いた痛みに膝をつくイルファの後ろで、『運命（リメイン）』が黒剣を振り上げた。

「いやあああーっ！」

レスファートは絶叫した。

街の外れの、やはり見捨てられた廃屋で、椅子に縛りつけられたままがいている。

「くっ...くっくっ...」

「逃れることはできないよ、坊や」

レスファートの前にいるのは『運命（リメイン）』に取り憑かれた男達だった。『運命（リメイン）』から心の内奥への接近方法を訓練されているのだろう。ただでさえ心象に過敏になっているレスファートの心に、欲望に汚れた心を容赦なく押しつけてくる。

それから何とか逃げようと、レスファートはもがき続けているのだ。

「いや...やだ...」

レスファートはアクアマリンの瞳を大きく見開いて首を振った。溢れ出す涙を拭う手は後ろ手に縛り上げられている。瞳も開いてはいるものの、声が語っている、男達の卑屈さと優越感の混じった表情は霞んで見えない。自分の心にぴったりと寄せられる汚れた心象から逃れたいのに、逆にそれに心の目を魅きつけられ、どうにもできない。

（暗い.....暗いふち...）

人の心の醜さを、おぞましさを、これでもかこれでもかと『運命（リメイン）』は見せつけてくる。

それは底知れぬ谷に降りて、なお暗い淵を見いだしたようなものだった。その深い淵には、何ともわからぬどろどろした魍魎魍魎が蠢き、触手を伸ばして、立ち竦むレスファートの足首に絡みつき、彼を汚泥の中に引きずり込もうとする。

「あ...」

ひくっとしゃくりあげたレスファートは、急いでその心象を消し去ろうとした。

心を遠ざける、遠くへ、もっと、遠くへ。

「そうは、させられねえんだよ」

背けたレスファートの顎を、男の一人が掴んで前に向かせた。思わず目を見張るレスファートの心に、否応なしに腐臭を放つ暗黒の手をまわりつかせる。

「うっ...」

唇を噛んで目を閉じたレスファートは、意識の暗闇に潜む影をより鮮やかに捉えてしまった。

慌てて開けようとした目の上からきつい目隠しをされる。

淵から、よどみを率いるものがじわりじわりと登ってくる。レスファートの足首に絡みついたものと同じ触手が、足を這い上がり、体にまわりつき、手に巻きつき、首を狙う。

その感触を肌感じて、レスファートは悲鳴を上げて身悶えた。

「いやああっ！」

「叫んでも誰も来ないよ。来れないさ。皆、その場で死んでいる」

耳元で囁かれた声に、レスファートの心の中の像が揺らめいた。

黒一色に毒々しく濡れた紅が広がる。ポトッとレスファートの額に一滴がしたり落ち、それは見る見る全身へと流れ落ちていく。

粘りつく闇、静まり返った廃屋の中、レスファートはその心を蝕まれている。

「ユーノ！ ...助けてよ、ユーノ...！」

ぐっと一瞬、心象の力が弱まった。

心の底に暖かな春の日差しを感じる。

（ユーノ...）

頬を伝う涙に崩れていってしまいそうなレスファートは、必死にその心象にしがみついた。

はあはあと息を喘がせるレスファートの目から目隠しが取り去られる。

「ほう...なかなか頑張るじゃないか、ガキのくせによ」

ぼんやりとした視界に、冷笑を浮かべた男の顔が揺れる。

レスファートは疲労困憊して、ぐったりと頭を垂れた。アシャを呼んだための疲れも重なって、抵抗する力がどんどんなくなっていく。どこかが少しずつ麻痺し始めているのを、うっすらと感じていた。

「だが、お子様の時間はそろそろ終わりだ」

ぐっと肩を掴まれ、砕かれるかと思うぐらいの痛み、レスファートは顔を上げた。正面の男の目が光って、心に食い込んでくる。

深い淵に引きずられていく一つの人影...あれは？

(ユーノ！)

レスファートは声にならぬ絶叫を放った。

ユーノが触手に捕まっている。もがいているのに抜け出せない。

「や...めてよ...」

プラチナブロンドを頬に乱し、レスファートは涙を浮かべて男に懇願した。だが、男はにやりと笑って、なおも心象のユーノを深い淵に引きずり込み、その両手両足を触手でばらばらの方向に引っ張り始める。

「やだ.....ユーノを.....どうするんだよ...」

レスファートは乾く喉に唾を飲み込んだ。

ぎりぎり引っ張り続けられるユーノの顔が激痛に歪んでいる。心を逸らそうとしても、ユーノの心象はレスファートを釘付けにする。心の中で立ち竦むレスファートの前で、ユーノの腕がわずかに裂け、血が吹き出した。飛沫が心象の中でレスファートの頬を打つ。

「っっ！」

椅子で悶えていたレスファートはひくりと体を硬直させた。心象のユーノが動きを止めた次の一瞬、四肢を跳ねさせ千切れ飛ぶ姿が、レスファートの心の隅々まで大写しになる。

「きゃああああっっ！」

高く鋭い悲鳴を上げたレスファートの心の中で何かが弾けた。

仰け反った瞳にはもう何も映らなかった。

カッと短剣の先から光った炎に、アシャは危うく飛び退いた。僅かなずれで、今までアシャの居た所が黒く焦げる。間髪入れず、アシャの短剣の先からも粒子のような光が走って、ギヌアを撃つ。

「う！」

右腕を押さえ、ギヌアは悔しげな目をアシャに向けた。

闘いはそろそろ頂点に達しようとしていた。チュニックが裂け、ほぼ腰布一枚の状態になっているアシャよりも、一見無傷に見えるギヌアの方が疲労している。肩で呼吸をしながらアシャを見返す目に余裕はない。

アシャは肩になだれる金色の髪を払い、紫の瞳で冷たくギヌアを見据えた。

「今度だけは許してやる。急いでいるからな」

身を翻し、背中を向けようとしたアシャの髪の一房が、背後からギヌアの短剣から放たれた光に断ち切られ、前へ流れて落ちた。

「どうあっても、死にたいようだな」

ゆっくり振り返って、アシャは目を細めた。ギヌアが呻くように、

「行かせはしない」

「焦らなくとも、この次会った時には必ず殺してやるものを」

「うるさい」

無言でアシャが突き出す短剣の先に、ぼうっと光球が出現した。それが辺りの光を吸い込んででもいるように、次第に大きくなっていく。

「言うておくが、俺は今、まともじゃない。制御はできないぞ」

(冷えた声だ)

いつかの夜に聞いたような、万年、地の底で暮らしていたかのような冷え冷えとした声。人の感情を失い、世界を破滅させる力を振り回す喜びに我を失った声。

(そこへ踏み込めば)

人じゃなくなる。

「...」

アシャは切なく眉を寄せる。

(それでも)

短剣の先で光が波打った。光球が拡大するにつれ、噴水は水を吹き上げなくなった。そのかわり、しゅうしゅうと掠れた音をたてて、辺りの水たまりから、噴水の口から、白い蒸気が立ちのぼり始める。

ビッ、ビシッ！

頑丈なはずの水盤の石にひびが入り砕けた。広場の端に居た馬達が怯えて逃げ去る。

(それでも、ユーノは)

失うわけにはいかない。

ナゼダ。

ひきつり歪んだギヌアの顔が物問いたげに凝視してくるのに、自分の顔から表情が消えるのがわかる。唇が勝手にことばを紡ぐ。

(ラズーンを救うかもしれない)

「俺が護ってきた」

(世界を救うかもしれない)

「たった一人の」

(俺の捨てた世界を)

『アシャ！』

草原の日差しに照らされて、風に髪を舞わせながら振り返って笑うユーノの顔に、ふいに胸が苦しくなった。

そうだ、いつからだろう、アシャはユーノに願いを託し始めている。自分が背負い切れなかった世界を、自分が手放した重荷を、全く違う場所で傷つきながらも逃げずに背負う、その強さと優しさに。

(俺が捨てた自分を)

スクツテクレルカモシレナイ。

「たった一人の」

失うわけにはいかないだろうが。

「悪かったな、相手が。『運命(リマイン)』の王？」

光球の熱とは逆に凍てついた心のままに、アシャは薄く微笑む。

「今ここでケリをつけてやろう」

ユーノの未来を害するものを屠るのは、ラズーンの正当後継者としても当然の仕事のはずだ。

(かまわない)

今ここで人を捨て、魔性の鬼となって、世界を支える娘を護り切る。

かっとアシャは目を見開いた。

短剣の光球がまさに今破裂しようとした時、きしるような暗い声が突然割って入った。

『この争い、今は私が預かろう』

「ミネルバ！」

いつの間に現れたのか、相変わらず優雅に白馬に跨がったミネルバがそこに居た。

『アシャ。早く行ってやるがよい。そなたのユーノが危ういぞ』

低く重い黄泉のからかいにもアシャは乗らなかった。じろりと冷たい目でギヌアをねめつける。

「こいつが...」

『ギヌア・ラズーンか。面白いものに出会うたのう』

「ミネルバ！ 『運命(リマイン)』相手の狩りはできても、ラズーンの名を持つ私に齒向かうわけにはいくまい」

戦況有利と見て、ギヌアは声を張り上げた。ミネルバの骸骨面が白い歯の隙間から、ふふふ...と不気味な笑い声を漏らす。

『いかにも。しかし、「運命(リマイン)」に加担するものを狩るのも私の役目。それに、ユーノという娘には少々興味があつてな。ここで死んでほしくはないのだ。そなたも、私の邪魔はすまい？』

ギヌアはぐっとことばを飲み、ミネルバをにらんだ。

『さ、行け、アシャ。あの娘とて長くはもつまい』

「感謝する、ミネルバ。この借りは必ず返す！」

馬を呼び寄せ、短剣をおさめたアシャはすぐに馬上に躍り上がった。

『そなたが娘一人にうろたえるを見るのは悪くない趣向じゃ』

黄泉の気配もこれほど暗くはないだろうという声で応じたミネルバが、広場を駆け抜けるアシャの背後で見る間に流れていった。

(ユーノが.....しんで.....しまった)

レスファートはぼんやりつぶやいている。

心の中は血糊でべっとり濡れている。その中央に、まるで物のようにゴロゴロと転がされた死体があつた。

心象のレスファートはその側に立ち竦み、目の前のものを拒否できないまま見つめている。

(ユーノが...)

現実のレスファートは、明かりも消えて薄暗くなった廃屋の中で、男達の酒盛りの肴として椅子に縛り付けられたまま、虚ろな目を見開いている。

「狂ったかな」

「かもしれねえな」

くすくすと男達が笑う。レスファートは反応できない。

心の内側の視界と、外側の視界が入り乱れ重なっている。

(ユーノが...)

(『レス!』)

ふいに心の中でユーノの声を聞いて、レスファートは体を震わせた。

(『私はそんなことで殺られると思ってるのか?』)

声は続いた。心象のレスファートは混乱し、混乱したまま、足元に転がる死体に手を伸ばした。

(『それは私じゃない!』)

声は厳しく叱責した。

(ユーノ...じゃない?)

(『偽物だよ、レスファート!』)

(『ユーノがこれぐらいで死ぬはずがない。確かめてみるんだ』)

ユーノの声と聞こえたのは、レスファートの心の遙か奥、生命の源から湧き出る声だった。その声は、今やはっきりとレスファートそのものの声で叫んでいた。

(『おまえが名を捧げた人だろう? その人が死んだからと言って、おまえはその人の亡骸も葬れないのか? さあ、死体に触れてみろ!』)

(なんだか、はんたいのこと...いつてる...)

思いながらも、レスファートは死体に触れた。冷たさに身が竦む。顔をそつとこちらに向ける。ずるっとユーノの仮面が剥がれ落ちたように、そこには見知らぬ人間の顔があった。

(ユーノじゃない!)

「...じゃない」

溢れるような歓喜の想いに、レスファートはつぶやいた。ぼろぼろと涙が零れ落ち始める。

だが、一旦、晴れ晴れとした笑みを浮かべたレスファートだが、涙はおさまらなかつた。むしろ、より大きな涙の粒が零れ始める。

やがて、レスファートはそれまでとは違った呻きを上げ、瞬きした。

「ユーノじゃない.....じゃないけど...」

(どうして、この人はこんな目にあわなくてはならないんだろう)

心象の中のレスファートも涙を零していた。

ポタリ、と死体の上に落ちた涙の粒が、すうっと広がり清めていくように、そこだけ淡い光に輝く。ユーノを失わずにすんだから喜んでいいはずなのに、その身代わりのようにひどく屠られてしまったものが、やはりレスファートの前には居る。

このものの命は一体誰が悲しんでくれるのだろう。

しゃくりあげ始めたレスファートに、男達がぎよつとした顔で彼を振り返る。

「おい...」

「どういうことだ」

「知るか、畜生め! しぶといガキだぜ!」

腰を上げ、新たな責め苦を加えようとした男は、いきなり華々しいわめき声とともに吹っ飛んだ扉に振り返った。

「てめえらあっ!」

もう一度、必死に薄く目を開けたレスファートの視界、砕けた木の扉を押し分け、のっそりと姿を現したのはイルファ、右肩から流れた鮮血が応急手当てで縛った布を染め、肌にも流れて一層殺気立って凄まじい。血走った目が部屋を見回し、椅子に縛られたレスファートに止まるや否や、ぐいと剥き出された。たちまち、鬼神も避けて通りそうな憤怒の顔で、大音声を張り上げる。

「よくも俺達を狙ってくれたな! お返しは倍以上にしてやるっ!」

右手は傷のせいでほとんど使えないものの、左手一歩進んで剣を振り回せば、怪力無双、人と言わず物と限らず、当たるを幸い粉碎していく。

男達はすっかり恐慌に陥り、悲鳴を上げて逃げ惑った。動けるものが負傷者を担ぎ、一人二人と消

えていく。

やがて、部屋にイルファとレスファート以外誰もいなくなってしまうと、ようやくイルファは動きを止めた。太い息を吐いて床の組石の隙間に剣を突き立て、どさりと重い体を落とす。

「ふうっ...」

「イルファあ」

「うむっ」

レスファートの声に、イルファが縛めを切った。レスファートは立ち上がり、イルファの側によろよると腰を降ろす。

「大丈夫か、レス」

「...うん...」

弱々しく頷いてレスファートは涙で汚れた頬を擦った。その姿を、珍しく生真面目な安堵を浮かべて見つめ、イルファはのそりと立ち上がった。

「こうしてもいられねえな。さっき、カザド兵の一人を締め上げたら、アシャは沼地の方へ馬を飛ばしてったと吐きやがった」

「ユーノ！」

「ああ、おそらく、あいつもそこにいる」

イルファは、そっとレスファートの体を片手で抱き上げ、肩に乗せた。

「大丈夫だな」

こっくり無言でイルファは頷いた。心の奥底でまだ不安に揺れているものがあって、ユーノの無事な姿を見るまでは落ち着けなかった。

(生きてるよね、ユーノ。死んでないよね)

イルファに馬に乗せられ、レスファートはともすれば歪みそうになる視界に必死になって歯を食い縛る。

「はあっ！」

イルファの掛け声とともに、馬は砂埃と枯れ葉を巻き上げ、未だ明けぬ夜の中を沼地めざして走っていった。

(どこだ?)

アシャは乱れる息を整えながら、漆黒の夜の中を透かし見た。

もはや明日は来ないのかと思われるほどの重い闇で、今まで体験したことがたった一晩のうちに起こっているのだとは信じ難いほどだ。

月獣(ハーン)は沼沢地に群れで棲んでいる。この辺りで未だに群れを残している月獣(ハーン)がいるとしたら、街の南の最も広い沼地だと思われた。が、今、既にその間近を駆けているはずのアシャの目には、以前として粘り着くような闇の他には何も映らない。

(ユーノ...)

アシャは眉を寄せた。額から頬へ流れる汗をうっとうしく首を振って振り払う。

まるで、母親に置き去られた子どものような気分になっている、母親など、居るはずもないのだが。(おまえはいつも俺を置いていく)

激しい蹄の音は沼地に吸い込まれて、のめり込みそうな重い音となっている。乱れる黄金の髪が金の幻影を夜に残す。

(俺の助けなど必要じゃないと言うように、いつも笑って背中を向ける)

挙げ句の果てに、アシャを呼ぶことなく、永遠の暗闇の彼の地へ消えていきたがるのだ、あの娘は。

「ユーノ！」

アシャは少し馬の速度を落とし、呼ばわった。遠くの方で何か声が聞こえたような気がしたのだ。

「どこだ！ ユーノ！」

彼方の闇から何かが漂ってきた。

「そっちか？」

アシャは厳しい表情で馬の向きを変えた。ピシャリと水が撥ねる音、泥がずぼずぼと馬の脚を吸い込む。

やがて、やや前方で、金色の塊が淡く浮かび上がった。月は生憎隠れてしまったが、月獣(ハーン)だとすぐにわかるぐらいの鮮やかさだ。

「ユーノ！」

アシャの声は、その月獣（ハーン）達にはほとんど届かなかっただけだ。彼らは何かに強く集中しているようだ。

「くそっ」

粘度の高い足元、なかなか道を進めないアシャの耳に、月獣（ハーン）達が注意を向けている声が響いてきた。

『なあ、かわいそうに。お前は傷ついてばかりだ』

（ギヌアの声？）

ぎよっとしたアシャは続くことばに顔を強張らせた。

『家族を守ろうとして、全ての保護を諦めなくてはならなかったのだからな。まあ、それも仕方がないかもしれない。お前は強い娘だ。一人で生きてゆける。保護がなくてもやってゆける』

（一体何を）

「、ユーノっ」

前方を見据えたアシャは、月獣（ハーン）の輪の中で、無惨に角で吊るし上げられているユーノに気がついた。

数十頭の月獣（ハーン）の角に、金の装飾品で飾られた華奢なユーノの肢体が支えられている。ぐったりした体には裂けた薄物が巻きつき、ところどころに仄赤い染みが広がっていた。瞳は虚ろで闇と同じように生気がない。幾筋か流れ落ちている真紅は唇の端からも伝っている。全てに無関心になったような表情がギヌアの声だけに時々反応している。

『お前は犠牲だ。お前は誰にも保護を求められないんだ』

「あの野郎...」

きりっとアシャは奥歯を鳴らした。ユーノの額に飾られた赤い宝石に気がつき、馬から飛び降りて走り出す。

『お前は一人だ。一人で死んでいくんだ』

びくっとユーノの体が震える。

（よせ）

『哀れだな、ユーノ。哀れな人間だな』

ユーノの虚ろだった瞳に表情が甦った。眉がひそめられ、切なそうに顔が歪む。

（よせ！）

必死に走り寄りながら、アシャは心の中で叫んだ。

ユーノの心が血を流し続けている。その傷を声は何度もこじあげ引きむしっていくように思える。

一つの世界の運命を背負う、誰にも救いを求められないその孤独、背負うしかないその重さをアシャはよく知っている。自覚しなければ耐えられるかも知れないそれを、自覚しながら背負うのは巨大な器が必要なことも。

その責務に自分は遥かに及ばない、そう気づきながらその場所に立ち続けるのがどれほど至難であるかも。

（やめろ！）

心の中で叫ぶのは、今の目の前で責任を果たせないと思い知らされて吊るし上げられるユーノを庇うためか、それとも、同じ状況で背中を向けて逃げ去った自分の過去に対してか。

ソナコトハムリダ、ジブンニハ、ソノシカクハナイ。

「くっ」

歯を食いしばって目を凝らし、駆け寄る速度を上げる、追いつく過去を砕こうとするように。

輪を作ってユーノを取り囲んでいた月獣（ハーン）達の一番外側が、アシャが迫るのに気がついた。怒りを吹き出しながら走り寄っていくアシャの勢いに崩れ始める。怯えたようにアシャを振り向き、緑の瞳を恐怖に染めて後じさりし、アシャの進路から抜け出そうとする。

（あの宝石に発信器を仕込んだんだな、ギヌア！）

『お前は捨て石だ。ただのお人好しで犠牲になっているのさ』

人の心を傷つけ、その苦痛に弱った心を弄ぶ、『運命（リマイン）』得意の遣り口に吐き気がする。

「聞くな！」

思わず叫んだ。

「聞くな、ユーノ！」

それは幻、それは自己憐憫を煽り、世界への屈折した怒りを煽る代物、その怒りが満たす未来はただただ憎しみに我と我が身を食ませるだけの空虚な時間だ。

だが、その誘惑がどれほど堪え難く魅惑的に聞こえるか、アシャもまたよく知っている。

ましてや家族のために一人闘い、辛い旅を耐え、孤独な夜を凌いできたユーノには、どれほど慰めと慰みに満ちた誘いに聞こえるだろうか。

「ユーノ！」

その誘いに堕ちない魂など、誰が持っているものか。ギヌアがまさにその象徴、堕ちないためにアシャは漂泊を選んだ、それほどの誘惑。その自己憐憫を堪えて立ち続けることが、一体誰にできる。だが。

「ち...がう...」

ふいに、ぼんやりしていたユーノがそうつぶやいて、アシャはどきりとした。

(ちがう?)

月獣(ハーン)達が同じように、ユーノの瞳に蘇り始めた光に気づいて、輪を少し広げる。

『おまえは、家族の犠牲になったのだ』

「ちがう」

一層はつきりとユーノは答えた。

光を失っていた目が次第に輝きを取り戻し始める。数頭の月獣(ハーン)が、その光の強さにうろたえたように角を引いて体を竦めた。

『国のために、家族のために、誰かのために、お前は犠牲に...』

「違う！」

声はついにギヌアのことばを打ち消した。

ユーノの急変に思わずアシャは立ち止まった。

(違う、と言った?)

何が違う。

ユーノのこれまでの人生は、まさにギヌアの告げた通りのものだったのではないのか。

突き上げた体から激しい熱が降り注いだとでも言うように、さらに数頭の月獣(ハーン)が細かく震えながらうろたえたように角を引く。残っている月獣(ハーン)達も怒りに燃えていた緑の目を瞬き、不審そうに、やがて次第に不安げにユーノを見つめる。端の数頭が体を固くし、竦ませていく。

「違うよ」

再び、どこか弱々しくユーノがつぶやいた。だが、そのことばの奥にはまだ強く激しい何かがある。

揺らめく炎の気配、今にも轟音を上げて爆発しそうな、荒々しい熱の気配。

その激しさにさらに十数頭の月獣(ハーン)が後じさりした。

危うく角に引っ掛かっていたユーノの体が支えを失い、泥の中へ落ちる。

「ユーノ！」

「違うんだ」

アシャがはっとして踏み出し声をかけたが、ユーノの耳には聞こえていないようだ。落ちた拍子にずれて額から外れた赤い宝石が、泥の中に浸されている。そこからこもった声はまだ抵抗するように響いた。

『お前は哀れな娘だ。なあ、たった一人で闘い続けている娘だ。言わば、他人はお前を犠牲にしてのうのと幸せを貪っているのさ』

「違う」

泥の中に倒れていたユーノが、首を振ってゆらりと立ち上がった。

「私は...犠牲にはなっていない」

小さな震える声が同意を拒む。

『生け贄だよ。自分の幸せのために人はお前を踏み台にしているのさ』

月獣(ハーン)達はその声に同意するように、またもユーノにじんわりと迫っていった。自分を憐れめ、自己憐憫の甘い切なさに浸ってしまえと言わんばかりにユーノに角を近づける。

『哀れなユーノ。誰がお前の哀しみを知るかな。誰がお前の想いをわかってくれるのかな』

さすがに胸を突かれたように、一瞬ユーノがことばを失った。瞳が暗く陰り、想いを内へ沈ませようとする。唇を引き締め、弱音を吐くまいとでもするようだ。

(俺が、居る)

そのユーノの姿に、アシャの胸の奥に幼い頃の自分が過る。

(あそこに、俺が)

誰もアシャの気持ちなどわからない。アシャと同じ立場の、同じ成り立ちのものなど、この世界には存在しない。

そう心を閉ざした、自分の姿。

氷のアシャ、そう呼ばれた、自分の姿。

その、黙ったユーノの本音を無理に引き出そうとするように、甘く優しい声音がなおも誘った。  
『一人で歩こうと決心したお前を誰がわかってくれるのか？ 誰がお前に報いてくれる？』  
俯くユーノを月獣（ハーン）達が取り囲み、再びじわじわとその輪を狭めていく。  
輪の外で、アシャもまた動けなくなっていた。  
（そうだ、ユーノ、お前はいつもいつも一人で耐えてしまう）  
そうだ、俺はいつも一人で耐えてしまう。  
（だからそこまで傷ついて）  
だから生きる場所が見つからなくて。  
（だからいつかどこかで惨めに死んでしまうかもしれない）  
俺が見捨てた世界と同様に俺もまた世界に見捨てられるのだろう、ぼろ屑のように。  
（だからこんなところで一人で）  
たった、一人で、ただ生きるだけしかない、虚しい命を。  
「.....」  
息が苦しくなる。  
『夜の暗さに涙することも許されぬユーノよ、その孤独は辛かろう？ その犠牲は苦しかろう？』  
世界の運命の重さに嘆くことも許されない自分、その孤独、その犠牲、それを誰が今までわかって  
くれただろう、いたわってくれただろう、どれほどの美姫も、そこには誰も近づかない、近づけない、  
背負う重さが違いすぎる、だから。  
（俺は永久に一人だ）  
ああ、これほどに。  
（俺は、一人が、辛かった）  
だから、ラズーンを捨てた、世界を捨てた、自分を抱きとめてくれない世界を全て拒んだ。  
（けれど、ユーノは）  
世界を拒まなかった。世界を受け止め続けた。自分そっくりなのに、自分と違う強さを持っていた。  
（だから、見ていられなくて）  
だから、魅かれて。  
（そうか、俺は）  
見捨ててしまった俺の声に呼び寄せられていたのか。  
「.....ってない」  
ふいにユーノが小さくつぶやいた。一瞬唇を噛み、それからゆっくりと目を上げ、声のする方へ向  
き直る。  
月獣（ハーン）の角に包囲されたまま、眩く光る刃の中心で、傷だらけでまともに衣服も身につけ  
ていない、そのずたずたの姿のまま、それでもはっきりと言い放った。  
「私は犠牲になんかなっていない」  
声が震えている。心の中の激しい嵐を押さえ込んだように、もう一度はっきりと。  
「私は、誰の犠牲にも、なっていない」  
『ユーノよ...』  
「全て私が選んだんだ。他の誰でもない私が、そうしようと、選んできたんだ」  
「っ...」  
アシャの背筋を悪寒が駆け上がる。  
それは違うはずだ。ユーノが望んでセレドに産まれたわけではない。守られること、愛されること  
を当然としていた周囲の中で守ること、愛することしか求められなかったのが、望んだ状況のはずは  
ない。  
けれど、今、アシャの目の前で立つユーノの泥と血で汚れた顔には、まるで一条の光が当たったよ  
うな誇りが浮かんでいた。  
泣き出しそうにひそめられた眉やきつく噛んだ唇はまぎれもなく少女のもので、ほんの少し自制が  
弱まれば、ギヌアや月獣（ハーン）の誘う自己憐憫の夢の中へ引きずり込まれそうなのがありありと  
わかる。だが、その瞳が、握りしめたこぶしが、崩れそうなのを耐えて立ち上がった体が、屈服する  
のを断固として拒む。  
「私が、自分でそう決めた」  
ついに、頬に煌めく涙が零れ落ちる。  
だが、誇りは崩れない。  
「私は、他の、誰の犠牲にもなっていない。レアナ姉さまの犠牲にも、母さまや父さまやセアラや...

セレドの犠牲にもなってない！」

黒い瞳がまっすぐに月獣（ハーン）達を射抜く。

月が再び雲間に現れ、辺り一面に白銀の光を降り注ぐ。ユーノの体にまとわりついている金細工が、泥に汚れながらもきらきらと光を撥ね、淡く黄金に輝いている月獣（ハーン）達よりも鮮やかに、アシャの目を焼く。

一頭の月獣（ハーン）が頭を垂れた。そのまま後じさりする。別の一頭が続いて引き、もう一頭が続く。

黄金の群れを率いる唯一の光が出現したように、月獣（ハーン）が次々と頭を低くして、ユーノの側から離れていく。

そして、まっすぐに、アシャからユーノへ道が開いた。

（光が、重い）

降り注ぐ月光も、周囲を照らす月獣（ハーン）も、その中央に傷だらけの半裸で輝くユーノも眩くて。

（立ってられない）

月獣（ハーン）の気持ちがよくわかる。

これほどの誇りを見せつけられて、自分の卑小さに気づかずにはいられない。逃げ去りたい、なのに惹き付けられていく、容赦なく、とてつもない力で間近へ来いと呼ばれている、抵抗できない、渴望に、その光を浴びたいと願う欲望に。

一步、また一步とよるめくように近づいていくアシャに、ユーノが初めて気づいたように瞬きした。まさか、と言いたげな表情、驚いたように見開かれる瞳に自分が映っている、そう感じた瞬間に鳥肌が立つような興奮と歓喜が競り上がって、アシャは歯を食いしばる。

（これは、何だ）

狂いたい。

（この感覚は）

打ちのめされる。

（俺が、消える）

跪いて、その足元に項垂れ、全ての許しを乞い、全ての願いを伝え、全ての祈りを満たしてほしい。

「アシャ？」

不審そうに声をかけられて、それが限界だった。かろうじて辿り着いたユーノの前で、天が落ちてきたように、跪き、頭を垂れ、深く深く礼をとる。

「アシャ！」

「礼を、受けてくれ」

囁くのが精一杯だった。

「俺の、恭順を、受け取ってくれ」

（俺はお前に所属するもの）

「俺が側に居ることを、許してくれ」

（俺の運命を全て捧げる）

「お前と、ずっと共に行かせてくれ」

頭を地につけて、祈りが届くことを、ただ、願った。

「...アシャ...？」

（これは...幻...？）

戸惑ったのはユーノの方だ。

（これは何？）

混乱したまま、月光を浴び、上半身裸の背中に黄金の髪を輝かせている、眩いアシャを見つめる。

（何が、起こってる...？）

遠巻きにしている月獣（ハーン）達、怪しげな幻のような声の誘いをようやく耐え抜いて我に返れば、満身創痍で泥だらけ、お世辞にもきれいとは言えない自分の前に、ただ一人の想い人が跪いている。

（まるで、姫に仕える騎士のように）

故郷セレドで、幾度その光景を見ただろう。レアナに求愛する数々の王子達。皇妃を取り巻く諸国の王。セアラに笑いかける諸候。ユーノなど存在しないように、たとえ一瞬振り向いても目を止める必要のない置物のように、目の前を通り過ぎていく人々を、何度繰り返し見送ったことだろう。

次こそは自分を見てくれるんじゃないか。次の人こそは、死にもの狂いで凌いで生きている自分の傷みに気づき、孤独に近寄り、慰めといたわりを向けてくれるのではないか。

(次こそは、と)

始めはまっすぐに見つめ、いつ微笑み返すといいのか緊張し、こぶしを握り締めて待ち、やがて肩を落とし、唇を噛み、俯き、顔を背け、背中を向けて納得した、そんな日は永久に来ないのだ、と。

(そんなことが、あるわけではない)

甘い幻想に落ち込みそうになった自分に首を振る。

人は傷みを見たがらない。苦しみも孤独も気づきたがらない。ましてや、男性達が女性に求めるのは安らぎと幸福であって、嘆きと強さではないのだ。

(しっかりしろ、ユーノ)

月獣(ハーン)達の攻撃が思った以上に堪えているに違いない。

(アシャは、きっとそんなつもりじゃない)

ユーノは何か誤解をしかけているのだ、疲れ切った心に快い自分勝手な解釈をしようとしている。

「礼を受けるって……アシャ…」

掠れた声で必死に応じる。

「恭順は、受け取ってるよ」

今まで何度も守ってくれて、救ってくれた。

「側に居ることも、許している」

たぶん、自分の側に居ることを許すのは、もうアシャが最初で最後だ。

「ずっと共に…」

アシャがゆっくりと顔を上げた。月光を受ける白皙、紫の瞳がまるで甘えるように潤んで見える。薄く開いた唇が睦言を囁きそうな柔らかさで微笑み、

「お前と、共に」

蕩けそうな声音で繰り返した。

「ずっと、共に」

行かせてくれ。

懇願を込めてつぶやかれ、その瞬間に堪え切れずに目を閉じた。

(助けて)

残酷だ。

(助けて)

こんな誘惑に誰が耐えられる。

(助けて、誰か)

忘れてしまいそうになる、この微笑みも、この声も、この瞳も、全ては幻、ユーノに与えられたものではなく、ユーノの体を透かして、遙かセレドに居るレアナに届くのだということ。

凌ごうとする、けれど心は揺れて押さえ切れない。

(幻でもいいから、今一瞬でいいから)

受け止めたい、その一片でも。

「……アシャ」

囁いて見開いた視界は、ふいに立ち上がったアシャに遮られた。ふわりと浮いた腕が月獣(ハーン)達を払うようにユーノを囲う。そのままそっと顎を支えられて上向かせられ、顔を汚していた血や泥を静かに温かな指先で拭われる。

宝石から聞こえていた声は沈黙している。月獣(ハーン)達が視界の端で少しずつ夜闇に姿を溶け込ませ消えていく。

「ふ…」

(レアナ姉さまの、身代わりでいい)

甘い気持ちが心の岸に打ち寄せる。

(永久に幻でいい)

近づくアシャの顔に目を閉じる。吐息が頬にかかり、体を竦める。鼓動が激しい。速度を上げる。呼吸が止まりそうだ。熱を感じる、頬に……額に触れる。

「…っ」

だが、次の瞬間、一気に軽く抱き上げられて驚いた。

「体が冷えている」

アシャの肌に直接抱き寄せられて息を呑む。

「かすり傷に見えても、かなりやられてる」

「う...ん」

穏やかに笑って見下ろされて、ぎくりとした。

(ちがう)

「大丈夫、だよ」

泣きそうになった顔を必死に笑顔に変えた。

「歩けるよ」

(そうじゃない)

この近さは、恋情のそれ、ではない。

「平気」

(勘違い、した)

情けなさや恥ずかしさで気持ちが竦む。

(また、馬鹿な勘違いをした)

幻でもなかった。ユーノはどこまでいってもユーノでしかなく、レアナの身代わりなどとはとんでもない願いだっただけ。

(アシャは心配してくれたんだ)

自分が仕える主の怪我を。自分が愛おしく思う女性の妹の安否を。跪いたのではなく、きっとユーノの傷を確認してきてくれたのだ、なのに。

(私はどこまで愚かなんだ)

何度思い知らされれば覚えるのだろうか、アシャの想いはそんな代用などするようなものではないだろうに。

(アシャまで辱めた)

今すぐに腕から逃げたくて、けれどそれはなおもアシャを困らせるだけだろうと身動き取れなくなる。

「用心に越したことはない、『運命(リメイン)』の攻撃が終わったわけじゃない」

ユーノを抱えたまま、アシャがゆっくり歩き始める。

「ああ...なるほど」

(だから迎えに来てくれたのか)

ユーノが妙な術に操られてしまったから。

(情けない)

また泣きそうになったのを振り切って、『運命(リメイン)』の王と名乗ったギヌアのことを思い出す。

嘲笑的な真紅の瞳、闇に燃え上がるような白髪、神経質そうなびりびりした気配の中に外見に似合わぬ不敵さ。

(...アシャに似ている?)

ふいに、そう気づいてどきりとした。

視察官(オペ)に共通した、ある種の整った容貌、繊細な外見に似合わない猛々しい実力。

(ひょっとして)

「アシャ」

「ん？」

「ギヌアも視察官(オペ)なの？」

びたりとアシャの歩みが止まった。

静かに、感情の読めなくなった目で見下ろしてくる。整った顔立ちだけに、動きがなくなると、まるで絵画か彫刻に向き合っているような無機質さがあった。

「どうして俺に聞く？」

「だって...」

奇妙な緊張感に言いよどみ、それから思い切ってユーノは続けた。

「ラズーンの正統世継ぎの一人なんだろう？ 少なくとも、他の人間よりはギヌアのことを知っているよね？」

「.....」

「アシャ？」

「.....ギヌアはラズーンの正統世継ぎの一人だった」

淡々とした声音が応じた。

「だが、ラズーンの治め方にはもう意味がないとして、俺を殺し、ラズーンの世を継ぐ資格を手に入れようとした」

「あなたを殺し……？」

ユーノは濁った喉に唾を呑み込んだ。

「アシャは……第一正統世継ぎだったのか」

全身の血がいきなり全て抜かれたような衝撃だった。

「昔のことだ。性分に合わないから降りたんだが、ギヌアには気に入らなかったようだ。俺を襲い、不意打ちを食らった俺は何とかセレドへ逃げ込んだ、そういうことだ」

嘲笑を含ませて話すアシャの横顔を見上げる。

「そして、ギヌアはより完全にラズーンを手に入れようとして『運命（リマイン）』に与したというわけだ。視察官（オベ）の力を存分に利用して、な」

再びアシャは歩き出した。

「もう一度あいつと渡り合うには俺も力が残っていなかった。それほどのことではできないまいと思っていた俺が甘かった」

「だから……姿を隠していたんだね、ボク、の付き人として」

へたに大きな国に入るわけにはいかなかった、顔を知っている者に出くわすかも知れなかったから。その意味では世界の変動にも気づくことない辺境の小国、セレドは格好の居場所だった。

「俺は、今でも、これからも、ずっとお前の付き人だ」

「うん…」

ずっと、共に。

（それはきっと）

ラズーン、いや世界の王となることを望まなかった男は、小国セレドで守るべきもの愛すべきものを見つけた、そういうことなのだろう。

（世界さえ捨てて）

レアナと共に生きる、そういうことなのだろう。

（叶うわけ、ない）

それほど想い、それほど絆に何が届くのだろう。

（届かない）

どんな奇跡もあり得ない。

（なら、私のできることは、ただ一つ）

アシャを無事に守ること、レアナの元に戻すまで。

（それだけがきっと）

ユーノの気持ちの証だ。

唇を噛んでアシャの厳しい横顔から視線を逸らせる、と、遠くの闇から何か金色のものが走ってくるのに気づいた。

「アシャ」

「月獣（ハーン）だな」

ユーノの声にアシャも気づいた。ユーノを降ろし、短剣に触れて戦闘に備える。

「あ、あの後ろ！」

「イルファ達じゃないか！」

まるでイルファ達を導くように駆けてきた月獣（ハーン）は、アシャとユーノの前まで来ると急に立ち止まった。

「アシャっ！」

「ユーノっ！」

そのすぐ後ろを追って来た馬が泥を跳ね散らかして立ち止まり、馬上の二人がもどかしげに飛び降りてくる。レスファートなどはべとつく泥をものともせず、一直線にユーノに飛びついてきた。

「ユーノ！」

「あっつ」

ぎゅっ、と力の限り抱き締められてユーノが呻く。いつもならユーノの様子を気遣うはずのレスファートが、今回ばかりはおかまいなし、なおも強く激しくしがみつき続ける。

「レス？」

その小さな体が押さえ難い恐怖に怯えているようにぶるぶる震えているのに気づいて、ユーノは傷の傷みも忘れて思わず相手を覗き込んだ。

「ユーノ、生きてるよね、生きてるんだよね...っ」

しゃくりあげながら、レスファートは切れ切れに何が起こったのかを訴えてくる。

「アシャー！」

「わ！ ばかつ、よせっ！」

隣で同じくイルファに飛びつかれたアシャがじたばたともがく。

「イルファ、お前、怪我してるじゃないか！ その手当が先だろう！」

「俺はお前のことが心配で心配で」

「わかった、わかったから！ 手を出せ、見せてみろ、というか、まず離れろっっ！」

切れかけたアシャが怒鳴りつけ、ようやくイルファが抱擁を解く。

「どうしたんだ、この傷は。あの後どうなったんだ」

確かにイルファの肩はべつとりと血に濡れているし、それほど浅い傷でもなさそうだ。だが、イルファはアシャが彼の状態を気にしてくれたと上機嫌だ。

「よくぞ聞いてくれた！」

とにかくこっちへ来い、と少し泥の少ない地面に移動して、戻ってきた馬から布や治療具を取り出したアシャが、泥まみれのユーノの傷を確認して手当し、続いてイルファに向かった。その間もイルファはしゃべり続けている。

「……というわけで、後ろから肩をやられた時には正直これまでかと思ったぞ。だが、手近にちょうどいい獲物があってな、それをぶん回した」

「獲物？」

「側に居たカザド兵だ」

イルファはにんまり笑った。

「そいつを後ろの『運命（リメイン）』に放り投げたら、うまく当たってくれてな、下敷きになって『運命（リメイン）』がもがいている隙に剣で脾腹を刺し貫けた。だが、敵もさるもの、それぐらいでは参らずに、なおも打ちかかってきやがって、結局何度か胸と腹を切りつけて、ようやく仕留められた、が…」

イルファは突然、珍しく気持ち悪そうな顔になった。

「『運命（リメイン）』を殺すと、残りのカザド兵の半分近くがいきなりドロドロと溶けちまいやがった。それを見て、小便漏らす奴がいるは、泣き叫ぶ奴が出てくるは、うるせえから放ってレスの方へ向かったんだが、あれは一体どういうことなんだ？」

アシャはちらりとユーノを見やり、微かに溜め息をついた。暗く陰った紫の瞳を瞬く。

「『運命（リメイン）』の支配というのはそういうことだ。主のいなくなった肉体を操っている。だから、源が死ねば、それらの体は維持力をなくす」

苦い口調で吐き捨てる。

「ただの腐った肉に戻る……悲惨な末路だ」

「ちげえねえな」

イルファが肩をすくめ、いたた、と僅かに顔をしかめた。

話しているうちに夜の帳は上がっていき、天空の片端から白い朝が滲み出していた。

巨大な月はまだ光を失ってはいなかったが、物の色形がはっきりしてくるにつれ、その輝きを褪せさせていく。

「レス…ところで、あの月獣（ハーン）は？」

彼ら四人の側で、先ほどの月獣（ハーン）は、距離を保ったまま、まだユーノ達を見守っている。

「一番始めに会った月獣（ハーン）だよ」

レスファートはしばらくユーノにしがみついで、ようやく少し落ち着いてきたらしい。それでもまだユーノの側に寄り添いながら、そっと背後を振り返った。

「仲間がおかしくなって行って、人へのいかりとかにくしみばかり広げていくのにたえられなくて、何かおかしいってぼくらに伝えようとしてくれていたんだって」

仲間うちからは『はぐれもの』と呼ばれていたと言う。

「でも、彼は、はぐれることをこわがっていないの」

レスファートはユーノの片手をしっかりと握った。そこから流れ込む力を受け取るように、一瞬目を閉じ、

「それどころか、今はほこらしいって」

「誇らしい？」

「うん。じぶんはじぶんの生きる方法をきちんとえらぶことができるんだって」

「……新しい月獣（ハーン）、か」

ぼつりとアシャがつぶやいた。

「人に頼らず、人に怯えず、人の側でどうやって生きていくかを選ぶ、か」

瞳の奥で何を考えているのか、淡く煙った視線が虚ろだ。

「そんなことは、ありえないのだがな」

低い声でつぶやく。それからもっと微かな声で、

「そんなふうには作られていないのだがな」

（そんなふうには作られていない？）

ユーノは眉を寄せた。

（そんな言い方って）

まるで月獣（ハーン）が誰かによって産み出されたものようだね、そう言いたくなって唇を開く。だが、

「今度の二百年祭は、大きな転換点になるということか」

ぼそりと続けたアシャの顔から再び表情がごそりと消えて、思わず口を閉じた。

「ありがとう」

レスファートがそっとユーノから離れて月獣（ハーン）の側へ歩み寄る。

月獣（ハーン）も甘えるようにレスファートに体を寄せ、頭を一瞬下げてレスファートの頭に触れ、それからすっと身を引いた。

「ぼくらを助けてくれて、ありがとう」

「……」

緩やかに頭を上げ、消えていく夜空を見上げ、ユーノ達を眺める。その後ろで、明け始めた夜にしがみつくように消えていく仲間達が次第次第に遠ざかっていく。

一瞬、彼はその仲間を振り返った。呼びかけるように、体を伸ばす。

だが。

走り出したのは仲間と正反対の方向だった。朝日が昇る白い世界へまっすぐに輝く体を溶け込ませて、ただ一頭で『はぐれもの』は去って行った。

## 5.二つの塔

「あつ...」

小さく呻いて、ユーノは目を覚ました。

右脇腹に鈍い痛みが澁んでいる。そっと手を伸ばして触れてみると、妙な熱っぽさが伝わってきた。

(月獣(ハーン)の傷か)

微かな溜め息をついて目を閉じる。

時は深夜、人家のほとんどないキャサラン辺境の地。

(まずい.....化膿してきたかな)

じんじんと広がってくる痛みと熱にぼんやりしながら考える。

瞼の裏に、ねじり角を額に頂いた華やかに輝く月獣(ハーン)の姿が浮かび上がる。闇夜に鮮やかな金の馬。

(優しい月獣(ハーン))

緑の瞳に限りない優しさと哀しみをたたえた獣。

だからユーノは抵抗できなかった。相手が、本当は脆いと知っていた。激しい攻撃はしてこないとわかっていた。けれど、ユーノの一撃で傷ついてしまうほど弱いのだと知らされた。

その月獣(ハーン)を相手にして、ひどく傷めつけてしまいそうで怖かった。

(私なら.....慣れている、と)

心の中で誰かがそう呟いて、体から力が抜けて、突っ込んで来る角を避けられなかった。囁く声に心の奥が引き裂かれ、ずたずたにされ、どうして生まれてきてしまったのだろう、そう自らに問わせた。

(どうして...私なんか...生まれてきたんだろう?)

心の声はそう尋ね、答える術を知らずにユーノは逃げ惑った。逃げ込める場所はどこにもなかった。探して探して探し抜いて、ほんの一瞬、月獣(ハーン)の澄んだ冷たい金の光とは違う、日だまりの黄金が閃くのを見つけた。

(アシャ...)

アシャが振り返る。ユーノ、と豊かな響きの声が耳に届く。滲む視界、頬に流れる涙の熱さに身も心も焦がされそうだ。

両腕を差し伸べて駆け寄ろうとしたユーノは、その寸前で立ち竦んだ。そうっ...と両腕を引く。ゆっくりその腕で、自分の体を抱き締めながら、ユーノは眉をひそめた。

たぶん、アシャは彼女を受け止めてくれるだろう。抱き締めて慰めてキスしてくれるだろう。

(だから...行けない...動けない...)

唇を噛む。体をなお強く抱き締める。目を閉じる。

(それは、私のものじゃ、ない)

背後に居た月獣(ハーン)の気配が変わった。

振り返るユーノの目に薄紅の絹と淡いピンクの薄物をまといつかせたレアナの姿が映る。

(ああ...姉さま)

レアナは美しく微笑した。優しいレアナ。どこか儂げで、女らしくて、でも芯は強くて.....傷つけたくない女性。

声が囁く、お前はレアナの犠牲になっているんだ、と。

馬鹿なことをしているぞ。アシャを好きなんだろう。なのに、みすみすレアナに渡してしまうのかい。それはただの言い訳だろう。アシャもレアナもお前の犠牲に気づきはしない。お前の傷には気づかない。

心の暗闇でじっとその声に耐えていたユーノの視界に、ふっと心配そうなアシャの顔が飛び込んできた。

美しい眉をひそめ、深い紫の目を曇らせ、唇を少し開いて今にも何かを話しかけてきそうだ。

(ア...シャ...)

ユーノは眉根を緩めた。唇の両端を上げ、おどけて笑ってみせる。

(そんな顔、するなよ、アシャ。あなたを悲しませたく...ないんだ)

体をきつく包んでいた腕を解く。開いた空間には寒さだけが入り込んでくる。

(私は誰の犠牲にもなっていない)

誇りが湧き上がる。『はぐれもの』の姿を思い出した。

(お前もそうだろう？ 自分で道を選んできたんだ。後悔もしないし、犠牲になったとも思わない)  
同じ時間がもう一度巡ってくるとしても、やっぱりユーノは同じことをするだろう。

頬に零れ落ちてくる涙が熱い。

(あなたが、大事)

レアナが、セレドが、そして、アシャが。

(あなたを守れさえすればいい)

それがユーノにできる真実の心の証。

「くっ」

ぐうっといきなり押さえつけられたような痛みを感じて目を開けた。甘酸っぱいものが胸に一杯になっていて、目を擦った手が濡れている。

哀しいのではない。寂しいのではない。

ただ切なくて。

どこまでいっても、こういう形でしか生きられない自分が、切なくて。

「は...」

少し苦笑を漏らして息を吐いた。

見上げる空にはまだ満天に星が散っている。

(まだ明けそうにないな...夜中に騒ぎたくない、けど)

それでなくても皆疲れている、『運命(リマイン)』支配下(ロダ)を守り一つなく進まなくてはならない旅路に。イルファでさえ、疲れが見え出しているほどなのに。

(もう少し、我慢すれば)

夜が明けるまで耐えたい、皆の眠りを妨げたくない。

(く、そ)

無意識に右手で草を掴んでいた。傷を押さえた左手の下で、痛みが容赦なく強くなっていく。小刻みな呼吸で激痛を逃がし、強張ってくる体に空気を取り込み、力を抜く。草を離し、のろのろと額を擦った。

汗びっしょりだ。目を覚ますまでに結構痛んでいたのだろう。

「っ」

くらっ、と視界が揺れた。

(ろくなもの、食べてなかったからかな)

ユーノが身に着けていた金細工はあったが、金は人間の居る所で初めて役に立つもの、金だけあっても腹の足しにはならない。レスファートの分を優先させていた付けがとんでもないところで回ってきたようだ。

めまいに呑み込まれそうになって、ユーノは歯を食いしばった。体が硬直する。硬直したまま、闇夜の中へ転げ落ちていく。一瞬閃光のように激痛が走って、思わず口を開いた。

「...っう」

「ユーノ？」

間髪入れずにはっとしたようなアシャの声が響いた。駆け寄ってくる気配に薄目を開ける。

(そうか...今夜はアシャが火の番だった)

「どうした？ 苦しいのか？」

覗き込んで来る顔が、胸の中のアシャと同じように心配そうだった。その肩に、いつの間にか白いものが乗っている。

「サマル...カンド...」

「クエア？」

「お前...どこに...っ！」

びくん、とユーノは体を跳ねさせた。貫いていった熱い稲妻に切り裂かれた気がする。

「この...っ、苦しかったら呼べと言っただろうが！」

きつく舌打ちをしたアシャが額に触れ、厳しい顔になった。

「かなり我慢してたな！ 俺の名前を忘れたとは言わさん...」

「アシャ...ラズーン...？」

思わず返した答えに、ぴくりとアシャの指先が震えた。

「ラズーン支配下（ロダ）では、アシャ、だ」  
吐き捨てる。

「は...」

掠れた笑いを漏らしてユーノは目を閉じた。

（わかって、ないな）

熱っぽさが全身を駆け巡って、意識が霞む。

（その名前は...私には封じられている.....呼べないんだ.....知らない...だろ）

「おい、ユーノ！」

アシャのうろたえた声が耳元で響いた。体を抱えて起こされ、何とか目を開ける。

「大丈夫か」

「うん.....月獣（ハーン）の傷.....化膿したのかな.....っ」

突然痛みの範囲が広がって、息を呑んでアシャの腕を掴んだ。もたせかけた頭がアシャの胸に当たって、少し早くなっている彼の鼓動を伝えてくる。

「きつそうだな」

アシャの声の不安、速まる鼓動に少しほっとすると、暗闇が視界を覆う。

「ごめ.....気を失い...そう」

耳鳴りがして沈み込みそうになる。

「待ってろ」

アシャが片手でごそごと荷物を開く気配がした。

「あまり飲まない方がいいんだが」

取り出したのは例の痛み止めだろう、赤ん坊のように唇を開かれ含まされた。必死に呑み込もうとしつつ、目を開くと、アシャが当然のように水を含み、唇を寄せてきてぎよっとする。

「だい、じょぶ、自分で、飲む」

もぐもぐ口を動かして何とか呑み込む。アシャがむくれたような残念そうな顔でユーノを見返し、ごくりと口中の水を呑み込む。

「水は？」

「くれる...？」

水入れを受けとり、何とか口に流し込む。上目遣いにアシャを見ると、濡れた口を無造作に擦る手の甲、それに捻られてふわりと戻る柔らかな唇の動きに視線が吸いつけられてどきりとした。

（温かな、くだもの、みたい）

つえばみたい、と意識を掠めた欲望に、何を考えてるんだ私は、と慌てて目を逸らせて大きく息を吐く。

「息苦しいのか？」

「ううん、だいじょう...」

言いかけて、ユーノはアシャの胸を押さえた。同時に顔は動かさず視線だけ背後へ送ったアシャが、片方の手を剣に伸ばしてユーノから離れる。同じく、ユーノものろのろと剣に手を滑らせた。

「誰か来る」

「ああ」

草の上を走る人間の気配。一人二人...四人.....六人。

ただし、始めの一人は離れているようだ。

（追われている）

目を細めて緊張を高めながら目の前の木立を見つめる。

突っ込んできている、ほら、そこだ。

「はっ！」

木立の間を擦り抜けるようにして飛び込んできた相手は、突然目の前に現れたユーノ達に大きく目を見張って立ち竦んだ。

波打って流れる見事なプラチナブロンド、色があるのかないのか分からぬほど淡いグレイの瞳。整った顔立ちに逆らうようにきつく結ばれていた唇がぽかんと開く。歳の頃、十六、七の子ども子どもした感じが抜けない男だ。

「待てえっ！」

「そこだ！」

背後から浴びせられた声に相手ははっと振り返った。続いて木立の中から飛び出してくる男達の剣を、危うく飛び退いて避ける。持っていた細身の剣で、かろうじて一人の攻撃を食い止める、だがも

うそれほど長くはもたないだろう。

「ユーノ、待て！」

アシャの制止は遅かった。

薬はよく効いた。痛みがずいぶん楽になった。だが、それと同時にアシャの肌の温度を間近に感じる距離にいるのが限界だった。まだ少し息が弾むが、それを押して剣を掴み、一気に男と追手の間に飛び込む。

「この、ばっかっ！」

背後から叫んだアシャが剣戟に加わる。

「ひけっ、ひけえっ！」

手練二人の加勢に気づいたのだろう、追手の一人が情勢不利と見てとって剣をおさめながら叫んだ。

「覚えてろよ！」

捨て台詞を残して走り去っていく男達のマント姿を見送って、肩で息をしながらユーノも剣をおさめた。せっかく押さえておけた痛みが倍加して戻り、喘ぎながら片目をつぶる。

「つ、つっ」

「どうかなさったんですか、もしかして今ので何か！」

飛び込んできた男はうろたえたように駆け寄ってきた。

「あ、は、大丈夫、今のじゃなくて、ちょっと古傷が」

「ぼくの城へ来て下さい！」

言い放った相手にユーノは瞬きした。

「今はたいしたもてなしはできませんは、お怪我が治るぐらいまでは」

(どこかの...王子?)

「いや、悪いけど、ボクは急ぐ旅の途中で」

「大変嬉しいね」

いきなりアシャが遮った。

「せっかくのお誘いだ、断るわけにも行くまい。『古傷』が治るまで、喜んで滞在させて頂こう」

「アシャ！」

反論しかけたユーノをひんやりとした瞳が迎え撃つ。

「お前は剣士としてもっと自覚を持つ、と約束したな、ガズラで」

「う」

「一戦やるたびにへたっては、この先の旅なぞできん」

怒りと苛立ちが満ち満ちた険しい声に、さすがに黙る。

「俺も賛成」

ふいに別の声が同意した。振り向く三人の目に、むっくりと体を起こすイルファが映る。

「あの……」

飛び込んで来た男は困惑した顔でユーノを振り向いた。

「お仲間...です、よね？」

「ああ」

ユーノはじろりとイルファを見やった。

「人が闘っているのに、のんびり寝てられる『仲間』だよ」

「だってなあ」

ふああ、と眠そうにイルファはあくびを漏らしながら、

「ユーノとアシャが出てて、相手が六人」

肩を竦めて見せる。

「俺に獲物があたりっこない」

「つうっ！」

「痛いのは当たり前だ」

アシャは眉を寄せてユーノを睨みつけた。

ベッドの上に横になったユーノの腰に、包帯を巻きつけながらことばを継ぐ。

「人が心配して薬をやれば、とたんに剣を振り回しやがって」

ことばもついつい荒くなる。

月獣（ハーン）の傷は深くなかったはずだ。ただ、湿地帯に潜む数々の細菌を警戒して厚めに手当しており、旅の無理はあったが回復は悪くなかったはずだった。

なのに、今改めて傷を確認してみれば、熱を持ち、塞がっているはずの傷がまだ治り切っていない。きつともっと早くに悪化の兆候があったはずなのに、ユーノがそれを我慢していたのだろうと察しはつく。

挙げ句に痛み止めを飲ませてやれば、それをいいことにまた、突っ込まなくていい戦闘に飛び込む神経がわからない。

「だって」

詰られたユーノはむっとした顔で唇を尖らせる。

「ほっとけないだろ、ああいう場合！」

「追われていれば助けてやる、そんなことをしては先へ進めないぞ」

「でも、一人だったんだぞ」

一瞬詰まった顔になったユーノが黒い瞳に怒りを浮かべる。

「あのままじゃ、一人で屠られていたかもしれないんだぞ」

その表情に、たった一人で闘い続けてきた自分が重なっていたとは想像出来る、出来るが納得するというのは別物だ。

「なら、俺を呼ぶとか、イルファを起こすとか、方法があるだろう！」

今回は、すぐ側にアシャが居た。なぜ一言、彼を助けてやってくれ、と命じなかったのか。アシャはユーノの付き人で、しかも主は怪我をしている、命令でなくとも主の望みを果たすのは当然、瞬時に叩き伏せてやったものを。

怒りがおさまらなくて怒鳴りつけ、相手の目が自分を正面から見据えているのに口をつぐむ。

「...じゃ」

厳しい顔で唇を結んだユーノが、何かを堪えるように顔を背けた。手当されるままにベッドに身を投げ出していたのを、

「今度からイルファを呼ぶよ」

ぼつりと言いきり捨てて体を起こし、止める間もなくベッドから離れた。

「...おい」

側を擦り抜けたのに慌てて振り向いたが、もう扉の向こうに姿は消えている。

「イルファ？」

（俺じゃなく？）

「...なぜだ」

不安と困惑が募って、アシャは顔を凍らせたまま、のろのろと髪をかきあげた。

（ひょっとして）

「俺は...嫌われてるのか...？」

（なぜ？）

唇を噛む。

結局、アシャ達はユーノの傷が完全に治るまで、飛び込んで来た男、テオ・マキフ・リヤスト二世の城に滞在することになっていた。

テオ二世はキャサランの辺境区の王の息子で、その居を、ここ『白の塔』に構えている。

『白の塔』はその名の通り、白い石を上へ上へと積み上げた装飾的な塔で、壁面には辺境区の紋章であるイワイツタが一面に浮き彫りにされていた。塔の天辺は物見台で数門の砲が備え付けられ、その下が武器庫、その下が作戦会議室と、外見の華やかさに反して戦闘のために作られた要塞だ。

作戦会議室の下には王の執務室と私室数部屋、寝室があつて、テオ二世が今そこを使っている。

高さから言えば、基底部からほぼ半分にあたり、アシャ達が客室として与えられたのもこの階、病人としてあつかわれているユーノは、医師のアシャが付き添うのが妥当だろうと夫婦用の部屋を与えられ、イルファとレスはこれまた二人で一つの部屋を与えられている。

「ふ、う」

しばらく俯いたアシャは小さく溜め息をついて、ゆっくり天蓋付きのベッドを回って窓辺に寄った。

日差しは既に落ちつつあり、赤い光を塔の壁に跳ねさせている。

窓から見下ろすと、斜め左下に階下の客人用の部屋のバルコニーが、塔から一カ所突き出ている。なおも下へ視線を降ろしていくと、滑らかに競り上がる基底部に寄り集まるように作られた幾つかの建物が見える。集会場、演劇場、諸大臣の屋敷。もっとも、今は誰も住んでいないんです、とテオ二

世は寂しそうに話した。

下のバルコニーには、今、二つの人影があった。テオ二世とユーノの姿だ。

テオが塔の周囲に広がる景色のあちこちを指差して話しかけるのを、ユーノは頷いて聞いている。中でも一つ、示された正面の塔に強く興味を魅かれたようだ。

アシャも、そのまま真っすぐ見渡せる平原に目をやった。

ほぼ正面に『白の塔』とほとんど同じ造りと見られる塔と建物の一群がある。

『白の塔』と並び称される『紅（あか）の塔』、別名『死の塔』だ。赤っぽい石を積み上げ、『白の塔』が生者の街とするなら、対して『紅（あか）の塔』は死者の魂の街として造られている。

言わば巨大な墓なのだが、今、『紅（赤）の塔』は異様な活気と賑わいを見せていた。

その上空に白い鳥が舞っている。

「クウツ！」

高く響く声と呼びかけてきて、アシャは革籠手を巻いた左腕を突き出した。

突撃してくるように飛んで来た鳥が寸前身を翻し、思いもかけない柔らかな動きでアシャの腕に降りる。

「ようし、ごくろうだったな、サマル」

「クウア」

サマルカンドは安らぐように甘えて鳴いた。

昨日夜半、アシャはラズーンからの通達を受け取っていた。キャサランの『運命（リマイン）』侵攻は確実、キャサランを通る限り『運命（リマイン）』との正面衝突は避けられない。加えて、『運命（リマイン）』はキャサラン辺境区をその支配下（ロダ）に置き、『紅（あか）の塔』に潜伏しているとの知らせだった。

半ば強引にテオ二世の招待に応じたのは、ユーノの怪我ももちろんだが、この状況をうまく切り抜け、キャサランを通過するためには、まず『紅（あか）の塔』の情報や辺境区の動向を把握する必要があったせいだ。

（ひょっとして）

その冷徹なアシャの計算がどこかでユーノに伝わったのだろうか。

俯瞰すればユーノの安全のためだが、それでもどこかで視察官（オベ）としての感覚や、時々否応なしにユーノに思い知らされる正当後継者としての立場が、知らず知らずになじみ出て、ユーノに距離を抱かせてしまっているのだろうか。

月獣（ハーン）で素肌に近いユーノを抱き上げていた、自分の中に揺れた荒い衝動を勘づかせるまいと意識を閉じた、それに呼応するようにアシャ・ラズーンと呼びかけられた、あの時のように。

（鋭いユーノ）

アシャの中に動いている『力』を確実に読み取るくせに。

（鈍いユーノ）

跪いてまで求めた愛情を欠片も与えてくれない。

「クエツ？」

「ん…」

問いかけるように自分を覗き込んできたサマルカンドに、アシャは情けなく笑って、窓に身をもたせかけた。

「サマルカンド」

「クウ？」

「初めての恋を……覚えているか？」

この想いはいつ始まったのだろう。目を魅きつけられたのは、もっと前だ。愛しいと思ったのも、守ってやりたいと思ったのも、もっともっと前だった。ユーノが殺される、そう考えるだけで冷たく荒い怒りを感じるようになったのさえ、この想いよりもまだ前だった。

（きっと、あの時から）

月獣（ハーン）の攻撃を耐え抜いて、なお、己の心の弱さにもユーノが打ち勝ったあの一瞬。

打ちのめされ、叩きのめされた、光の中で。

全てを投げ出してもいい。その目に見つめられていたい。その口で求められていたい。側に居よと命じられ、我が意を満たせと訴えられ、他の誰でもない、アシャただ一人が、その差し伸べる手を受け止める唯一無二の男でありたい。

「ユーノが手を差し伸べる相手って.....どんな奴だろうな、サマル」

あの強い娘が、自分の全てを委ねる相手。

(俺ではなくて.....イルファを呼ぶと言い切った)

勘違いだったのか、とアシャは考えた。

ほんの一瞬、彼女の目がアシャを追ったように感じたのは。アシャに心の内を見せたと思ったのは。多くの女達に追われていた男の傲慢だったのか。

「クェアアッ！」

沈んでしまったアシャを気遣うように、サマルカンドが鳴いた。

「ふ」

皮肉な笑みを浮かべて、アシャは再び窓の外へ腕を突き出した。

「そんなことを言ったら、恋などできん、か。.....ユーノを頼むぞ、サマル！」

「クェッ！」

翼を広げてクフィラは悠々とバルコニーへ舞い降りて行く。見ようによっては、アシャが、ユーノとテオ二世の歓談を妨げるために放ったと見えないこともない。

(我ながら幼いことをしてるよな)

クフィラを見送りながら、アシャは溜め息をついて窓辺を離れた。

「わっ！」

ふいに現れたサマルカンドにテオ二世は大げさに驚いた。

「何です？」

「クフィラだけど」

「クフィラ？ あの伝説の！」

「クェッ！」

そうだと、と言いたげにサマルカンドが応じ、ユーノの腕から肩へとすり寄った。

「あなたのものなんですか？」

「ええ、まあ。本当はアシャのなんだけど」

答えながら、ユーノはサマルカンドの降りて来た上空を見上げた。視線を感じたのだが、アシャの姿はないようだ。

「アシャって、あのきれいな人ですね」

「ええ」

ユーノはくすりと笑った。普段の姿で『きれい』だと評されるのなら、改まった装い、ましてや女装などを目にしたら、テオはどういう表現をするのだろう。声も出ないかも知れない。

「でも、あなたもアシャも凄腕ですね。ミルバの部下を軽々と...っ」

笑いながら話しかけたテオ二世は、途中でいきなりはっとしたように口をつぐんだ。

「ミルバ？」

「.....『紅（あか）の塔』の主人です。いつからか『紅（あか）の塔』に住みついて、父さまや母さまを騙して連れ去って.....」

テオ二世は唇を囁んだ。

「けれど.....ぼくの婚約者、『イ・ク・ラトール』、でした」

キャサラン辺境の方言らしいことばを柔らかく発して、テオ二世は『紅（あか）の塔』を遠いグレイの目で見つめた。

「『運命（リメイン）』が？」

アシャの唇から紡がれたことばに、ユーノもイルファもぎょっとして、腕を組んだまま壁にもたれているアシャを見つめた。レスファートもわけがわからないままに、ユーノとイルファの厳しい表情に不安を浮かべる。

静まり返った夜の世界、ユーノの部屋に集まった四人、明かりに照らされたアシャはにこりとも笑わなかった。

「あの『紅（あか）の塔』が『運命（リメイン）』の拠点になってるって？」

「あそこにあいつらがうじゃうじゃいるのか。ぞっとするな」

ユーノの確認に、『運命（リメイン）』と闘った手応えを思い出したのか、珍しくイルファが真面目な顔になる。

「それどころか、キャサランで安全なのはここだけと言ってもいい」

アシャは憂いを漂わせた。  
「正面から進んでたら、とっくに餌食になっている」  
「と同時に、ラズーンへ行くなら、何が何でもここを突破しなくちゃならねえってわけか」  
イルファが凄んだ声を出す。  
「でも、アシャ」  
ユーノはベッドに座ったまま言った。  
「ここにいるのはテオと他数人、それにボク達だろ。どうやって『紅（あか）の塔』を陥す？」  
「計略を使うしかないな。『運命（リマイン）』だって全員に目が届いているわけじゃない。下っ端の方は小悪党を使ってるだろうから、そのあたりから食い込んでいけば何とかなるかも知れない」  
「おとり？」  
レスファートが無邪気に尋ねる。  
「おお。よく知ってたな、レス」  
イルファがからかった。  
「ぼくだって、それぐらい知ってるよ。ぼくがやってもいいよ」  
「ぶ」  
「なに、イルファ」  
「いーえ、勇ましいこって」  
「冗談はさておいて、とにかく誰かを送り込まなくてはならない」  
アシャはむっつりした様子で言った。  
「『白の塔』の人間はだめだ。『紅（あか）の塔』の人間はもともと仲間だからな」  
「じゃあ、ボク達の中から、か」  
ユーノは一渡り見回し、アシャに視線を戻した。  
「ボクが行くよ」  
「だめだ」  
にべもなくアシャが拒み、むっとする。  
「どうして止める？」  
「俺はお前の付き人だ。それに怪我人に任せられる仕事じゃない」  
突き放すような冷やかさに苛立つ。  
「怪我ったって、こんなかすり傷」  
「ふーん」  
アシャは壁から身を起こして近寄ってくると、ずっと手を伸ばした。本能的にユーノが身体を引く前に、ひらりと手を閃かせる。  
パン！  
「つうっ！」  
「アシャ！」  
容赦なく打たれた右脇腹を押さえて崩れるユーノに、レスファートが甲高い声を上げた。  
「なにするんだよ！」  
「自分の状態を知っておくのも剣士の務めだ」  
「でも、ユーノ、けがしてるのに、ひどいよっ」  
レスファートが嘸みつく。  
「この...」  
恨めしく、何とか片目を開けてアシャを見上げ、ユーノは呻いた。  
「よくもやってくれる...っ」  
「怪我人は大人しくしてろ」  
言い捨てて、アシャがぐるりと背中を向ける。  
「ということで、イルファ、俺とお前で計画を練ろう。お前の部屋へ行くぞ」  
「あ、ああ、そりゃまあ、俺はお前と一緒に嬉しいけどな」  
イルファがアシャについていそいそと部屋を出て行く。  
「ち...っ」  
ユーノは舌打ちした後、小さく溜め息をつき、腹を押さえたまま寝転んだ。レスファートが急いでベッドに這い上がり、おろおろした様子でユーノを覗き込む。  
「ユーノ...だいじょうぶ？」  
「...何とかね」  
「アシャ、ひどいよね」  
「仕方ないさ.....怪我が治りきっていないのは本当なんだから」

もちろん、アシャが正しいのはわかっている。ユーノの提案が無茶なことも。

だが、他にどんな方法がある？

(それに、どうしてアシャは機嫌が悪いんだ？)

じんじん痛む右脇腹を押さえながら考える。

いつもなら、ユーノの無謀さを諫めはしても、こういう手荒い教え方をしなかったのに。

(やっぱり.....私が無茶しすぎるから、かな...)

きっとそれで迷惑をかけているんだ、とユーノは切なく眉を寄せた。

(好かれなくてもいいけど...嫌われたく、ない)

「.....自己嫌悪...」

隣の部屋でアシャは落ち込んでいた。

「あん？」

椅子に埋まり込んで珍しくぐったりと覇気をなくしてしまったアシャを、イルファが不審そうに振り返る。

「ばかなこと考えてるから.....これじゃ、まるでガキだ」

「計画がか？ よくできてると思うがな」

イルファがきよとんとした顔になる。

「計画じゃない、もっと個人的なことだ」

「というと...女か！ 俺に断りもなく！」

「...やめろ、冗談に聞こえん」

「冗談じゃないぞ、俺はだな、この計画の要であるお前がドジったりしやしないかと、純粋な心配をだな」

言いつつ、ぱんぱんと片手でこれ見よがしに剣に結んだりポンを叩いてみせるあたり、どうも怪しい。

「いい加減にそれを外せ」

「なかなか丈夫なものでなあ」

イルファはにこやかに拒む。

「雨風に強く、修羅場を共に生き抜いてくると、なお手放せなくなってくる」

「リボンの話だ」

「剣の話ではなかったのか」

「わかったわかった」

巧みに逸らされているとしか思えない会話にうんざりして、アシャは手を振った。

「やっている間はそれについて悩まないことにする。決行は早い方がいいな。テオ二世は部屋か？」

今では『運命(リメイン)』側についた視察官(オペ)がいないと断言しきれない。どこで情報が漏れていくかわからない。

「ああ。食事の後は大抵私室にいるそうだ」

「経過を説明してくる。決行は明日の夜だ」

「わかった、まかせておけ」

にっと唇を上げたイルファに苦笑を返し、アシャは部屋を出た。まっすぐにテオ二世の部屋に行こうとして、隣の部屋の前で立ち止まる。

「.....」

しばらく考え込んでから、アシャは扉を叩いて声をかけた。

「ユーノ？ 起きてるか？」

「アシャ？ うん、どうぞ」

「入るぞ」

扉を開けて中に入ると、しっ、とユーノが唇に指を当てて制した。見れば、レスファートが彼女の横で丸くなって寝息を立てている。半身起こしたユーノは優しい微笑をレスファートに落とし、

「寝ちゃったんだ」

「ああ」

声の甘さにほっとしながら、アシャは明かりを消した部屋をユーノの側に近づいた。

「さっきはすまなかった」

低い声で謝る。

「ああでもしなきゃ、言うことを聞きそうになかったからな」

我ながら言い訳じみている、しかも不十分でいい加減な内容だ、と思いつつ、レスファートと反対側へ回り、腰を降ろす。

「うん……ボクも反省してる」

ユーノは少しアシャから身を離して肩を竦めてみせた。

「傷が治りきってなけりゃ足手まといになる、そんなこと、わかってたのに」

しょんぼりしてしまった風情に、そういう意味じゃない、と言い返しそうになって危うく口を噤む。

「痛むか？」

少し離れた距離が寒くて、アシャは気遣うふりをして、もう少しユーノの方へにじり寄った。

「ちょっと。でも、平気。計画はどうなったの？」

二人きりでいるのに、そういう話しか思いつかないのか。

(そこまでの関係じゃない、それはわかっているが)

ちよつとがっかりしながら、アシャは溜め息をついた。

「あまり顔が知られてないイルファが乗り込む。もっとも手引き程度で、後は俺とテオ達が乗り込んで、一気に片をつける予定だ。明日の夜、決行する」

「そんなに急に？」

「ああ。俺達が『白の塔』に居ることが知れ渡ってからじゃ、警戒が厳重になるからな」

アシャはふつとことばを切って目を閉じた。それほど楽な計画ではない、時間と競争になるはず、一気に落とせなければ、こちらがまずくなる。考えられる状況を次々思い浮かべつつ、目を開ける。

「だから、今夜のうちにテオと手順を打ち合わせておこうと思っている」

「……テオ」

ユーノがためらいがちに切り出した。

「ん？」

「『紅（あか）の塔』に恋人が居るみたいだけど」

「ミルバ、か」

「知ってたの？」

目を見張るユーノに小さく苦笑する。

「それとなくな。テオの部屋に肖像画があった。黒髪に真紅の瞳の娘だ」

「『運命（リマイン）』！」

「おそらくは」

入り込まれて心を許し、気づいた時には全てが遅かった、というわけなのだろう。重く頷くと、唇を噛んで何かを考え込んだユーノが、

「イ・ク・ラトールってどういう意味？」

唐突に問いかけてぎくりとした。

(まさか、テオがそれを囁いたんじゃないだろうな)

「なぜだ？」

ひんやりとした想いに苛まれながら、問い返す。

「テオがミルバのことをそう言ってたんだ」

「そうか」

(それなら、なおさら素早く動くしかない)

冷徹な計算はそのことばの意味を知っているからだ。

「誰よりも愛しい人、だな」

「誰よりも……愛しい人…」

ユーノの黒い瞳が潤むような光を帯びて見返してきた、そう感じたのは一瞬、すぐに絡みかけた視線をユーノから逸らせる。

「かわいそうだね、テオ」

「…ああ」

「ボクに何かできることは？」

それを俺に聞くのか、他の男への憐憫に何ができるか教えろと？

思わず問い正しそうになってユーノを見下ろし、少し開いた唇に視線が止まる。

「そうだな」

おどけるように続けた。

「さしあたっては、しゃべり鳥（ライノ）の時のキスを返してくれること、か」

「え…」

見る見るユーノが頬を紅潮させる。

「だって、あれはガズラで」

「結局返してもらってない」

「ア、アシャあ...」

何もこんな時にそんなことを持ち出さなくても。

そういう顔で見返すユーノににんまりと笑い返す。

「ん？ 剣士に二言があるのか？ 返すと言ったな？」

「.....あなた、ボクをからかっているだろ」

「半分は当たってる」

困り顔の相手が、今この瞬間は自分のことしか考えていないのが嬉しくて、アシャはくすくす笑った。

「半分？」

きよんとした顔で無邪気にユーノが首を傾げる。

「後の半分は？」

「後の半分は」

アシャはユーノの肩に手をかけた。びくりとしたユーノが体を強張らせる。その緊張も好ましい。

「本気でお前のキスを...」

欲しいと思ってるかと答えたらどうする？

吐息で囁きながら顔を傾け、唇を寄せる。

「あ...」

誘われるように呑まれるように、ユーノが微かに震えながら、それでも目を伏せて受け入れようとした、その矢先。

「アシャ！」

バン、と背後の扉が開いて明かりが差し込んだ。

アシャの腕から瞬時にユーノの体が擦り抜ける、まるで始めからそこには居なかったかのように。

「あの計画、どうして下の押さえがないんだ！」

イルファのどら声が響いた。

「.....なくていいんだ」

視線の先にはまだユーノがいる、だが、その姿は既に警戒を満たして指さえ届かぬ遠くに引いている。とっさに背けた横顔は表情が読めない、戸惑っているようにも見える、だが、拒んでいるようにもまた見える。

「押さえはいいって言っただろ」

はああ、と深く溜め息をついて、アシャはベッドから立ち上がった。突然入ってきたイルファを振り返る。視線がねめつけているかもしれないが、緩める気持ちなどない。

「それを完全に果たしてくれる相手に心当たりがあるって」

そのあたりは十分に説明していたはずだ。

「知り合いか？」

イルファは今初めて聞いた顔で聞き返す。

(絶対わざとだ)

「ああ。とびきり腕のいい狩人だ、だから心配するな安心してろ」

答えながらイルファを部屋の外に押し出していく。背中越しにユーノにおやすみ、と声をかけたが返事がない。

「イルファ」

ぐったりする気持ちを持って余し、扉を閉めてイルファに向き直ったとたん、

「狩人、というと、ラズーンの知り合いなのか？」

「.....ああ」

なるほど、単にふざけて突っ込んで来たというわけではないらしい、と相手を見直した。

「やっぱりただ者じゃなかったのか」

イルファがいかつい顔でにやりと笑う。

「ユーノもそうか？」

「いや、彼は違うが...付き人になってからわかったが、俺の本来の役目と無関係というわけでもない」

「じゃあ、何らかの形でラズーンに関わりがあるやつなんだな？」

「そういうことだ」

「視察官（オベ）というのを、風の噂に聞いたことがある」

イルファが日に焼けた顔に鋭い表情を浮かべた。  
「諸国を巡るラズーンからの旅人、ラズーン治世を支えるための目だ、と」  
そいつか？  
ことばは問いかけだが、中身は確認だ。  
(もう、無理だな)  
アシャはゆっくり瞬きした。この先も一緒に旅を続けるならば、遅かれ早かれ『ラズーン』が何なのかも知れるだろう。  
「当たらずと言えど遠からずだな」  
促して部屋に戻りながら続ける。  
「俺の正体と言う意味なら、もう一つの方が通りがいいぞ」  
「もう一つ？」  
「ラズーンの正当後継者」  
「が」  
どしん、とイルファが滑ってこけた。茫然とした顔で見上げて尋ねてくる。  
「おい待て、正当後継者？ んじゃ何か、ラズーンの王子？」  
「そういうことだ」  
「そういうことだ、じゃねえよ！」  
さすがに怯んだ顔で唸る。  
「恐ろしいのと組んじまった」  
「そうたいしたものじゃない」  
「おいおい、ラズーン支配を甘く考えるなよ、アシャ。俺達にとってラズーンは世界の源だぜ？ その王子と同行するなんざ、単なる見聞旅行と言うわけに行かねえだろ」  
「ならどうする、ここで引くか」  
皮肉な笑みを浮かべて見下ろす。  
「.....どうしてそれを明かす気になった」  
「そろそろ隠していられた状況じゃなくなってきた.....それに」  
結局ラズーンに近づけばわかってくる。  
「.....」  
アシャのことばにイルファはしばらく腕を組んで考え込んでいたが、やがてぐいと唇を結んで立ち上がった。  
「そうだな。それを知ったって、俺の好きなアシャにかわりはねえな」  
「...おい」  
「そうとも、ラズーンが何だ！ 愛は国境を越える、身分差なんかくそくらえだ！」  
「待て」  
「俺は誓う、この剣にかけて、お前と一緒にラズーンへ見事辿りついて見せるぞ！」  
「違う」  
俺が言いたかったのはだな。  
言いかけて、赤いリボンが結ばれたままになっている両刃の剣を誇らしげに振り回すイルファを眺め、  
「.....聞く気はないな?...」  
アシャは深く溜め息をついて諦めた。